表18 縄文時代中・後期出土土器観察表（5）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
46	294	W 5	XⅠ	5969	Ⅶ	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	295	U 2	XⅠ	一括	Ⅶ	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	296	X 5	XⅡ	一括	Ⅶ	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	297	X 6	XⅡ	6148	Ⅶ	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	298	V 1	XⅠ	1994	Ⅶ	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	299	W 5	XⅠ	5277	Ⅶ	褐灰	ｵﾘｰﾌﾞ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	300	X 5	XⅡ	6503	Ⅶ	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	301	W 2	XⅠ	1817	Ⅶ	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	302	X 2	XⅡ	2271	Ⅶ	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	303	W 2	X	1905	Ⅶ	灰黄褐	灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	304	V1,W2	XⅠ	43--, 1773	Ⅶ	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	305	Y 5	XⅡ	7029	Ⅶ	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	306	U 3	XⅠ	4094	Ⅶ	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	307	V 1	XⅠ	4192	Ⅶ	黒褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	308	V 1	XⅠ	4715	Ⅶ	暗灰黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	309	Y 5	XⅡ	6856	Ⅶ	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	310	Y 5	XⅡ	6487	Ⅶ	黒	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	311	U 2	XⅠ	4018	Ⅶ	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	312	V 2	XⅠ	3638	Ⅶ	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
	313	Y 4	XⅠ	1271	Ⅶ	浅黄橙	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	314	V 1	XⅠ	3910	Ⅶ	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	315	Y 1	XⅠ	3950	Ⅶ	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	316	X 5	XⅡ	一括	Ⅶ	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	317	X 2	X	1804	Ⅶ	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ｵﾘｰﾌﾞ黒	ナデ	ナデ	○	○						
	318	W 3	XⅠ	939	Ⅶ	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						ヘナタリによる条痕
47	319	W 5	XⅠ	一括	Ⅷ	黒褐	にぶい黄	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	320	X 5	XⅠ	5751	Ⅷ	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	321	Y 3	XⅡ	1517	Ⅷ	灰褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	322	Z 5	XⅠ	2396	Ⅷ	橙	橙	ミガキ	ナデ	○	○						
	323	V 1	XⅠ	4172	Ⅷ	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	324	W 2	X	745	Ⅷ	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	325	W 4	XⅠ	374	Ⅷ	黒褐	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	326	Y 4	XⅠ	1279	Ⅷ	灰黄褐	灰白	ナデ	ナデ	○	○						
	327	W 2	X	1864	Ⅷ	橙	黒	ナデ	ナデ	○	○						スス付着
	328	U 2	XⅠ	3804	Ⅷ	褐灰	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	329	Z 3	XⅠ	1019	Ⅷ	灰褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	330	Z 3	X	954	Ⅷ	明黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	331	X 6	XⅡ	6407	Ⅷ	灰褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	332	U 1	XⅠ	4291	Ⅷ	黒褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	333	X 5	XⅡ	一括	Ⅷ	黒褐	にぶい褐	ミガキ	ナデ	○	○						
	334	U 2	XⅠ	3724	Ⅷ	極暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	335	W 1	XⅠ	1365	Ⅷ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	336	W 5	XⅠ	5106	Ⅷ	黄灰	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
48	337	Y 4	XⅠ	1281	Ⅷ	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	338	Y 3	XⅠ	1985	Ⅷ	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	339	X 1	X	1346	Ⅷ	暗灰黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	340	V 1	XⅠ	4227	Ⅷ	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	341	W 2	XⅠ	2162	Ⅷ	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	342	W 2	XⅠ	2211	Ⅷ	灰黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○						
	343	V 1	XⅠ	4214	Ⅷ	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	344	W 2	XⅠ	4589	Ⅷ	にぶい黄褐	黄褐	ミガキ	ナデ	○	○						
	345	U 1	XⅠ	3868	Ⅷ	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	346	W 5	XⅠ	5827	Ⅷ	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	347	Y 4	XⅠ	2095	Ⅷ	灰黄褐	褐灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	348	V 1	XⅠ	4362	Ⅷ	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	349	U 1	XⅠ	3867	Ⅷ	灰黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○						
	350	Y 4	XⅠ	1070	Ⅷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	351	V 1	XⅠ	4185	Ⅷ	黄灰	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	352	Y 5	XⅡ	6470	Ⅷ	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	353	Z 3	X	1250	Ⅷ	橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	354	W 2	X	1915	Ⅷ	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	355	U 2	XⅠ	4065	Ⅷ	暗灰黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	356	W 5	X	5569	Ⅷ	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
49	357	V 2	XⅠ	4556,4566,4567,4568,4569,4723,4724,4725,4737	Ⅸ a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			9点接合
	358	Z 3	X	1957	Ⅸ a	褐灰	明褐	ナデ	条痕	○	○						
	359	W 2	XⅠ	1830	Ⅸ a	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
50	360	Z 4	XⅠ	1148, 1155	Ⅸ a	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	361	W 5	X.XⅠ	4984	Ⅸ a	にぶい黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	362	Z 3	X	950	Ⅸ a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○						接合
	363	Y 4	XⅠ	1077	Ⅸ a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	364	Z 4	XⅠ	1326 1144	Ⅸ a	明褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	365	Y 3	XⅡ	1590	Ⅸ a	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	366	Z 3	X	1234 1235	Ⅸ a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
51	367	X 2	X	1795	Ⅸ a	褐灰	明赤褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○			○			
	368	Y 3	XⅡ	1602	Ⅸ a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						

表19 縄文時代中・後期出土土器観察表（6）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	備考
51	369	Z 4	XⅠ	1151	Ⅸ a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	370	Z 3	XⅠ	1025	Ⅸ a	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	371	Z 3	X	1240	Ⅸ a	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	372	Z 3	X	1239	Ⅸ a	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	373	Y 3	XⅡ	1591	Ⅸ a	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	374	W 2	X	1920	Ⅸ a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	375	Z 4	XⅠ	1325	Ⅸ a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	376	Z 3	X	1244	Ⅸ a	灰褐	赤褐	ナデ	ハケ	○	○						
	377	Z 4	XⅠ	1181	Ⅸ a	にぶい赤褐	橙	ナデ後ハケ	ハケ	○	○						
	378	Y 3	XⅡ	1593	Ⅸ a	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	379	Y 2	XⅡ	1624	Ⅸ a	にぶい褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	380	Z 4	XⅠ	1135	Ⅸ a	暗赤褐	橙	ナデ後ハケ	ナデ	○	○			○			
52	381	Z 3	XⅠ	1030	Ⅸ a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	382	Y 4	XⅠ	2015	Ⅸ a	暗褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	383	W 2	XⅠ	887	Ⅸ a	褐	明黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	384	B 4	XⅠ	1188	Ⅸ a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	385	Z 3	X	1255	Ⅸ a	にぶい黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	386	Z 3	X	968	Ⅸ a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	387	Z 4	XⅠ	1156, 1157, 1158	Ⅸ a	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
53	388	Y 3	XⅡ	1592	Ⅸ a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	389	X 2	XⅠ	2188	Ⅸ a	橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	390	Z 4	XⅠ	1191, 1192	Ⅸ a	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	391	Z 4	XⅠ	1124, 1166	Ⅸ a	明赤褐	橙	条痕後ナデ	ナデ	○	○						接合
	392	Y 3	XⅡ	1599	Ⅸ b	赤褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	393	Z 3	X	1954	Ⅸ b	明赤褐	橙	ナデ後ハケ	ナデ	○	○						
	394	Y 3	X	936	Ⅸ b	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	395	Z 4	XⅠ	1179	Ⅸ b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	396	Z 3	X	1963	Ⅸ b	橙	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	397	Z 3	X	1933	Ⅸ b	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	398	W 2	XⅠ	909	Ⅸ b	灰オリーブ	オリーブ黒	ナデ	ナデ	○	○						
54	399	Y 2	XⅡ	1626	Ⅸ b	明赤褐	灰赤	ナデ	ナデ	○	○						
	400	W 1	XⅠ	1383	Ⅸ b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	401	Z 3	X	1224	Ⅸ b	赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	402	Z 3	X	1249	Ⅸ b	にぶい黄褐	明黄褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	403	W 2	X	1860, 1866	Ⅸ b	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	404	Z 4	XⅠ	1327	Ⅸ b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	405	W 1	XⅠ	2178, 1376	Ⅸ b	明黄褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	406	W 2	XⅠ	1764, 898	Ⅸ b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	407	U 2	Ⅵ	一括	Ⅸ b	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	408	Y 3	X	938	Ⅸ b	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	○	○						
	409	W 5	XⅠ	5232	Ⅸ b	明赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	410	Z 3	X	1425	Ⅸ b	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	411	Z 3	X	1211	Ⅸ b	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
55	412	Z 3	X	1934	Ⅸ b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	413	Z 3	X	1219	Ⅸ b	黒褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○						
	414	Z 3	X	1227	Ⅸ b	暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	415	Y 3	XⅡ	1600	Ⅸ b	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	416	Z 3	XⅠ	2326	Ⅸ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	417	V 1	XⅠ	一括	Ⅸ b	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	418	Z3,4	XⅠ	1428, 1113	Ⅸ b	黒褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
56	419	Y 3	XⅠ	1482	X a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	420	X 2	XⅡ	2266	X a	褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	421	X 6	XⅡ	6910 6911	X a	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
57	422	W 2	X	753	X a	にぶい黄褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	423	V 1	XⅠ	4299	X a	黒褐	にぶい黄	ナデ	条痕	○	○						
	424	W 1	XⅠ	4605	X a	黒褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	425	Y 5	XⅡ	7265, 7262	X a	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	426	Y 3	XⅠ	2012	X a	黒褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	427	X 6	XⅠ	6923	X a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	428	Y 3	XⅠ	1498	X a	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	429	U 1	XⅠ	3874	X a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	430	X 2	XⅡ	2268	X a	にぶい黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	431	W 5	XⅠ	5013	X a	黒褐	暗灰黄	ミガキ	ナデ	○	○						
	432	Z 3	X	―	X a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	433	W 3	XⅠ	615	X a	明赤褐	明赤褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	434	X 6	XⅡ	6140	X a	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	435	X 6	XⅡ	6303	X a	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	436	Y 3	XⅡ	1599	X a	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	437	Z 5	XⅠ	2378	X a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	438	Y 3	XⅡ	1593	X a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	439	X 6	XⅡ	6790	X a	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
58	440	W 1	X	3475	X a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	441	Z 4	XⅠ	1145	X a	赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	442	Y 3	XⅡ	1602	X a	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	443	W 2	XⅠ	4601	X a	明褐	明黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						

表20　縄文時代中・後期出土土器観察表（7）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
58	444	Y 2	XⅠ	1704	X a	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	445	Y 3	XⅠ	1971	X a	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	446	Y 3	XⅠ	1506	X a	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	447	Z 4	XⅠ	1324	X a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	448	W 2	XⅠ	4587, 4594, 4595	X a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	449	Y 3	XⅠ	1033, 1265	X a	にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
59	450	Z 3	X	1938	X a	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	451	X 4	XⅠ	476	X a	橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	452	X 2	XⅡ	2261	X a	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	453	Y 2	XⅠ	1717	X a	明褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	454	V 2	XⅠ	4264	X a	明赤褐	ｵﾘｰﾌﾞ褐	ナデ	条痕	○	○						
	455	Y 3	XⅡ	1607	X a	褐	橙	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	456	W 5	X	5591	X a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	457	V 2	XⅠ	4749	X a	明赤褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	458	W 1	XⅠ	1366	X a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	459	W 5	XⅠ	5095	X a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	460	Z 3	X	943	X a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	461	Y 4	XⅠ	1081	X a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	462	W 5	XⅠ	5336	X a	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
60	463	W 6	XⅠ	6046	X b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	464	V 1	XⅠ	4322	X b	にぶい褐	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	465	Y 6	XⅡ	7039	X b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	466	V 2	XⅠ	3845	X b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	467	Y 5	XⅡ	6966	X b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	468	W 5	XⅠ	5196	X b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	469	Y 5	XⅡ	7294	X b	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	470	V 1	X	3508	X b	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	471	X 5	XⅠ	一括	X b	明褐赤	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	472	Z 3	X	986	X b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	473	X 6	XⅡ	6806	X b	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	474	X 6	XⅡ	7207	X b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	475	V 2	XⅠ	4694	X b	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	476	W 2	XⅠ	1812, 1813	X b	灰ｵﾘｰﾌﾞ	橙	指頭圧痕	指頭圧痕後ナデ	○	○			○			接合
	477	Y 5	XⅡ	7129	X c	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	478	Y 2	XⅠ	1681, 2225	X c	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	479	X 2	XⅡ	2225	X c	灰褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
61	480	Y 3	XⅡ	1601	XⅠ a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	481	Y 3	XⅡ	1594	XⅠ a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	482	Z 4	XⅡ	1319	XⅠ a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	483	Z 3	X	947	XⅠ a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	484	Z 3	X	1212	XⅠ a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	485	V 1	XⅠ	3913	XⅠ a	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
62	486	Y 3	XⅠ	1034	XⅠ b	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	487	V 1	XⅠ	4151	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	488	V 1	XⅠ	3946	XⅠ b	にぶい黄橙	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	489	X 5	XⅠ	6672	XⅠ b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	490	X 5	XⅠ	5904	XⅠ b	褐灰	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	491	V 1	XⅠ	4648	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	492	Y 3	XⅡ	1588	XⅠ b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	493	V 1	XⅠ	3960	XⅠ b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	494	Y 3	XⅡ	1595	XⅠ b	橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	495	Y 3	XⅡ	1545	XⅠ b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	496	Y 3	XⅡ	1564	XⅠ b	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	497	X 2	X	1796	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	498	Y 5	XⅡ	7031	XⅠ b	橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	499	Z 3	XⅠ	1122	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	500	Y 3	XⅠ	1472	XⅠ b	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	501	Y 3	XⅠ	1264, 1036	XⅠ b	明赤褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						接合
	502	X 5	XⅠ	6591	XⅠ b	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	ナデ	○	○						
	503	X 6	XⅡ	6942	XⅠ b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
63	504	W 5	XⅠ	5234	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	505	U 3	XⅠ	4492	XⅠ b	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	506	W 2	XⅠ	888	XⅠ b	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	507	W 2	XⅠ	4445	XⅠ b	にぶい黄	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	508	W 2	XⅠ	1350, 1775	XⅠ b	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	509	V 1	XⅠ	43一	XⅠ b	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	510	Z 3	X	1417, 1418	XⅠ b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	511	Y 3	X	931, 930	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	512	W 5	XⅠ	5325	XⅠ b	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	513	Y 4	XⅠ	2099	XⅠ b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	514	Z 3	X	1237	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	515	W 2	X	726	XⅠ b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	516	U 2	XⅠ	3754	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	517	Z 3	X	1258	XⅠ b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	518	V1,W2	XⅠ	杭	XⅠ b	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						

表21　縄文時代中・後期出土土器観察表（8）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	備考
63	519	Z 3	X	1933, 1936	XⅠ b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
64	520	X5,6	XⅡ	6517, 6884	XⅠ b	にぶい橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	521	X 1	X	1350	XⅠ b	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	522	W 2	XⅠ	888, 885, 1811	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	523	X 5	XⅠ	5781	XⅠ b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	524	U 2	XⅠ	3792	XⅠ b	浅黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	525	Z 3	XⅠ	2320	XⅠ b	黒	黒褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						
	526	Z 3	X	1247	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	527	Y 5	XⅡ	6453	XⅠ b	褐灰	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	528	X 5	XⅠ	5927	XⅠ b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	529	X 5	XⅠ	5717	XⅠ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	530	V 1	XⅠ	4297	XⅠ b	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	531	X 5	XⅡ	7160	XⅠ b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ，指頭圧痕	○	○			○			
	532	Z 2	XⅠ	1752	XⅠ b	橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	533	Z 3	X	1252	XⅠ b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	534	X 5	XⅠ	6083	XⅠ b	黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	535	V 1	XⅠ	3938	XⅠ b	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	536	Y 4	XⅠ	1041	XⅠ b	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	537	X 6 V 2	XⅡ XⅠ	7292 4742	XⅠ b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	538	Y 4	X	42	XⅠ b	にぶい橙	にぶい赤褐	条痕後ナデ	条痕	○	○						
	539	U 3	X	2508	XⅠ b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	540	W 2	XⅠ	1884	XⅠ b	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	541	Y 3	XⅠ	2311	XⅠ b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	542	W 5	XⅠ	5265	XⅠ b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	543	X 6	XⅡ	6465	XⅠ b	赤褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	544	V 6	XⅡ	7918	XⅠ b	褐灰	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	545	X 5	XⅡ	6570	XⅠ b	灰黄褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	546	W 3	XⅠ	535	XⅠ b	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	547	Y 6	XⅡ	7083	XⅠ b	にぶい褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	548	W 5	XⅠ	5061, 4968, 5060	XⅠ b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合

表22　縄文時代晩期土器観察表（1）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	備考
65	549	Y 4	X	204, 205, 一括	XⅡ a	暗灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	550	Y 14	XⅠ	2346	XⅡ a	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	551	V 2	XⅠ	4271	XⅡ a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	552	W 2	X	3164	XⅡ a	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	553	V 3	X	一括	XⅡ a	黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	554	3 V 2 3	XⅠ XⅠ X	4772 4752 2667	XⅡ a	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	555	Z 3	X	969	XⅡ a	黄灰	にぶい黄	ナデ	条痕後ナデ	○	○			○			
	556	V 2	XⅠ	4752	XⅡ a	にぶい黄	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						外面ｽｽ付着
66	557	X 5	X	5488	XⅡ a	にぶい黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	558	V 2	X	2779	XⅡ a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	559	Y 4	X	229	XⅡ a	灰	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ	○	○						
	560	W 2	X	3488, 3424	XⅡ a	黄褐	ｵﾘｰﾌﾞ黒	ナデ	ナデ	○	○						接合
	561	Z 4	XⅠ	1183	XⅡ a	黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	562	V 2	XⅠ	2684	XⅡ a	灰	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ナデ	ナデ	○	○						
	563	Y 4	XⅠ	1074	XⅡ a	灰	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	564	V 2	X	2427	XⅡ a	ｵﾘｰﾌﾞ黒	ｵﾘｰﾌﾞ黄	ナデ	ナデ	○	○						
	565	X 5	X	5559	XⅡ a	灰	灰黄	ナデ	条痕後ナデ	○	○			○			
	566	X 6	XⅠ	6004	XⅡ a	黒	灰褐	ナデ	ナデ	○	○						
	567	X 6	XⅠ	6010, 6012	XⅡ a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	568	W 2	X	792	XⅡ a	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	569	X 2	XⅡ	2274	XⅡ a	灰黄	にぶい黄褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	570	X 6	X	5564	XⅡ a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	571	X 5	XⅠ	5815	XⅡ a	黒褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	572	Y 3	XⅠ	1495	XⅡ a	暗褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
67	573	X 6	X	5565	XⅡ a	黄灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	574	V 2	X	3482	XⅡ a	暗褐	ｵﾘｰﾌﾞ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	575	X 5	XⅠ	6284	XⅡ a	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	576	Y 3	XⅠ	1505, 1508	XⅡ a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	577	V 2	X	3483	XⅡ a	黒褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
68	578	X 4	XⅠ	326	XⅡ a	にぶい黄褐	黒褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	579	X 5	XⅠ	一括	XⅡ a	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	580	U 3	X	2720	XⅡ a	明黄褐	暗灰黄	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	581	Y 4	X	205, 一括	XⅡ a	にぶい黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						接合
	582	W 3 X 5	XⅠ	357 5864	XⅡ a	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	583	Y 4	X	5	XⅡ a	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	584	V 3	X	2937	XⅡ a	にぶい黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						

表23 縄文時代晩期出土土器観察表（2）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
68	585	W 2	XⅡ	ー	XⅡ a	明褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	586	V 3	X XⅠ	2663, 2662, 2914 4772	XⅡ a	橙	明黄褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						4点接合
	587	W 2	XⅠ	4275	XⅡ a	にぶい黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
69	588	X 4	X XⅠ	94 一括	XⅡ b	にぶい黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	589	X 5	X	5451	XⅡ b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○		○				
	590	Y 4	X	11, 31, 32	XⅡ b	にぶい黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						3点接合
	591	X 2	XⅠ	2193	XⅡ b	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	592	V 3	X	3332	XⅡ b	にぶい黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○							ススト付着
	593	V 2 3	X	2444, 2013 2469, 2467, 2213	XⅡ b	灰オリーブ	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						5点接合
	594	Z 5	X	一括	XⅡ b	灰黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	595	U 2	X	2527	XⅡ b	浅黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						
	596	U 2	X	3074	XⅡ b	黒褐	黄灰	ミガキ	ミガキ	○	○						
	597	X 6	X	6183	XⅡ b	黄褐	黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	598	Y 3	XⅠ	1462	XⅡ b	黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	599	V 1	X	2602	XⅡ b	暗オリーブ褐	明黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	600	Y 5	X	5474	XⅡ b	にぶい黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						
	601	U 3	X	2894	XⅡ b	黒褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○			
	602	V 4	X	3309	XⅡ b	黒	黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	603	W 6	X	5597	XⅡ b	オリーブ黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	604	X 5	X	一括	XⅡ b	黄褐	黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	605	W 2	XⅠ	4702	XⅡ b	黒褐	暗灰黄	ミガキ	ミガキ	○	○						
	606	Z 14	X	一括	XⅡ b	黒	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	607	X 6	XⅠ	6932	XⅡ b	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	608	X 2	XⅠ	2227	XⅡ b	灰	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
70	609	V 3 U 2	X	2865 3031	XⅡ b	浅黄	浅黄	ミガキ	ミガキ	○	○						接合
	610	V 3	X	2691	XⅡ b	にぶい黄橙	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						虫喰い跡
	611	X 5	XⅠ	5867, 5872	XⅡ b	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○			接合
	612	Z 3	X	976	XⅡ b	橙	橙	ミガキ	ミガキ	○	○						
	613	Y 5	X	5471	XⅡ b	暗灰黄	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	614	V 3	X	2918	XⅡ b	黒褐	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	615	Y 5	XⅠ	5961, 5962	XⅡ b	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○			接合
	616	U 2	X	3463	XⅡ b	にぶい黄橙	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	617	V 2 V 3 U 3 V 3	X	2450 2704 2721 2482	XⅡ b	黒	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						4点接合
	618	U 3	X	一括	XⅡ b	オリーブ黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	619	U 3	X	4809	XⅡ b	浅黄	浅黄	ミガキ	ミガキ	○	○			○			
	620	X 5	XⅠ	5869	XⅡ c	黒褐	黒褐	ナデ	ミガキ	○	○						

表24 縄文時代土製品観察表

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
71	621	X 5	XⅡ	7307	ー	橙	ー	条痕後ナデ	ー	○	○						足形土製品
72	622	X 5	XⅡ	一括	ー	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	623	X 4	XⅠ	5222	ー	黄灰	暗灰黄	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	624	X 1	XⅠ	1347	ー	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	625	X 6	XⅡ	6626	ー	暗褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	626	X 6	XⅠ	6016	ー	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	627	X 5	XⅡ	7242	ー	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	628	W 3	XⅠ	1851	ー	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	629	X 4	XⅠ	5227	ー	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	630	X 5	XⅡ	6624	ー	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	631	X 6	XⅡ	一括	ー	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	632	U 1	XⅠ	4126	ー	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	633	X 4	XⅠ	5225	ー	にぶい褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	634	Y 5	XⅡ	6850	ー	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	635	X 5	XⅡ	6567	ー	褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	636	X 5	XⅡ	6519	ー	浅黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	637	X 6	XⅡ	6629	ー	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	638	X 5	XⅡ	7258	ー	褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	639	U 2	XⅠ	3997	ー	明赤褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	640	19T	Ⅲ	1170	ー	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	641	X 5	XⅡ	6534	ー	にぶい橙	黒褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	642	U 1	XⅠ	3608	ー	暗赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	643	W 5	XⅠ	5005	ー	明赤褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	644	W 6	X	一括	ー	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						

表25　縄文時代出土石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層位	器種	分類	石材Ⅰ	石材Ⅱ	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号
74	645	Y 3	XⅡ	石鏃	Ⅱ	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	1.8	1.3	0.3	0.51	1523
	646	V 3	XⅠ	石鏃	Ⅱ	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	2.2	1.4	0.2	0.48	4527
	647	Y 3	Ⅵ	石鏃	Ⅱ	黒曜石(針尾)	Ⅴ	2.4	1.9	0.3	1.05	−
	648	W 2	Ⅹ	石鏃	Ⅱ	頁岩	Ⅰ	2.2	1.7	0.4	1.02	1894
	649	Y 2	XⅡ	石鏃	Ⅰ	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	2.7	2.6	0.6	3.76	1657
	650	W 2	Ⅹ	石鏃	Ⅳ−Ⅰbc	めのう(玉髄)	―	3.1	1.5	0.3	1.37	1896
75	651	U 2	Ⅹ	鋸歯尖頭器	―	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	3.6	2.5	0.6	3.92	2540
	652	V 2	Ⅹ	鋸歯尖頭器	―	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	4.7	3.1	1.05	10.3	3252
	653	V 2	XⅠ	鋸歯縁石器	―	黒曜石(腰岳)	Ⅳ	2.1	1.1	0.3	0.56	3827
	654	X 5	XⅠ	鋸歯縁石器	―	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	2	1.1	0.5	0.65	5769
	655	V 1	XⅠ	鋸歯縁石器	―	黒曜石(針尾)	Ⅴ	2.7	1.1	0.4	0.86	4387
	656	U 2	Ⅹ	鋸歯縁石器	―	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	3.7	1.5	0.6	1.56	3072
76	657	Y 2	XⅡ	石匙	Ⅱb	安山岩(サヌカイト)	Ⅳ	4.1	4.7	1.15	18.7	1667
	658	X 5	XⅠ	二次加工剥片	―	黒曜石(腰岳)	Ⅳ	2.1	2	1.1	3.74	5923
	659	A 27	Ⅴ	スクレイパー	―	黒曜石(腰岳)	Ⅳ	4.2	4	1	17.06	−
	660	U 2	Ⅹ	楔形石器	―	黒曜石(上牛鼻)	Ⅰ	1.9	1.4	0.9	2.31	3053
77	661	Z 3	Ⅲ	石核	Ⅰa	黒曜石(上牛鼻)	Ⅰ	2.9	3.1	1.8	14.57	−
	662	X 6	Ⅶ	石核	Ⅱc	黒曜石(上牛鼻)	Ⅰ	3.6	2.7	1.6	14.52	7055
	663	Y 2	Ⅶ	石核	Ⅲc	安山岩(サヌカイト)	Ⅰa	6.5	7.2	3.3	147.3	1682
78	664	a 5	Ⅵ	磨製横刃型石器	―	頁岩	Ⅲ	7.8	5.2	1.1	51.88	−
	665	V 1	XⅠ	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	―	4.75	2.55	0.8	14.23	4175
	666	W 5	XⅠ	磨製石斧	Ⅱ	頁岩	Ⅰ	6.3	1.8	0.7	11.89	−
	667	X 3	Ⅷ	磨製石斧	Ⅱ	頁岩	Ⅱ	5.2	1.8	1	14.97	−
	668	a 3	Ⅷ	磨製石斧	Ⅰ	変成岩	―	9.2	4.4	1.8	107.6	−
	669	Y 4	XⅠ	磨製石斧	Ⅰ	ホルンフェルス	―	6.4	6	2.8	140.8	2097
	670	W 5	XⅠ	磨製石斧	Ⅰ	頁岩	Ⅱ	5.3	6.8	2.2	84.1	5138
	671	W 2	Ⅹ	磨製石斧	Ⅰ	ホルンフェルス	―	26.4	6	5.1	1238.2	800
	672	X 5	XⅡ	磨製石斧	Ⅰ	安山岩	Ⅳ	15.4	6.9	4.3	606.7	6372
	673	Y 5	XⅡ	磨製石斧	Ⅱ	砂岩	―	9.3	6.7	3.7	311.8	6477
	674	V 1	XⅠ	磨製石斧	Ⅲ	頁岩	Ⅱ	7.2	3.3	0.6	15.08	4350
	675	X 6	XⅡ	磨製石斧片	Ⅲ	頁岩	Ⅰ	10.9	4.8	2.6	182.4	6800
	676	X 3	Ⅵb	磨製石斧片	―	頁岩	Ⅲ	5.4	3.2	0.6	9.18	−
	677	W 2	Ⅹ	磨製石斧片	―	頁岩	Ⅱ	4.2	4.1	0.85	21.86	760
79	678	X 6	Ⅹ	礫器	Ⅴ	砂岩	―	6.9	7.4	2.2	121.55	5526
	679	Y 3	XⅡ	削器	Ⅵ	安山岩(サヌカイト)	Ⅱ	11.6	6.7	2.1	178.5	1515
	680	Y 4	XⅠ	磨石	Ⅰb	安山岩	Ⅳ	8.4	7.3	3.9	338.7	2073
	681	X 1	Ⅵ	磨石	Ⅱb	砂岩	―	8.9	9.8	4.9	473.4	−
	682	X 5	XⅠ	磨石	Ⅱa	砂岩	―	9.6	6.6	4.5	389	6682
	683	Y 2	XⅠ	磨石	Ⅱb	砂岩	―	10	10.45	4.65	810.9	1724
	684	W 2	Ⅵ	磨石	Ⅱb	砂岩	―	12.6	7.7	3.9	601.7	−
	685	Y 5	Ⅹ	磨石	Ⅱb	砂岩	―	12.4	8.7	4.1	588.8	5473
80	686	X 6	XⅡ	磨石	Ⅱb	砂岩	―	10.5	7	3.4	318.3	6640
	687	W 2	Ⅵ	敲石	Ⅲ	砂岩	―	11.4	4.4	3.6	252	−
	688	J 30	Ⅲc	敲石	Ⅲ	砂岩	―	15.6	2.95	3.75	246	272
	689	a 2	Ⅵb	敲石	Ⅲ	頁岩	Ⅰ	9.6	2.95	3.3	133.75	−
	690	X 2	Ⅵ	敲石	Ⅲ	頁岩	Ⅱ	7.8	3	1.2	42.42	−
	691	Y 2	XⅠ	砥石	―	砂岩	―	11.4	5.6	2.2	335.4	1718
81	692	X 6	XⅡ	石錘	Ⅰa	頁岩	Ⅱ	4.2	6.9	1.7	71.9	6625
	693	W 3	Ⅹ	石錘	Ⅰa	安山岩	Ⅳ	9.1	9.97	2.5	266.8	278

第６章　弥生・古墳時代の調査（Ａ地点）

第１節　調査の概要

弥生時代・古墳時代は，Ｖ層を包含層とする。遺構はともに検出されず，遺物は土器がほとんどである。弥生時代の土器はⅠ類からⅦ類とし，古墳時代の土器はⅧ類・Ⅸ類に分類した。

第２節　遺物

弥生時代・古墳時代の遺物包含層での出土状況は，Ｖ層を中心に遺物の出土が見られた。包含層の出土状況は小破片が多い。これらに関しては，区一括で取り上げを行い，比較的大きい破片については，番号を付けて取り上げを実施した。

包含層の概要としては，弥生時代前期から古墳時代後期の遺物が出土している。

１　甕形土器

甕形土器は，Ⅰ類からⅨ類に分類した。

⑴ Ⅰ類（第82図694・695）

口縁部に刻目突帯が貼り付けられた土器である。694は，口縁部が直立し，棒状工具で刺突される。695は，口縁端部に刻目突帯が施され，口唇部は平坦になっている。

⑵ Ⅱ類（第82図696～699）

口縁端部が逆Ｌ字状になるもので断面が丸みを帯びる三角形状，方形状を呈するタイプに分けられる。また，口縁端部がまっすぐ伸びるものと上方へあがるものがある。696・697は，口縁部断面が丸みを帯び，口唇部の上面は平坦になっている。口縁部外面は，丁寧なナデ調整が施されている。698・699は，口縁部（突帯）の断面が方形に近く，わずかに凹みがある。口縁部上面は凹み，内側は強く張り出し尖っている。口唇部は丸く仕上げられている。698は，口縁部上面に沈線が施されている。

⑶ Ⅲ類（第82図700～702）

口縁部は，肥厚して逆Ｌ字状になっている。口縁部上面は凹み，内側は強く張り出し尖っている。口唇部は丸く仕上げられている。700・701は，口縁部内側の張り出しが強く，上面に凹みがある。702は，口縁部内側への張り出しは小さく，口縁部が上方へ立ち上がっている。

⑷ Ⅳ類（第82図703）

Ⅳ類は１点のみである。703は，口縁部外面は逆Ｌ字状になっている。口縁部内側への張り出しは弱く，口唇部は丸くなっている。内外面ともに赤色顔料が塗布されている。口縁部上面には，暗文が施され，丁寧にミガキ調整が施されている。

⑸ Ⅴ類（第82図704）

Ⅴ類は１点のみである。704は，口縁部はくの字状で，内側への張り出しは小さいが，明瞭な稜が残る。口縁部上面は平坦で，直線的に伸びている。口縁部は細長く，口縁部下に断面三角形の突帯が廻っている。

⑹ Ⅵ類（第82図705～707）

口縁部がくの字状に強く外反し，口縁部内面に稜線が認められる。705は，口縁部内面に明確な稜線が確認できる。胴部はあまり膨らまず，直線的に立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。口縁部上面に，赤色顔料が塗布される。屈曲部外面付近にはススが付着している。屈曲部から口唇部の内外面には，横方向にナデ調整が施され，屈曲部から胴部内面にはハケ目調整が施されている。706は，口縁部内面に稜線は認められるが屈曲は弱い。胴部はわずかに膨らみ，口縁端部は丸みを帯びる。屈曲部から胴部への内外面には工具によるナデ調整が施されている。707は，口縁部片で，くの字状の外反が弱い。口縁部内面に稜線は認められるが，張り出しは見られない。

⑺ Ⅶ類（第82図708～第83図710）

口縁部がくの字状に外反するものである。口縁部内面に弱い稜が見られる。708・710は，胴部がわずかに膨らみ，口唇部は平坦でやや丸みを帯びる。屈曲部から口唇部の外面は，横方向にナデ調整が施されている。709は，胴部があまり膨らまないタイプである。屈曲部外面は縦方向にハケ目調整が施されている。

⑻ Ⅷ類（第83図711～715）

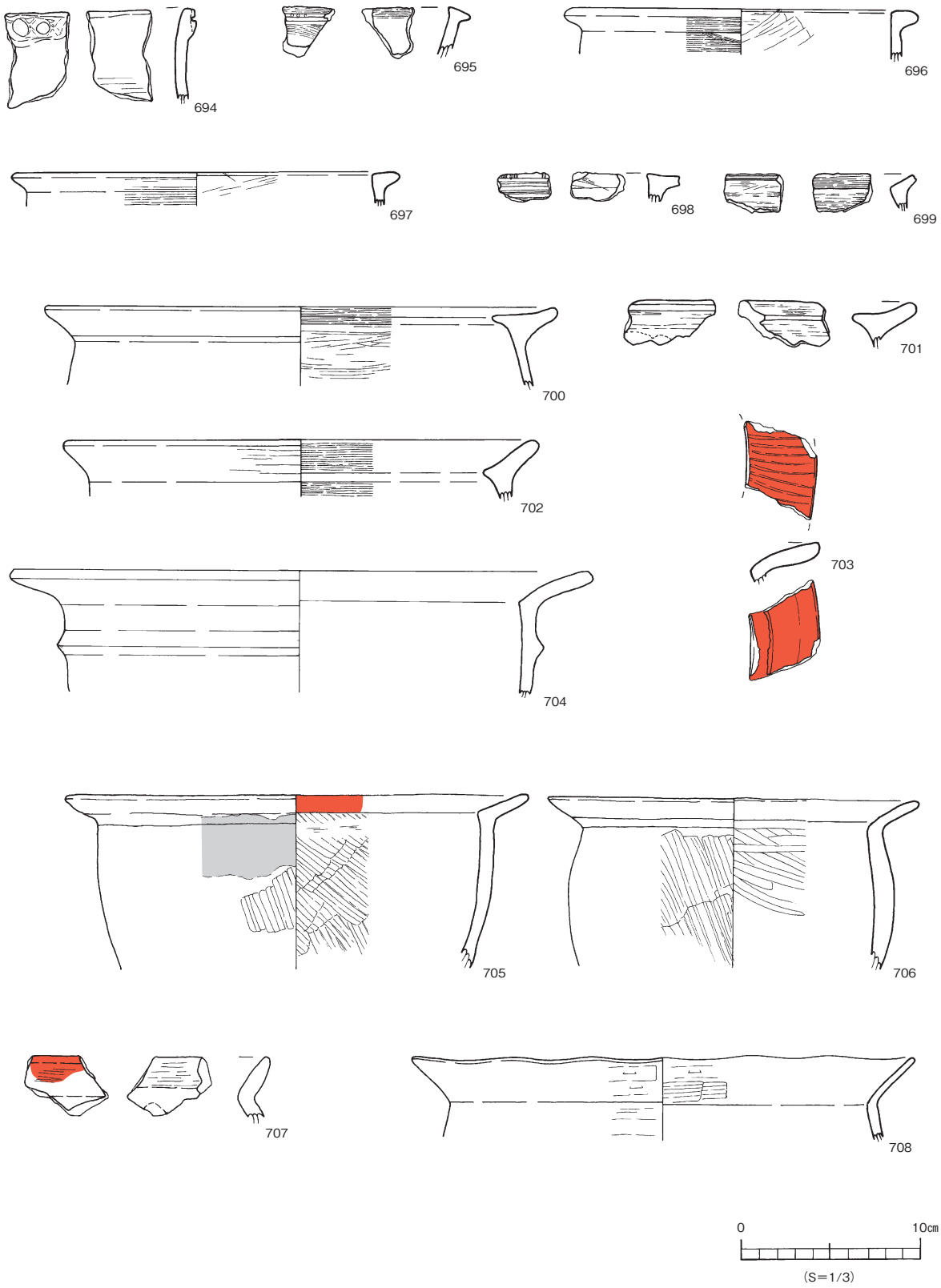
口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁部の稜はほとんど見られない。712は，口縁部がゆるやかに外反するものである。頸部はしまり，胴部が膨らみ直線的に底部へ至る。内外面ともにハケ目調整が施されている。713は，口縁部がゆるやかに外反し，口唇部は丸みを帯びる。屈曲部から口唇部に向かって縦方向のハケ目調整の後ナデ調整が施されている。

⑼ Ⅸ類（第83図716～721）

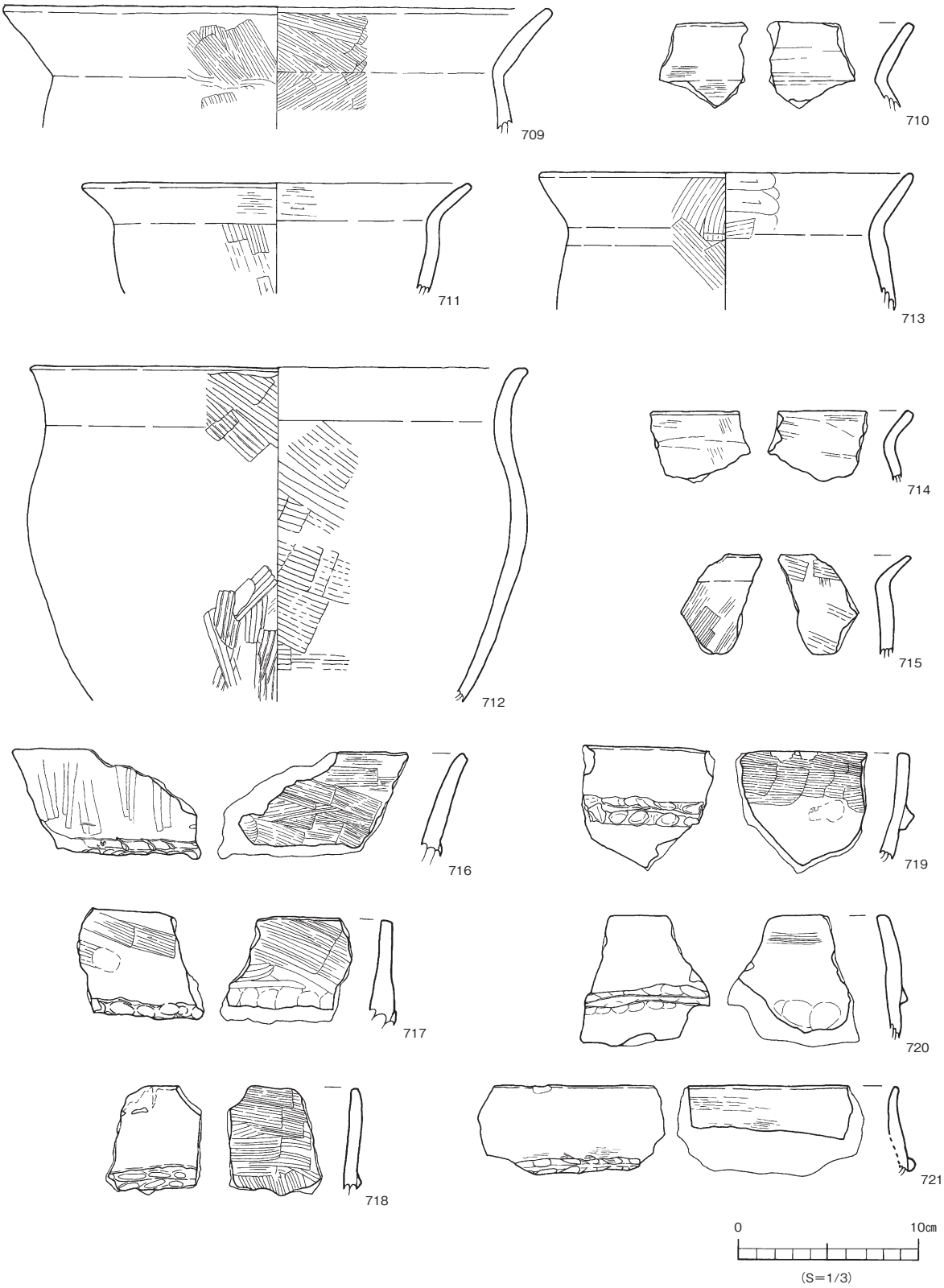
口縁が直立，もしくは内湾するものである。外面に１条の突帯が施される。719は，口縁部が直立し，外面に１条の絡縄突帯が施されている。内面に横方向のハケ目調整が施されている。720・721は，口縁部が内湾し，外面に１条の絡縄突帯が施され，棒状工具で刻目が施されている。

⑽ 胴部（第84図722～724）

722～724は胴部片である。722は，絡縄突帯が施されている。外面は，ナデ調整で仕上げられ指頭圧痕が見られる。



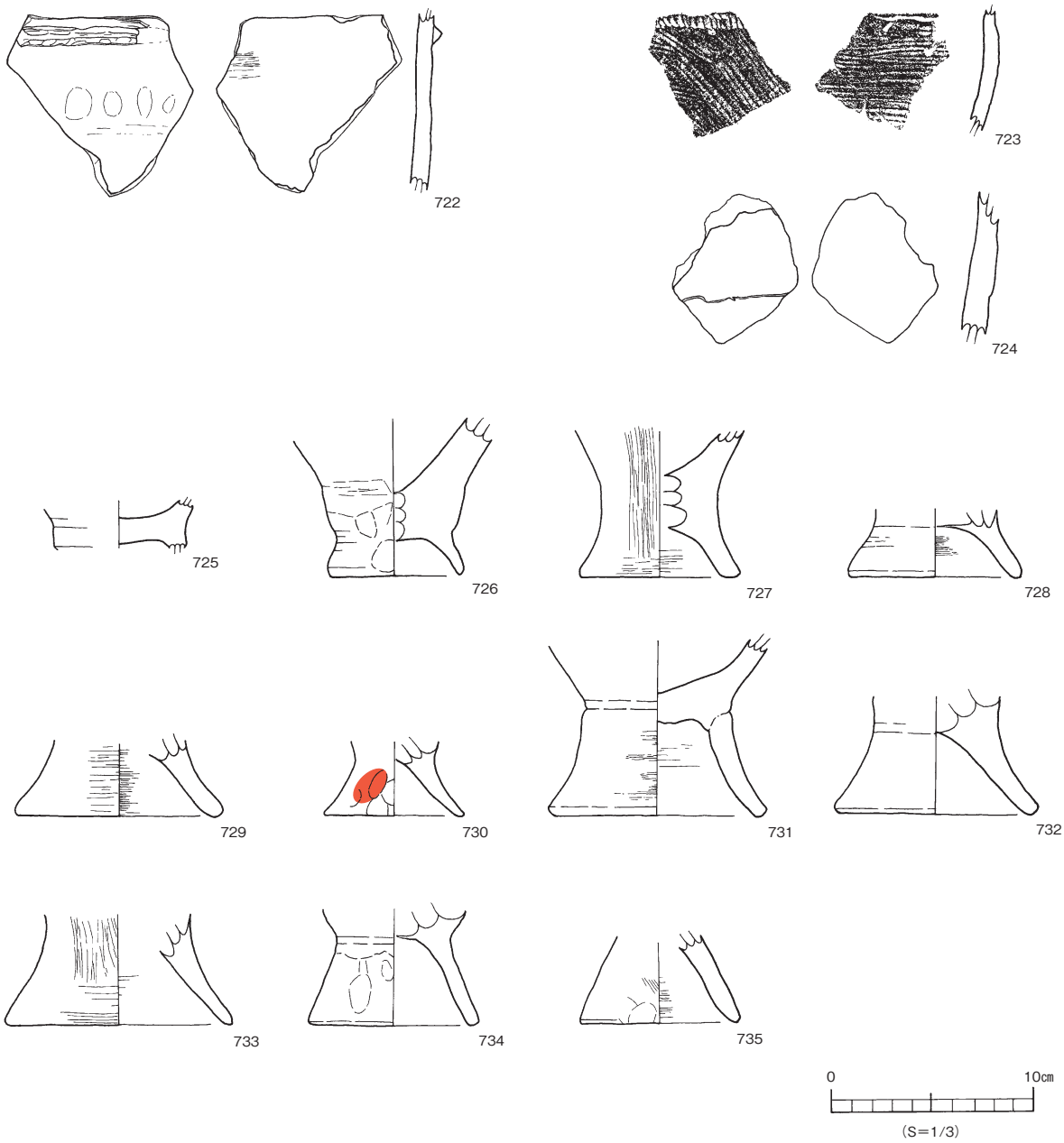
第82図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（1）



第83図　古墳時代出土遺物実測図（2）

⑾ 底部（第84図725～735）

底部は中空の脚台である。725～735は直線的に開く低脚のタイプである。726の天井部は平坦になっている。外面は横方向にナデ調整が施され，指頭圧痕が見られる。729～735は，やや高い脚である。731は，やや外反気味に開く。天井部は平坦で，内外面とも横方向にナデ調整が施されている。



第84図　古墳時代出土遺物実測図（3）

２　壺形土器（第85図736～第87図754）

壺形土器については，全体形状の把握できるものが少なく，分類はできなかった。

736は，頸部から胴部にかけての破片である。外面には赤色顔料が塗布され，ミガキ調整が施されている。737～740は口縁部片である。737・738は口縁部が頸部から直立気味に外反するものである。737は頸部に１条の絡縄突帯が廻る。739・740は湾曲して外反し，口唇部が丸みを帯びる。739の外面はケズリ調整が施されている。741～745は胴部～底部である。741は胴部が膨らみ，平底のタイプである。内外面ともにハケ目後ナデ調整が施されている。胴部上半に炭化物の付着がみられる。742は，頸部から胴部上半で，胴部は膨らみ１条の刻目突帯が廻る。743は，胴部の最大径が上方にあり，肩が張るタイプである。746～751は，胴部片である。747は，断面が四角形の突帯が廻り，大型の壺形土器と考えられる。746・748・751は断面三角形の突帯が廻るものである。746は，突帯の外面にヘラ状工具により左斜め方向の刻目が施されている。752～754は，壺形土器の底部である。いずれも平底で，754はやや上げ底状になっている。

３　鉢形土器（第87図755～757）

755は，口縁端部が外側へ屈曲し口唇部は丸みを帯びる。756は，底部から直線的に立ち上がり，口縁端部は直立し平坦となっている。757は，口縁部がやや内湾する。脚台は付かず，器形はコップ状と思われる。

４　高坏形土器（第87図758～760）

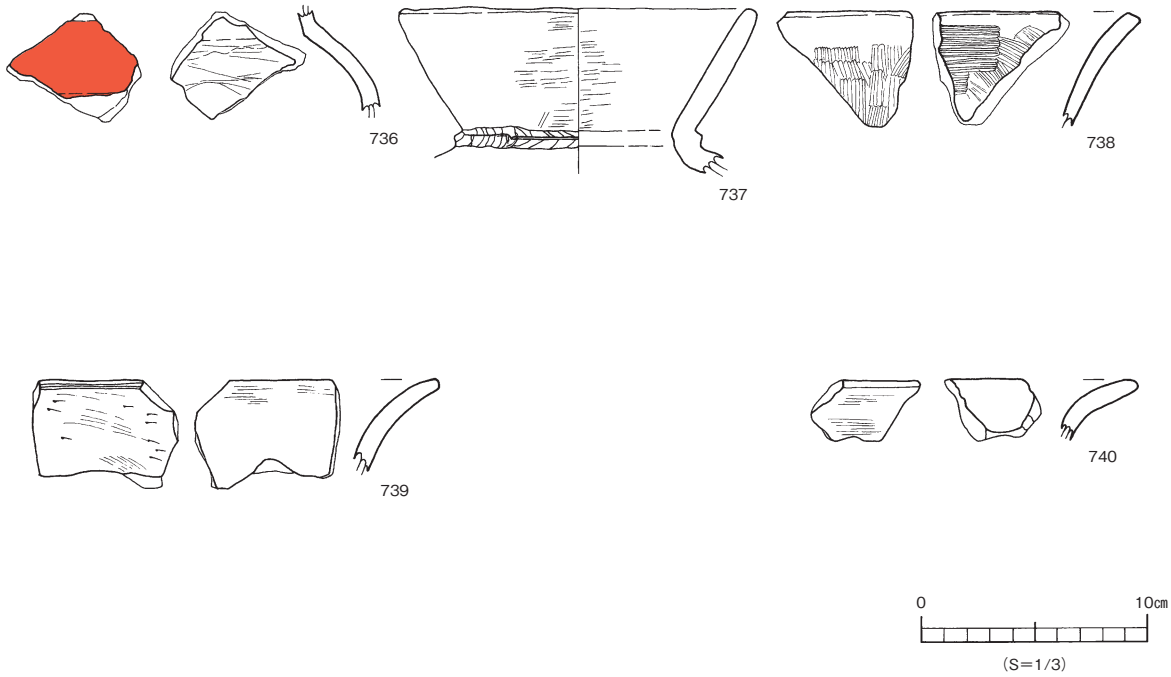
758・759は，坏部で口縁部に向かってゆるやかに内湾し，椀状を呈する。外面には赤色顔料が塗布され，ミガキ調整で仕上げられている。760は，脚部である。上部から接地面方向にまっすぐ下がり，裾部は外へ広がると考えられる。

５　甑形土器（第87図761）

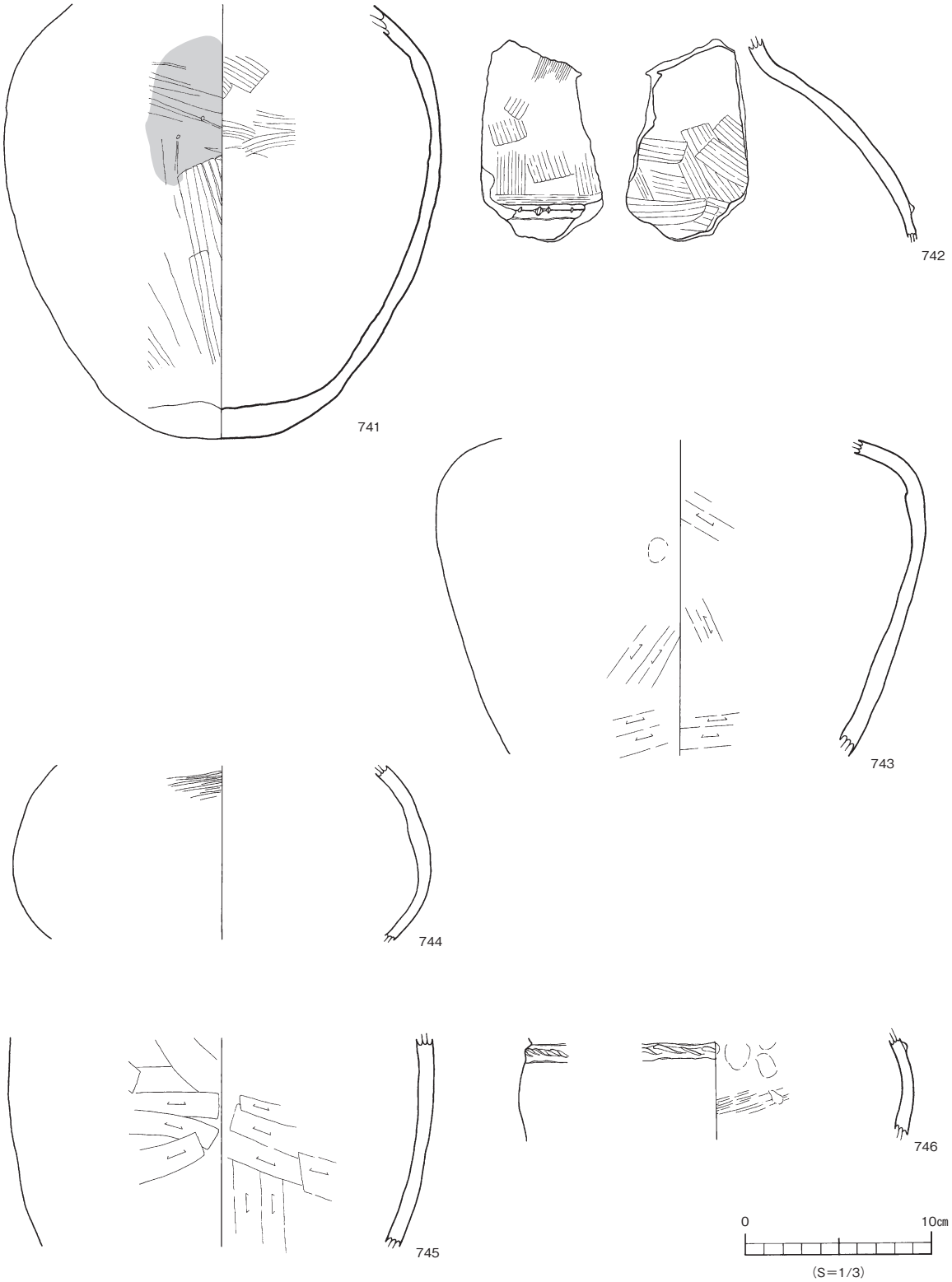
761は，口径22㎝・器高13.7㎝・底径７㎝の「つつぬけタイプ」である。底部からゆるやかに立ち上がり，口唇部はやや尖り気味となっている。蒸気孔端部は，指頭圧痕が確認できる。内外面は，ナデや工具ナデで仕上げられている。

６　手づくね土器（第87図762～764）

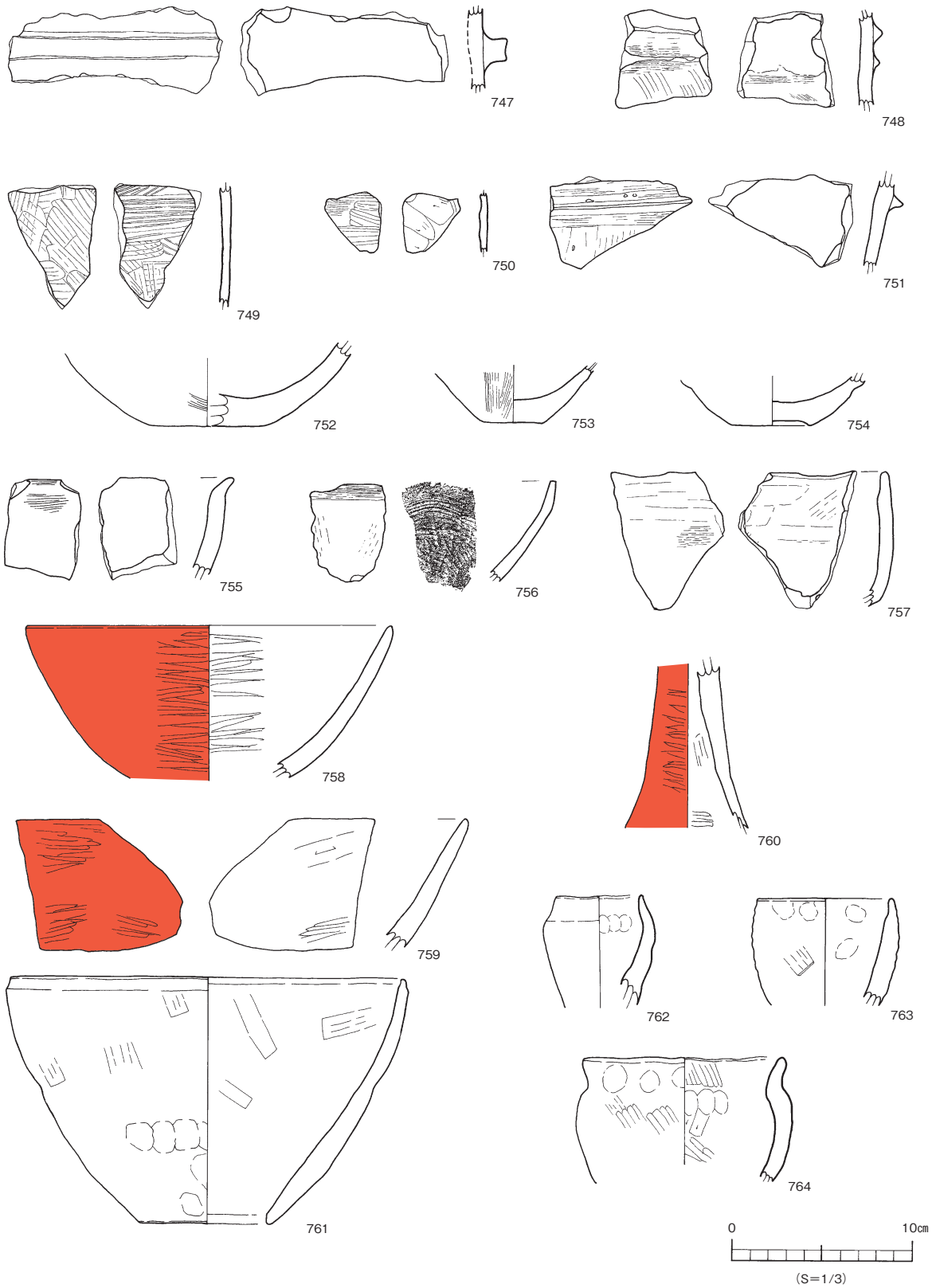
口縁部が内湾するもの（762），直立するもの（763），外反するもの（764）がある。



第85図　古墳時代出土遺物実測図（４）



第86図　古墳時代出土遺物実測図（５）



第87図　古墳時代出土遺物実測図（6）

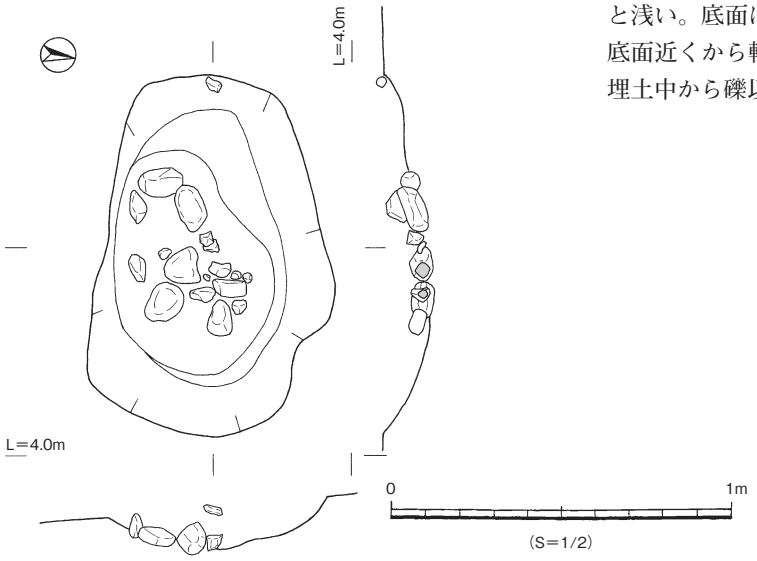
表26　弥生・古墳時代出土遺物観察表

挿図	番号	出土区		層	取上番号	器種	類	部位	色調		調整		胎土							備考
									外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
82	694	D	27	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	695	D	25	Ⅱb	一括	甕形土器	Ⅰ	口縁	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○							
	696	J	30	Ⅲ	150	甕形土器	Ⅱ	口縁	黒	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	697	K	30	Ⅱb	一括	甕形土器	Ⅱ	口縁	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	698	K	30	Ⅲ	99	甕形土器	Ⅱ	口縁	黒	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	699	K	30	Ⅲ	114	甕形土器	Ⅱ	口縁	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ				○				
	700	J	30	Ⅲc	176	甕形土器	Ⅲ	口縁	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	701	J	30	Ⅲc	246	甕形土器	Ⅲ	口縁	にぶい褐	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	702	D	27	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅲ	口縁	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	703	K	30	Ⅲ	124	甕形土器	Ⅳ	口縁	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ	○	○						赤色顔料，暗文
	704	D	28	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅴ	口縁	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	705	J	30	Ⅲc	260	甕形土器	Ⅵ	口縁	にぶい黄橙	明黄褐	横ナデ	ハケ目横ナデ	○							ススト付着，赤色顔料
	706	J	30	Ⅲc	267	甕形土器	Ⅵ	口縁	赤褐	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	707	K	30	Ⅲ	107	甕形土器	Ⅵ	口縁	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○							赤色顔料
	708	N	2	Ⅶ	一括	甕形土器	Ⅶ	口縁	黒褐	褐	工具ナデ	ナデ	○	○						
83	709	N	2	Ⅶ	一括	甕形土器	Ⅶ	口縁	褐	にぶい橙	ハケ目，ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	710	N	2	Ⅶ	一括	甕形土器	Ⅶ	口縁	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	711	J	30	Ⅲc	243	甕形土器	Ⅷ	口縁	黒褐	暗褐	工具ナデ，ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○						
	712	B	31	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅷ	口縁	橙	橙	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	713	F	28	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅷ	口縁	にぶい橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	714	K	30	Ⅱc	14	甕形土器	Ⅷ	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目	○	○	○					
	715	K	30	Ⅲc	223	甕形土器	Ⅷ	口縁	浅黄	にぶい橙	ナデ，ハケ目	ナデ，ハケ目	○	○						
	716	D	28	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅸ	口縁	にぶい黄橙	橙	工具ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						絡縄突帯
	717	D	26	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅸ	口縁	橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						絡縄突帯
	718	J	30	Ⅲc	249	甕形土器	Ⅸ	口縁	浅黄橙	明黄褐	ナデ	ハケ目		○						絡縄突帯
	719	C	28	Ⅲ	一括	甕形土器	Ⅸ	口縁	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		○						絡縄突帯
	720	F	26	Ⅱb	一括	甕形土器	Ⅸ	口縁	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ，指頭圧痕	○	○						絡縄突帯
	721	J	30	Ⅲc	257 258	甕形土器	Ⅸ	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○							絡縄突帯
84	722	F	27	Ⅱb	一括	甕形土器	―	胴部	淡黄	浅黄	ナデ，指頭圧痕	ナデ	○	○						絡縄突帯
	723	C	23	Ⅱb	一括	甕形土器	―	胴部	にぶい褐	黒	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	724	J	30	Ⅲc	一括	甕形土器	―	胴部	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	725	A	27	Ⅲ	一括	甕形土器	―	脚部	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	726	J	30	Ⅲc	191	甕形土器	―	脚部	橙	橙	指頭圧痕，ナデ	ナデ	○	○						
	727	J	30	Ⅲc	283	甕形土器	―	脚部	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
	728	J	30	Ⅲc	273	甕形土器	―	脚部	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	729	Ⅰ J	30	Ⅲc	255 270	甕形土器	―	脚部	黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	730	D	28	Ⅲ	一括	甕形土器	―	脚部	にぶい黄橙	黄灰	ナデ，指頭圧痕	ナデ	○	○						赤色顔料
	731	J	30	Ⅲc	274	甕形土器	―	脚部	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ナデ	○							
	732	D	27	Ⅲ	一括	甕形土器	―	脚部	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	733	N	2	Ⅶ	一括	甕形土器	―	脚部	橙	明黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	734	A	27	Ⅲ	一括	甕形土器	―	脚部	橙	にぶい橙	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	○	○						
	735	J	30	Ⅲc	251	甕形土器	―	脚部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ，指頭圧痕	ナデ								
85	736	J	30	Ⅲc	一括	壺形土器	―	頸部	にぶい赤褐	褐灰	ミガキ	ナデ	○							赤色顔料
	737	E	29	Ⅲ	一括	壺形土器	―	口縁	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	738	F	26	Ⅱb	一括	壺形土器	―	口縁	橙	橙	ハケ目	ハケ目	○	○						
	739	C	23	Ⅱb	一括	壺形土器	―	口縁	橙	灰白	ケズリ，ナデ	ナデ	○							
	740	J	30	Ⅲc	220	壺形土器	―	口縁	淡橙	淡橙	工具ナデ	ナデ	○							
86	741	J	30	Ⅲc	189	壺形土器	―	肩部～底部	橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						ススト付着
	742	B	24	Ⅱb	一括	壺形土器	―	肩部	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケ目	ハケ目	○	○						
	743	J	30	Ⅲc	178,273	壺形土器	―	胴部	にぶい黄橙	黄橙	ナデ，指頭圧痕	ナデ	○	○						
	744	J	30	Ⅲc	182	壺形土器	―	胴部	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	745	J	30	Ⅲc	177 278 一括	壺形土器	―	胴部	明黄褐	浅黄	工具ナデ	工具ナデ		○	○		○			
	746	C	23	Ⅱb	一括	壺形土器	―	胴部	橙	橙	ナデ	ナデ，指頭圧痕	○	○	○		○			刻目突帯
87	747	J	30	Ⅲc	204	壺形土器	―	胴部	橙	橙	ナデ，ハケ目	ナデ，ハケ目	○	○						突帯
	748	N	2	Ⅶ	一括	壺形土器	―	胴部	橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						突帯
	749	E	29	Ⅲ	一括	壺形土器	―	胴部	黄橙	浅黄橙	ハケ目	ハケ目		○	○					
	750	D	25	Ⅱb	一括	壺形土器	―	胴部	橙	浅黄橙	ハケ目	ケズリ		○	○					赤色顔料
	751	J	30	Ⅲc	一括	壺形土器	―	胴部	明褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						突帯
	752	J	30	Ⅲc	192	壺形土器	―	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	753	C	23	Ⅱb	一括	壺形土器	―	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	754	E	24	Ⅱb	一括	壺形土器	―	底部	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	755	J	30	Ⅲ	161	鉢形土器	―	口縁	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○							
	756	N	2	Ⅶ	一括	鉢形土器	―	口縁	橙	明褐	ナデ	ハケ目	○	○			○			
	757	J	30	Ⅲc	266	鉢形土器	―	口縁	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	工具ナデ，ナデ	○		○					
	758	J	30	Ⅲc	192	高坏形土器	―	口縁	赤褐	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○		○					赤色顔料
	759	J	30	Ⅲ Ⅲ Ⅲc	132 143 一括	高坏形土器	―	口縁	赤	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○							赤色顔料
	760	C	24	Ⅱb	一括	高坏形土器	―	脚部	明赤褐	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	○		○					赤色顔料
	761	J	30	Ⅲc	264	甑形土器	―	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ，指頭圧痕	工具ナデ	○	○	○					
	762	H	25	Ⅱb	一括	手捏ね土器	―	口縁	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ，指頭圧痕	○	○						
	763	H	25	Ⅱb	一括	手捏ね土器	―	口縁	浅黄橙	浅黄橙	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	○	○	○					
	764	D	27	Ⅲ	一括	手捏ね土器	―	口縁	赤褐	暗赤褐	ヘラケズリ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	○	○	○					

第７章　古代の調査（Ａ地点）

第１節　遺構

古代の遺構は，Ⅳ層の上面で検出され，埋土はⅢ層を中心としている。この時期の遺構としては，土坑が１基検出されている。



第88図　土坑実測図

土坑（第88図）

Ｆ－30区で検出された。長軸方向は，東西方向で1.15ｍ，短軸方向は南北方向で0.65ｍである。平面形は，略楕円形を呈する。検出面からの深さは，約15㎝と浅い。底面は丸みを帯び，ゆるやかに立ち上がる。底面近くから軽石や頁岩などの礫が見付かっている。埋土中から礫以外の遺物は出土しなかった。

第２節　遺物

１　土師器

⑴ 坏（第89図765～771）

765・766は，口縁部片である。765は，口径が15.4㎝で口縁部はやや外反する。766は，口径が約12㎝で，体部は丸みをもって開く。767～777は，底部である。768は，底径が6.4㎝で底部は厚い。見込みは平坦ではなく，中央部が盛り上がっている。

⑵ 椀（第89図772～783）

772～778は，口縁部である。775～777は，胴部が直線的に開くものである。778は，口縁部が外反している。779～783は，高台の付いた椀の底部である。「ハ」の字状に広がる高台のもの（779），底い高台で高台端部が尖るもの（780），低い高台で端部が丸いもの（781・782）などがある。783は，刻書土器である。文字であるか記号であるか判読できない。

⑶ 蓋（第89図784・785）

784・785は，口径12～13㎝程度で天井部端部は下方に折り曲げられている。

⑷ 内黒土師器（第89図786～789）

22は，坏の底部で底径は6.0㎝である。底部からの立ち上がりは丸みをもつ。787・788は，椀である。体部は丸みをもって立ち上がる。789は，椀の底部で高台は短い。

⑸ 赤色土器（第89図790～795）

Ⅰ類（790～793）内面に赤色顔料が施されるもの

790・791の高台はやや高く，「ハ」の字状に広がる。792・793は高台が低く，あまり開かない。

Ⅱ類（794）外面に赤色顔料が施されるもの

794は，椀である。摩耗による顔料の剥落が著しい。

Ⅲ類（795）内外面に赤色顔料が施されるもの

795は，椀である。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部はわずかに外反する。

⑹ 土師甕（第89図796）

796は，口縁部は逆Ｌ字状に大きく外反し，胴部が張らないものである。口径は，24.4㎝で外面はハケ目，内面はヘラケズリ調整が施されている。

２　須恵器

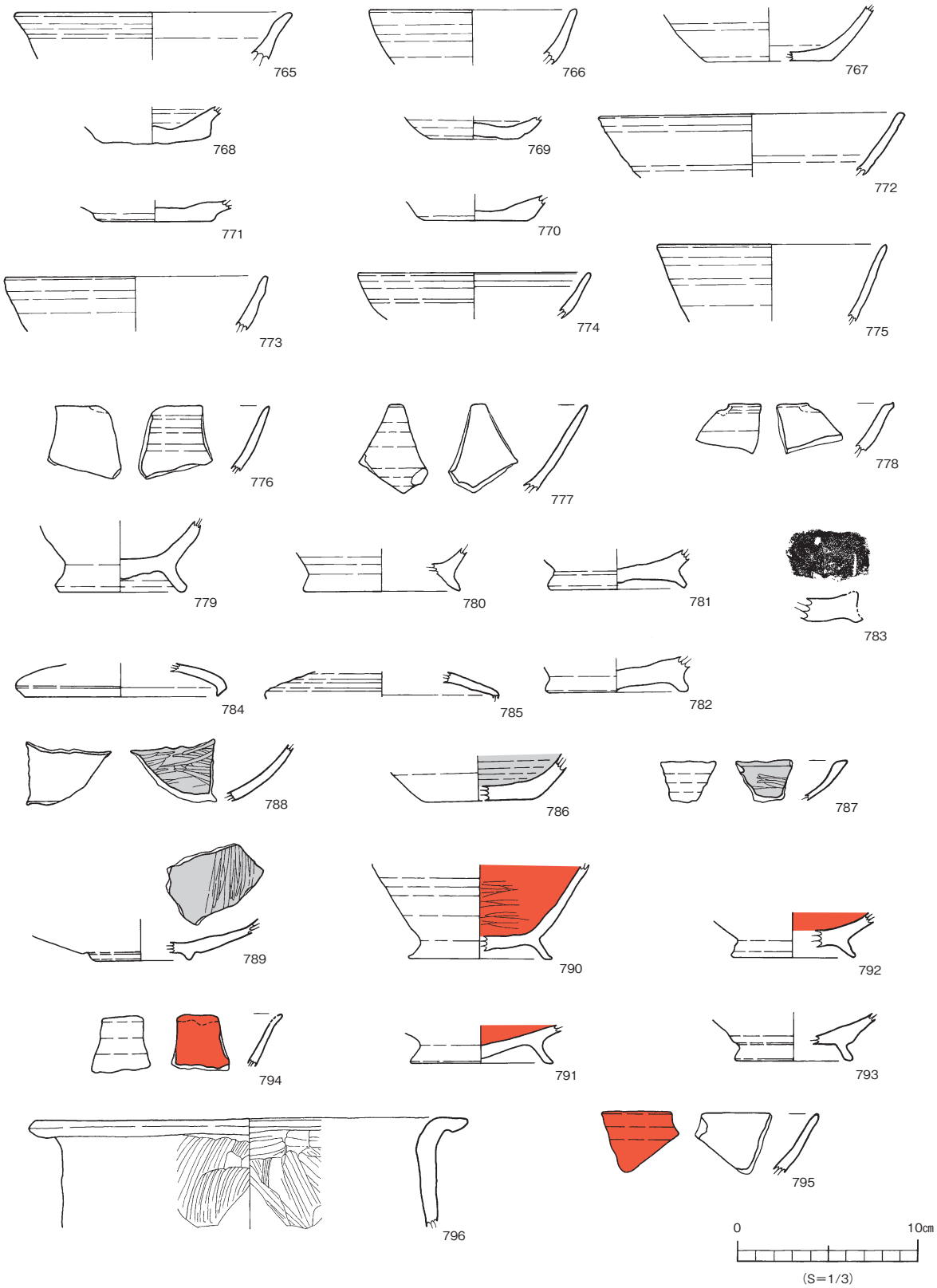
須恵器には，椀・蓋・甕・壺などが出土している。

⑴ 椀（第90図797）

797は，口径が13.0㎝で胴部は直線的に開き，口縁端部は丸みを帯びる。

⑵ 蓋（第90図798～800）

798・799は，端部近くの内面に小さなかえりがつくものと考えられる。かえりは，断面三角形で天井部端部は細くなっている。800は，つまみのない蓋と思われる。



第89図　古代出土遺物実測図（1）

⑶ 甕（第90図801～第92図814）

801～803は口縁部である。801～803は，外反する口縁部が端部近くで屈曲し，二重口縁状となる。801は，櫛描波状文が施され，口径は47.0㎝の大型の甕である。804～814は，胴部である。805は，外面に平行文タタキ，内面には車輪文タタキが見られる。808は，外面に格子目タタキ，内面に同心円当て具痕がみられる。809～813は，外面に平行タタキが見られるものである。814は，外面には擬格子目タタキ，内面に平行当て具と同心円当て具痕が見られる。

⑷ 壺（第92図815～822）

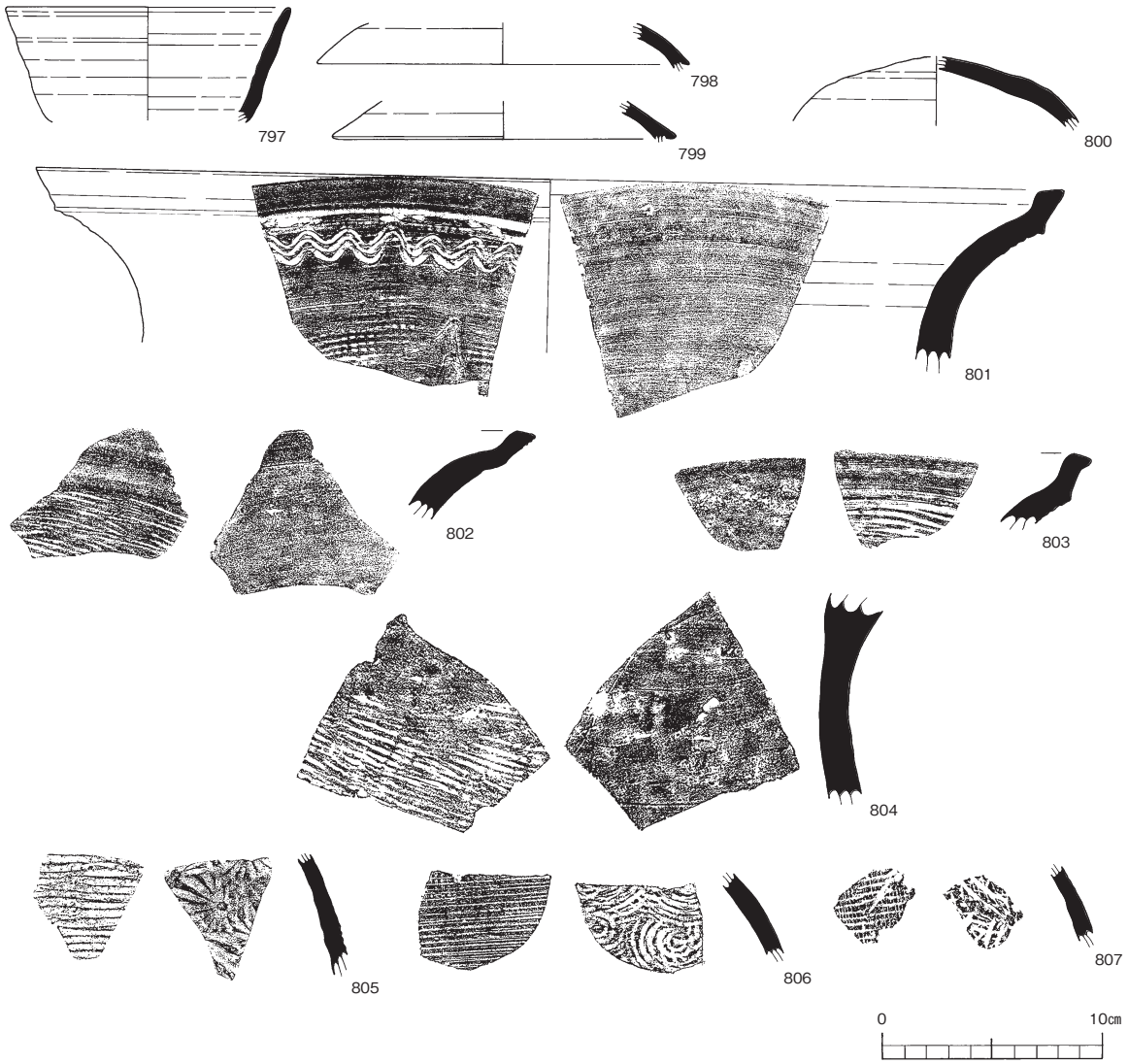
815は，短く外反し口唇部は丸みを帯びる。816は，口縁部から頸部である。口縁端部がくの字状に屈曲し，甕のような二重口縁状となる。817～822は頸部（胴部）である。821は，胴部で球状を呈する。822は，壺の胴部下半である。直線的に立ち上がり，外面は格子目タタキ，内面は粘土接合痕や指頭圧痕が見られる。

３　土製品（土錘）（第92図823・824）

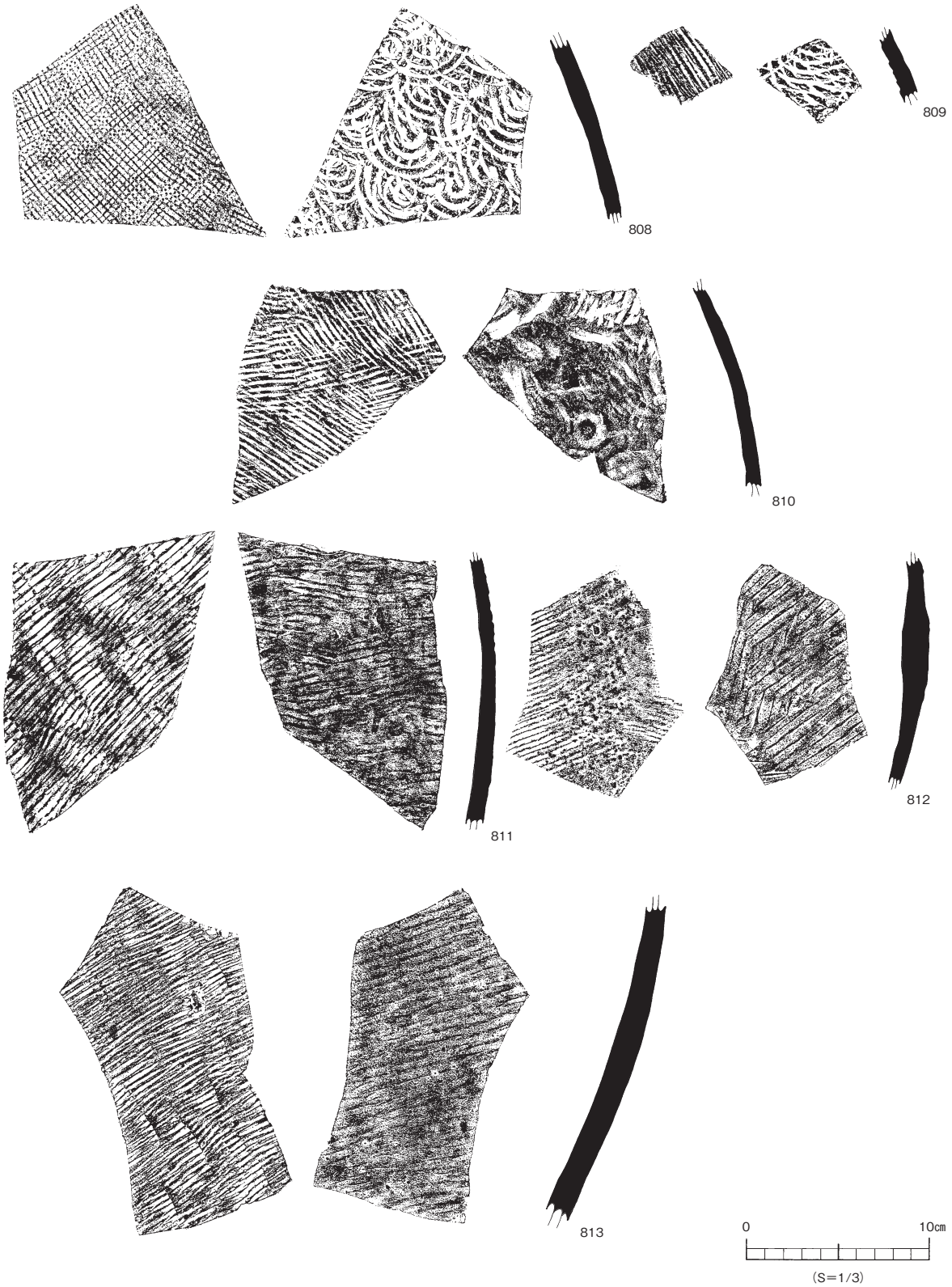
円筒状を呈する粘土の長軸方向に孔を穿った管状土錘である。823は，最大長5.0㎝，最大幅1.8㎝，孔径0.7㎝である。824は，最大長3.6㎝，最大幅1.2㎝，孔径0.4㎝である。

４　瓦（第92図825）

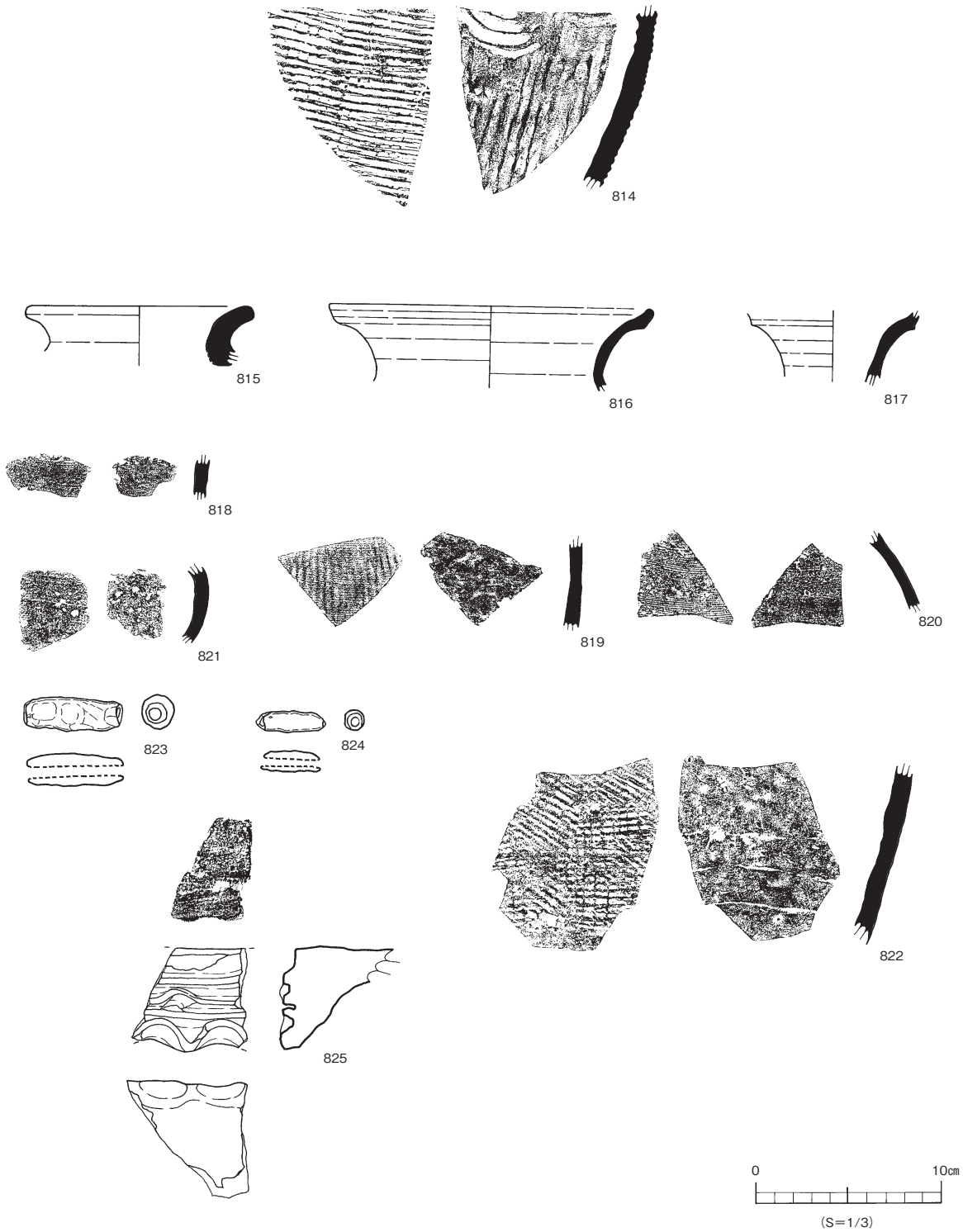
１点を図化した。825は，軒平瓦と思われる。古代で取り上げたが，それ以降の時期の可能性も考えられる。



第90図　古代出土遺物実測図（２）



第91図　古代出土遺物実測図（３）



第92図　古代出土遺物実測図（4）

表27　古代出土遺物観察表（1）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
89	765	F	29	Ⅷ	畝	土師器	坏	15.4	―	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	766	C	28	Ⅲ	一括	土師器	坏	11.6	―	―	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	767	J	30	Ⅲc	一括	土師器	坏	―	6.8	―	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	768	J	30	Ⅲc	281	土師器	坏	―	6.4	―	にぶい黄橙	淡黄	回転ナデ	回転ナデ	底面にスス付着
	769	I	30	Ⅲc	一括	土師器	坏	―	5.0	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	770	J	30	Ⅱc	71	土師器	坏	―	6.0	―	淡黄	淡黄	回転ナデ	回転ナデ	
	771	J	30	Ⅲb	174	土師器	坏	―	6.8	―	浅黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	772	J	30	Ⅱc	39	土師器	埦	17.0	―	―	橙	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	
	773	F	29	Ⅷ	畝	土師器	埦	14.6	―	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	774	J	30	Ⅲe	289	土師器	埦	13.0	―	―	灰黄	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	775	A	26	Ⅲ	一括	土師器	埦	12.8	―	―	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	776	I	30	Ⅲc	一括	土師器	埦	―	―	―	明黄褐	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	
	777	J	30	Ⅱb	一括	土師器	埦	―	―	―	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	
	778	D	27	Ⅲ	一括	土師器	埦	―	―	―	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	779	C	24	Ⅱb	一括	土師器	埦	―	6.8	―	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	780	J	30	Ⅲc	277	土師器	埦	―	8.6	―	浅黄橙	浅黄	回転ナデ	回転ナデ	
	781	J	30	Ⅲe	305	土師器	埦	―	7.5	―	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	782	J	30	Ⅲe	292	土師器	埦	―	8.0	―	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	外底面にスス付着
	783	J	30	Ⅱc	44	土師器	埦	―	―	―	にぶい黄橙	明黄褐	回転ナデ	回転ナデ	刻書土器
	784	A	27	Ⅲ	一括	土師器	蓋	11.6	―	―	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	785	J	30	Ⅱc	40	土師器	蓋	―	―	―	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	786	I	30	Ⅲe	303	内黒土師器	坏	―	6.0	―	黒褐	黒褐	回転ナデ	回転ナデ	
	787	C	23	Ⅱb	一括	内黒土師器	埦	―	―	―	浅黄	黒	回転ナデ	ヘラミガキ	
	788	I	30	Ⅲc	―	内黒土師器	埦	―	―	―	にぶい黄	黒	回転ナデ	ヘラミガキ	
	789	H	26	Ⅱb	一括	内黒土師器	埦	―	5.2	―	浅黄	黒	回転ナデ	ヘラミガキ	
	790	I	30	Ⅲe	297	赤色土器Ⅰ類	埦	―	11.0	―	浅黄橙	橙	回転ナデ	ヘラミガキ	
	791	A	27	Ⅲ	一括	赤色土器Ⅰ類	埦	―	8.0	―	浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	792	J	30	Ⅲe	294	赤色土器Ⅰ類	埦	―	6.9	―	にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	793	D	26	Ⅲ	一括	赤色土器Ⅰ類	埦	―	6.6	―	にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	794	K	30	Ⅱb	一括	赤色土器Ⅱ類	埦	―	―	―	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	795	C	22	Ⅱb	一括	赤色土器Ⅲ類	埦	―	―	―	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	796	A	27	Ⅲ	一括	土師器	甕	24.4	―	―	暗褐	暗褐	ナデ，ハケ目	ナデ，ケズリ	
90	797	C	25	Ⅱb	一括	須恵器	埦	13.0	―	―	にぶい橙	にぶい橙	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	798	I	30	Ⅲc	239	須恵器	蓋	―	―	―	にぶい橙	ｵﾘｰﾌﾞ灰	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	799	E	25	Ⅱb	一括	須恵器	蓋	―	―	―	灰ｵﾘｰﾌﾞ	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	800	F	27	Ⅱb	一括	須恵器	蓋	―	―	―	灰	灰	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	801	D	24	Ⅱb	一括	須恵器	甕	47.0	―	―	暗赤褐	ｵﾘｰﾌﾞ黄	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	802	G	26	Ⅱb	一括	須恵器	甕	―	―	―	にぶい黄褐	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	803	J	30	Ⅲ？	293	須恵器	甕	―	―	―	ｵﾘｰﾌﾞ黒	黄褐	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	804	E	25	Ⅱb	一括	須恵器	甕	―	―	―	黒褐	にぶい黄褐	平行ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛによるﾅﾃﾞ	布巻小石(調整内面)
	805	I	30	Ⅲe	一括	須恵器	甕	―	―	―	浅黄	にぶい黄橙	平行ﾀﾀｷ	車輪文当て具	
	806	D	27	Ⅲ	一括	須恵器	甕	―	―	―	灰	灰	平行ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ	同心円当て具	
	807	I	30	Ⅱb	一括	須恵器	甕	―	―	―	灰	灰ｵﾘｰﾌﾞ	平行ﾀﾀｷ→ハケ目	同心円当て具	
91	808	J	30	Ⅲe	291	須恵器	甕	―	―	―	灰ｵﾘｰﾌﾞ	灰	格子目ﾀﾀｷ	同心円当て具	
	809	J	30	Ⅲc	一括	須恵器	甕	―	―	―	灰	暗灰黄	平行ﾀﾀｷ	同心円当て具	
	810	J	30	Ⅲb	171	須恵器	甕	―	―	―	灰白	にぶい黄	平行ﾀﾀｷ	同心円当て具+平行当て具	
	811	I	30	Ⅲe	295	須恵器	甕	―	―	―	にぶい橙	にぶい黄	平行ﾀﾀｷ	平行当て具→同心円当て具	
	812	I	30	Ⅲe	304	須恵器	甕	―	―	―	暗ｵﾘｰﾌﾞ	暗褐	平行ﾀﾀｷ	平行当て具→ﾅﾃﾞ	
	813	J	30	Ⅲc	218	須恵器	甕	―	―	―	にぶい赤褐	にぶい橙	平行ﾀﾀｷ	平行当て具	
92	814	I	30	Ⅲb	242	須恵器	甕	―	―	―	にぶい橙	灰ｵﾘｰﾌﾞ	擬格子目ﾀﾀｷ	平行当て具+同心円当て具	
	815	F	26	Ⅱb	一括	須恵器	壺	12.2	―	―	明黄褐	黄橙	ﾛｸﾛによるナデ	同心円当て具	
	816	K	30	Ⅱ？c	一括	須恵器	壺	17.2	―	―	にぶい黄褐	にぶい橙	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	817	J	30	Ⅲc	271	須恵器	壺	―	―	―	にぶい黄褐	にぶい橙	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	818	H	24	Ⅱb	一括	須恵器	壺	―	―	―	青灰	青灰	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	819	E	29	Ⅲ	一括	須恵器	壺	―	―	―	灰	灰ｵﾘｰﾌﾞ	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	820	C	27	Ⅲ	一括	須恵器	壺	―	―	―	灰	灰	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	821	G	26	Ⅱb	一括	須恵器	壺	―	―	―	暗青灰	青灰	ﾛｸﾛによるナデ	ﾛｸﾛによるナデ	
	822	J	30	Ⅱb	一括	須恵器	壺	―	―	―	ｵﾘｰﾌﾞ黒	灰黄褐	平行ﾀﾀｷ	ﾛｸﾛによるナデ	

表28　古代出土遺物観察表（2）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	孔径(cm)	色調	備考
92	823	J	30	Ⅲc	253	土製品	管状土錘	5.1	1.7	13.0	0.6	にぶい黄	
	824	H	26	Ⅱb	一括	土製品	管状土錘	3.6	1.1	3.0	0.4	浅黄	

表29　古代出土遺物観察表（3）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種類	文様	叩目	厚さ(cm)	色調 凸面	色調 凹面	焼成	備考
92	825	―	―	―	―	軒平瓦	―	布目	3.5	灰	灰	軟質	

第８章　中世の調査（Ａ地点）

第１節　調査の概要

Ａ地点における中世の調査では，遺構は検出されなかった。遺物は，Ⅲ層及びⅣ層を中心に，土師器や須恵器，輸入陶磁器，国産陶器，滑石製品，鉄製品・古銭等が出土した。

第２節　出土遺物の分類

土師器，須恵器（東播磨系・樺万丈窯系など），類須恵器(カムィヤキ)，輸入陶磁器（陶器・青磁・白磁）などが出土している。遺物の分類は，『持躰松遺跡』(鹿児島県立埋蔵文化財センター2007)，『上水流遺跡２』(同センター2008)，『上水流遺跡３』(同センター2009）の中近世の遺物分類を参考に以下のとおりに行う。

１　器種分類

⑴食膳具　椀・坏・皿
⑵貯蔵具　壺・有耳壺・須恵器甕
⑶煮炊具　鍋・釜・土師器甕
⑷調度具　合子・瓶・水注・小壺
⑸その他　器種が特定できないものなど

２　中世の遺物分類

⑴土師器　坏・埦・皿・蓋
⑵須恵器　甕・捏鉢・壺
⑶瓦質土器　擂鉢・羽釜・火鉢・蓋・その他
⑷類須恵器（カムィヤキ）　甕・壺・その他
⑸国産陶器　甕・壺・埦・蓋・片口鉢・擂鉢
⑹輸入陶磁器
碗・皿・口折皿・瓶・壺・甕・盤・合子・その他
①　陶器
②　青磁
分類は，基本的に上田分類（上田1982）と太宰府分類（太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考とした。
③　白磁
分類は，基本的に森田分類（森田1982）と太宰府分類（太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考とした。
④　青花（景徳鎮窯系・漳州窯系）

【参考文献】

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁器研究』№２　日本貿易陶磁研究会
太宰府市教育委員会（山本信夫）　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

第３節　遺物

１　土師器

坏・皿が出土している。外底面には，糸切りによる切り離し痕がみられる。

⑴ 坏（第93図826～830）

826は，口縁部から底部で，体部は直線的に立ち上がる。827は，直線的に立ち上がり，口縁端部がやや外反するタイプである。見込みは，ほぼ平坦で指頭圧痕が見られる。828は，内湾しながら見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がる。829・830は，底部である。829の見込みは，ほぼ平坦でナデ調整が施されている。底径は，11.6㎝である。

⑵ 小皿（第93図831～834）

口径11㎝未満，器高２㎝以下を小皿とした。831・832は，口縁端部は丸みを帯び，底部から体部への立ち上がりがやや外に張り出している。832は，見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がり，体部との境ははっきりしない。833は，見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がり，口縁端部は丸みを帯びる。外底面には，糸切り痕とともに板状の圧痕が確認できる。834は，見込み中央は凸状で口縁部はやや尖り気味となる。

⑶ 黒色土器（第93図835）

内外面とも黒く燻した黒色土器（黒色土器Ｂ）である。835は，小皿で内外面ともにヘラミガキが施されている。

⑷ 赤色土器（第93図836）

外面に赤色顔料が施された赤色土器である。836は，坏で見込みは平坦で底径は7.2㎝である。

２　須恵器

樺万丈窯系の甕や東播磨系の捏鉢等が出土している。

⑴ 甕（第93図837～839）

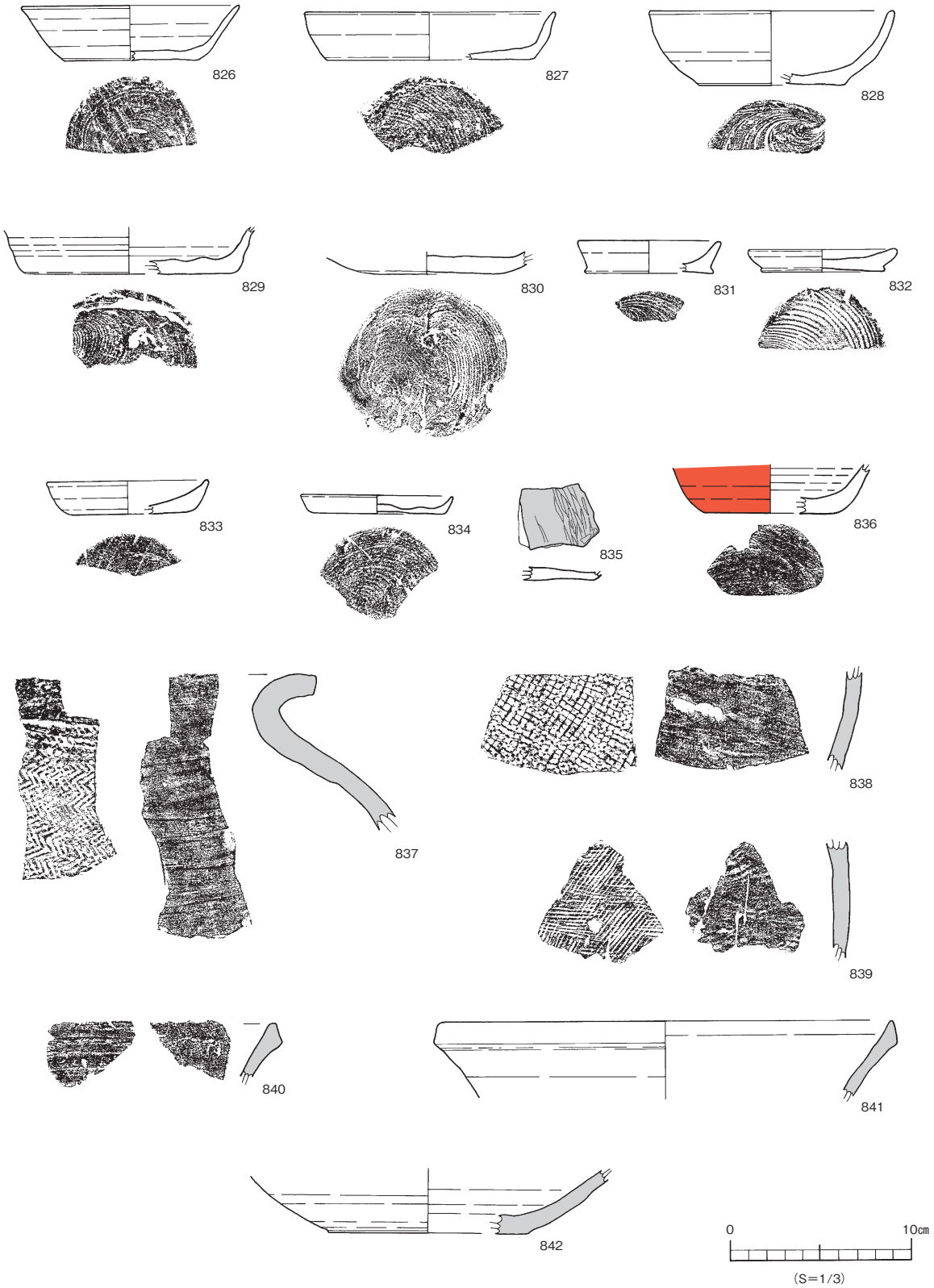
837～839は，樺万丈窯系と考えられる。837は，口縁部で逆Ｌ字状に屈曲し，大きく外反する。外面は，ナデ及び平行タタキが見られ，内面はハケ目調整が施されている。838・839は胴部である。838は，外面に格子目タタキ，内面はナデ調整が施されている。

⑵ 捏鉢（第93図840～842）

840～842は，東播磨系の捏鉢である。840・841は，口縁部内面に段が無く直線的になっている。842は，底部で糸切りによる切り離し痕が残る。

３　瓦質土器（第94図843～848）

843～848は擂鉢である。スリメが斜め方向につけ



第93図　中世出土遺物実測図（1）

られるもの（843），スリメが縦方向につけられるもの（844・846・847・848），ハケメが施された後に縦方向にスリメがつけられるもの（845）などがある。

4　類須恵器（カムィヤキ）（第94図849）

849は，壺の底部と考えられる。復元底径は12.0㎝である。外面は，ナデ調整が施される。内面は，粘土接合痕が残り平行タタキの後ナデ調整で仕上げられている。

5　国産陶器（第95図850）

850は，常滑焼の片口鉢と思われる。

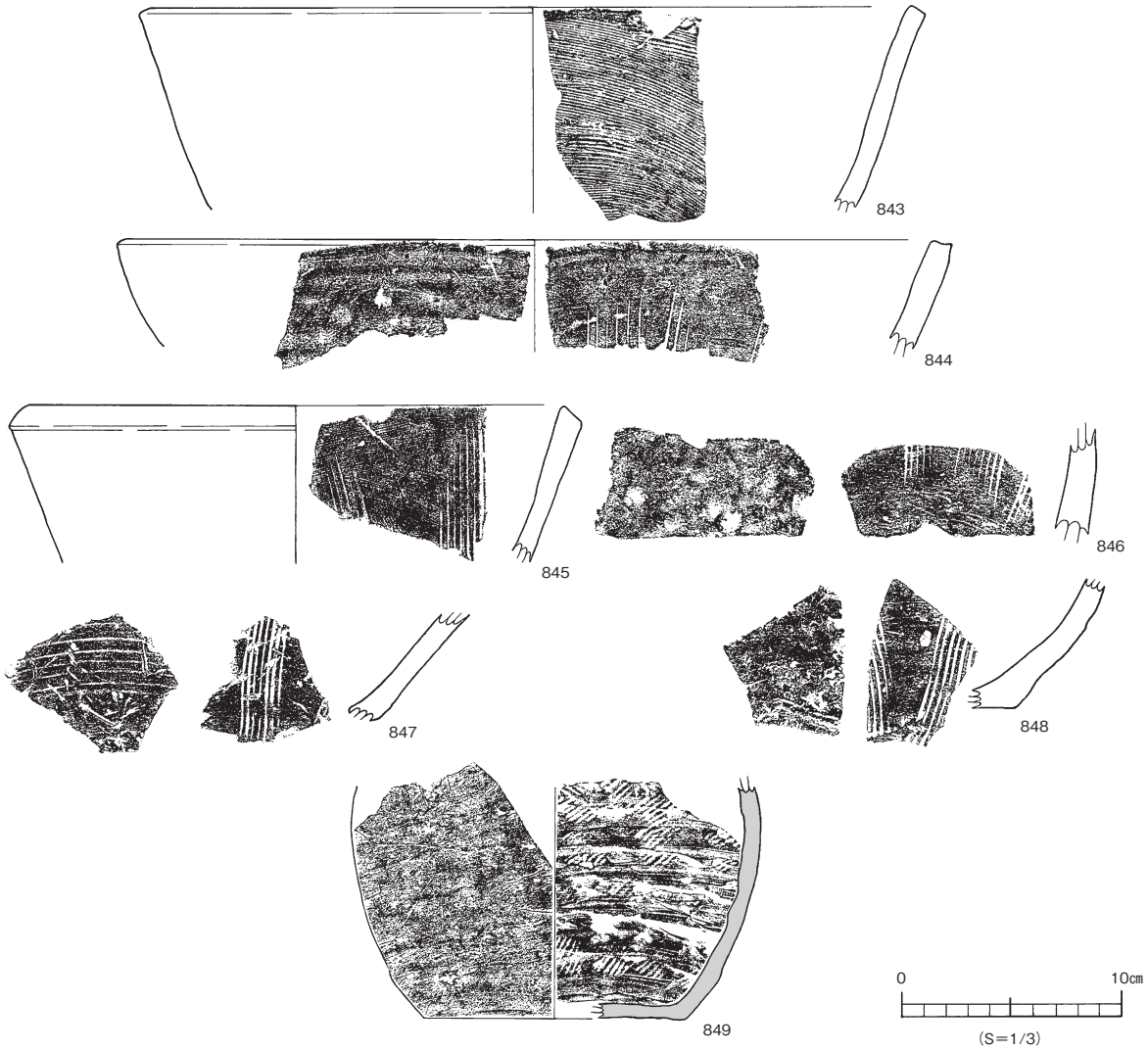
6　輸入陶器

⑴ 埦（第95図851）

851は，内外面に赤褐色の鉄釉が掛かる天目埦である。外面の胴部下位は露胎している。

⑵ 壺（第95図852～855）

852・853は，内・外面ともに施釉される。852は，口縁部内外面に釉の掛け残しが見られ，内面には目跡が残る。853は，外面にヘラ状工具による器面調整が施され，底部外面にはケズリ痕が見られる。854は，やや上げ底状となり，底部外面には墨書がある。文字であるか記号であるかは判読できない。855は，甕の可能性もある。



第94図　中世出土遺物実測図（2）

７　青磁

竜泉窯系青磁Ⅰ類は，12世紀中頃から後半，Ⅱ類は13世紀前後から前半，Ⅲ類は13世紀中頃から14世紀初頭前後，Ⅳ類は14世紀初頭から後半に編年されるものである。

⑴ 竜泉窯系青磁碗Ⅰ類（第95図856～861）

口縁端部は丸く肉厚で直口となる例が多く，わずかに外反するものである。体部下位は腰が張り，重心が低い。高台は断面四角形で高台内部は削りが若干浅く，このため底部は肉厚となる。口縁部直下から底部外面まで丁寧なヘラケズリを行う。高台部畳付及び内部は露胎である。釉は半透明で平均的にかかる。

ア　竜泉窯系青磁碗Ⅰ－１類（856～858）

体部内外面は無文である。857・858は，肉厚の底部で，畳付けは断面四角形である。底径は，それぞれ6.2㎝，6.4㎝である。

イ　竜泉窯系青磁碗Ⅰ－４類（859・860）

二又片刀または櫛刀によって，体部内面を５分割し，その中に飛雲文を入れる。見込みに花弁文の片彫り，文字印刻がされる例もある。

ウ　竜泉窯系青磁碗Ⅰ－６類（861）

体部外面に縦の櫛目を入れ，片彫りで蓮弁文を一周させるものである。内面に片彫草花文や櫛目文をする。861は口縁部がやや外反し，内面は劃花文が施される。

⑵ 竜泉窯系青磁碗Ⅱ類（第95図862～867）

体部外面に蓮弁文の文様を有するものである。口縁端部は直口またはわずかに外反する。862～864は，片彫蓮弁文で弁の中心線に鎬（稜）はない。865～867は，弁の中心線は稜をなす，いわゆる鎬蓮弁文である。867は，畳付から高台内面は露胎である。

⑶ 同安窯系青磁碗Ⅱ類（第96図868）

胎土は粘性が強く，硬質であり，灰色，淡黄灰色を基調とする。逆台形状の厚い高台を有する。内面見込みと体部との境に大きく段があり，内面上位には沈線を入れる。868は，口縁部はわずかに外反し，内外面ともに無文である。

⑷ 同安窯系青磁皿Ⅰ類（第96図869）

口縁端部は薄く尖り気味で，体部中位で屈曲する。869は，全面施釉された後，底部外面の釉は掻き取られている。内面見込みに櫛点描文が確認できる。

⑸ 竜泉窯系青磁坏Ⅲ類（第96図870）

体部は丸みを持ち内湾気味に立ち上がる。口縁部は鋭く外反し，上端は平坦面をなす。870は，体部外面に鎬蓮弁文を有する。

⑹ 竜泉窯系青磁Ⅳ類（第96図871～875）

871・872は，稜花皿である。いずれも明代のものでＧ期（14世紀以降）のものと思われる。873～875は，碗の底部である。873は，全面施釉後に高台畳付及び高台内の釉は削りとられている。高台内面の中央は凸状となっている。見込みには，草花文の印刻がある。高台内側には墨書が見られるが，記号であるか文字であるかは判読できない。

８　白磁

⑴ 白磁碗Ⅳ類（第96図876）

口縁部は肉厚な玉縁状を呈する。体部の器肉は厚い。高台は幅広で削り出しが浅いため，底部の器肉も厚い。体部下半以下，底部には施釉されない。876は，口縁部外面に釉垂れが確認できる。

⑵ 白磁碗Ⅻ類（第96図877）

口縁部は外反する浅形碗である。体部下位は横に延び，体部中位で湾曲する。877は，無文で上質のつくりである。

⑶ 白磁小碗（第96図878）

口縁部は外側に大きく開き，高台は細めで高い。全体的に薄手である。

⑷ 白磁碗Ⅴ類（第96図879～884）

高台は細く高く直立する。口縁部は外反あるいは屈曲し，上端部は水平にする。体部と高台部の境付近まで施釉される。内面は無文や櫛目で花文が描かれているものがある。880～882は，端部内面に鋭い稜が確認できる。883は，内面見込みに短い櫛目文がみられる。

⑸ 白磁碗Ⅸ類（第96図885・886）

口縁部周辺は施釉後に釉を掻き取り，口禿げとする。胎土は灰白色を呈し，釉は空色を帯びた灰白色や灰緑色を呈し厚く不透明なものが多い。885・886は，碗としたが皿の可能性もある。

⑹ 白磁皿Ⅶ類（第96図887）

体部はわずかに内湾気味で口縁部に向かって薄く引き上げている。底部外面はわずかに削り込み小さな高台状となる。887は無文で，底径は7.0㎝である。

⑺ 白磁皿Ⅷ類（第96図888）

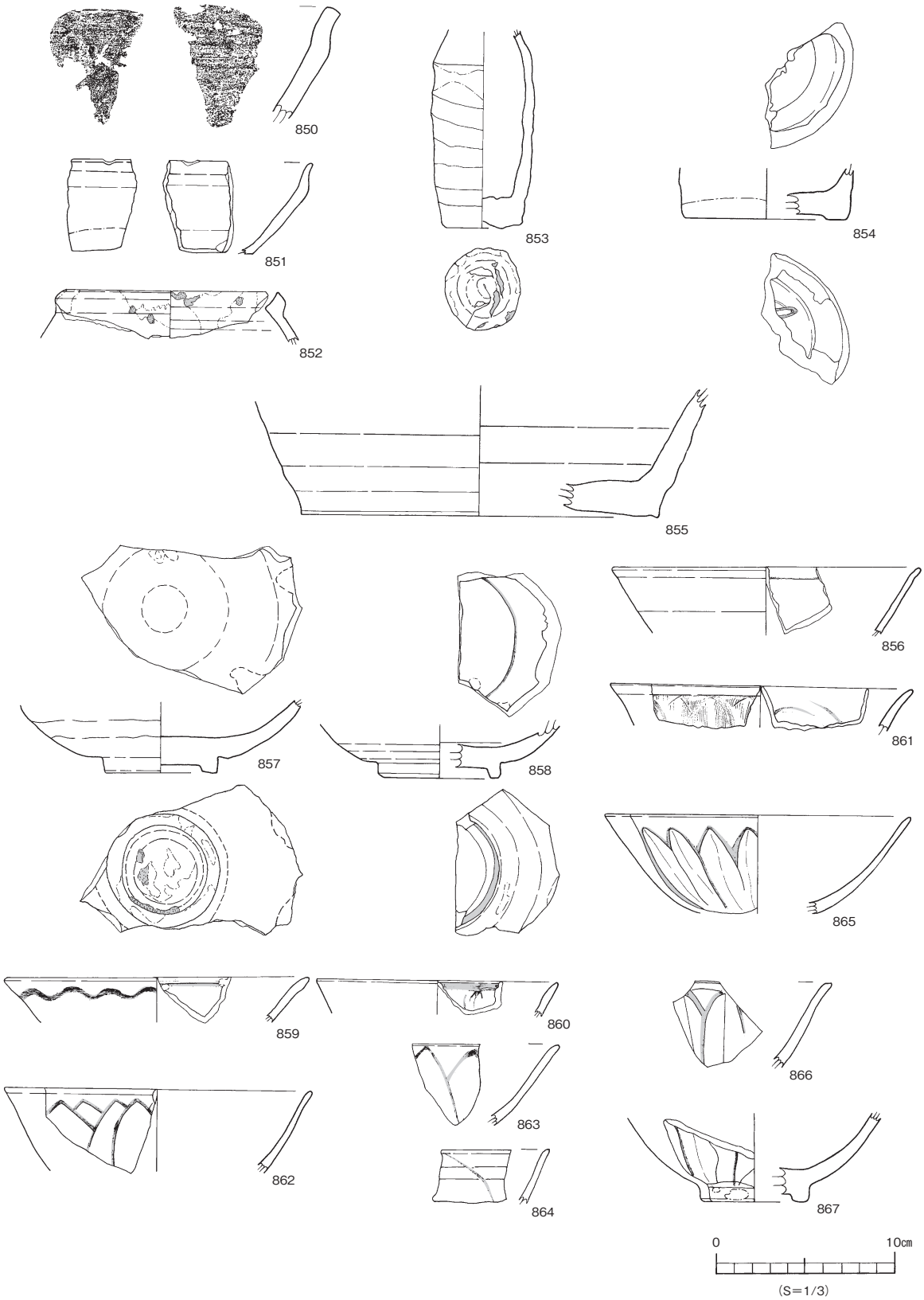
口縁は直口し，底部は平底である。底部の釉は施釉した後削り取る。888は，内面見込みは平坦で草花文の凹印が施されている。

⑻ 白磁皿Ⅸ類（第97図889～892）

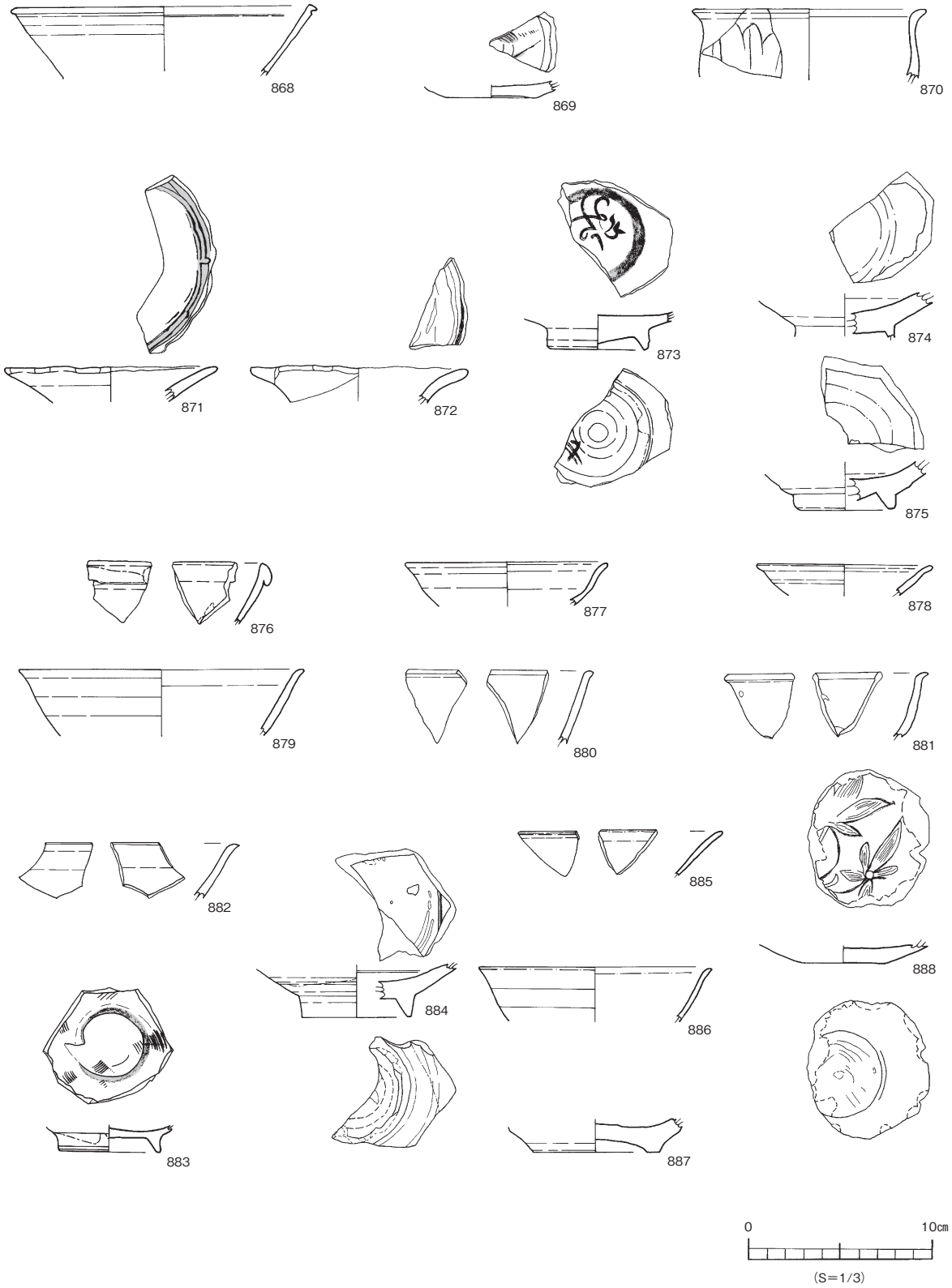
白磁碗Ⅸ類と同様に，口縁端部が口禿げとなったものである。胎土は灰白色で硬質である。釉は粘性が強く空色を帯びた灰白色を呈する。889～891は，平底で全面施釉されるものである。底部外面は板状の工具で釉をのばしていると思われる。892は，底部外面は施釉されていない。

⑼ 四耳壺（第97図893）

893は，四耳壺の頸部（胴部）と考えられる。



第95図　中世出土遺物実測図（3）



第96図　中世出土遺物実測図（4）

9　青白磁（第97図894・895）

型造りによる合子の身である。894は，無文である。底部外面は，焼成前に釉を掻き取っている。895は，側面に菊弁文を有する。胴部下半と受け部は露胎となっている。

10　青花（第97図896～901）

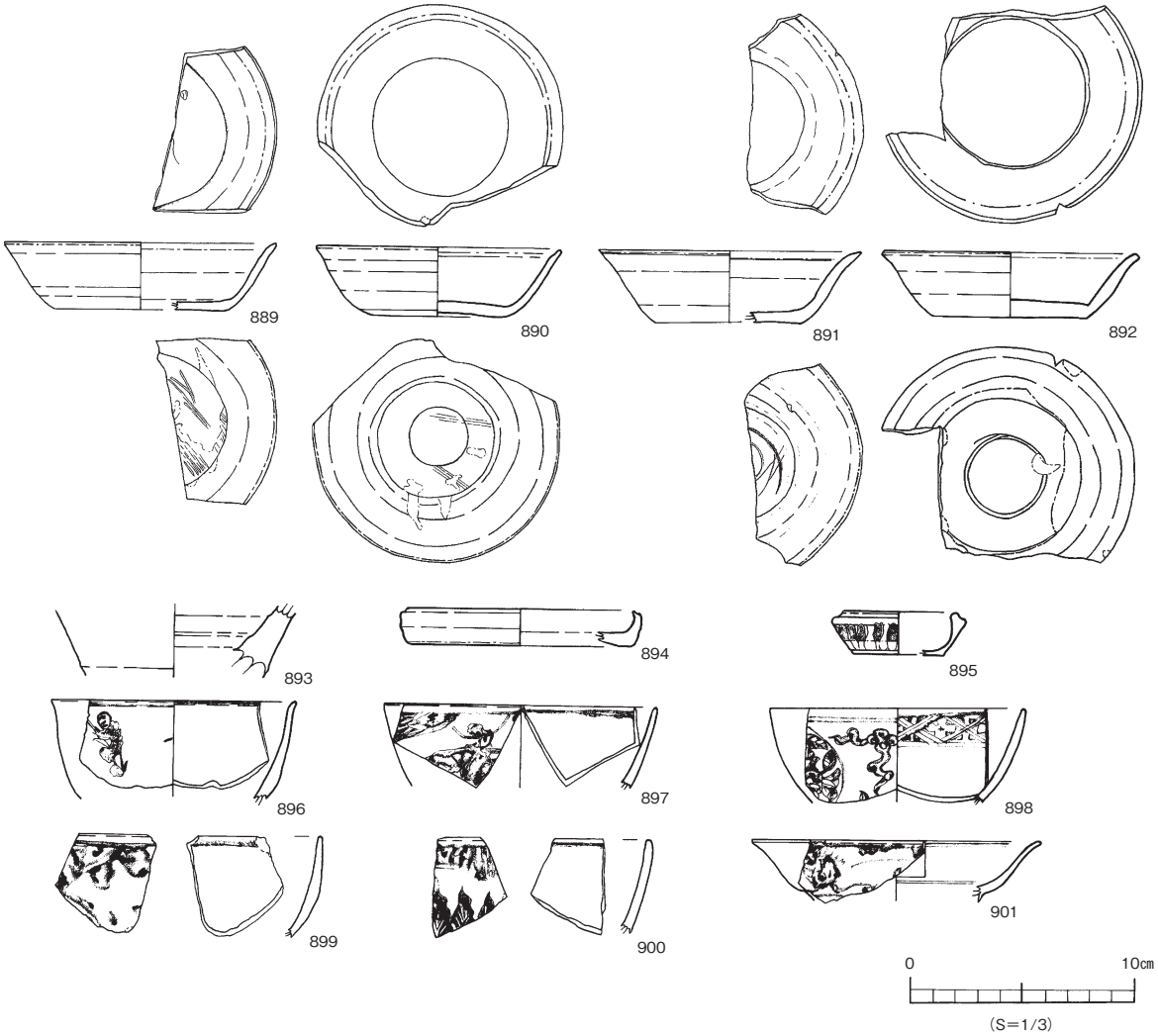
６点を図化した。いずれも景徳鎮窯系で，時期は中世後半期（15～16世紀）のものと思われる。896～900は碗である。898・899は，16世紀後半のものと考えられる。900は，胴部外面に芭蕉葉文が描かれ，15世紀後半から16世紀中頃のものである。901は，皿で15世紀中頃から16世紀中頃のものと考えられる。

11　滑石製品（第98図902・903）

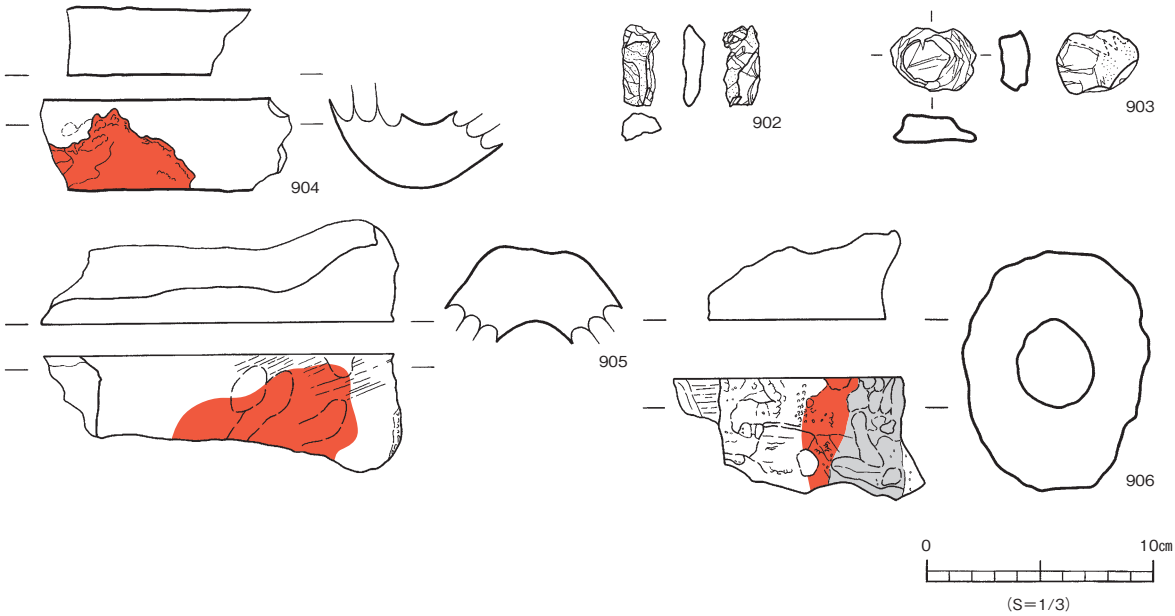
902・903は，石鍋の再加工品である。902は，滑石製石鍋の把手部分を加工したものと思われる。使用目的は不明である。

12　土製品（第98図904～906）

904～906は，ふいごの羽口である。明確な時期は分からないが，出土層からこの時期に掲載した。904は，最大幅は８㎝で，外面には赤色化した部分がみられる。906は，先端に鉄滓が付着し，ガラス質や赤色化した部分が帯状にめぐる。



第97図　中世出土遺物実測図（５）



第98図　中世出土遺物実測図（6）

表30　中世出土遺物観察表(1)

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
93	826	B	27	Ⅴ	一括	土師器	坏	12.0	7.4	3.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	827	E	28	Ⅲ	一括	土師器	坏	13.8	11.6	2.6	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	828	J	30	Ⅱb Ⅲc	一括 237	土師器	坏	13.5	8.0	4.0	橙	にぶい褐	回転ナデ	回転ナデ	
	829	A	27	Ⅴ	一括	土師器	坏	―	11.6	―	にぶい黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	
	830	C	28	Ⅳ	一括	土師器	坏	―	11.0	―	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	831	E	27	Ⅲ	一括	土師器	小皿	7.8	6.8	1.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	832	I	30	Ⅲb	241	土師器	小皿	8.2	6.8	1.2	にぶい黄	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	833	C	28	Ⅲ	一括	土師器	小皿	8.8	6.8	1.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	834	C	28	Ⅲ	一括	土師器	小皿	8.4	7.4	1.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	835	E	35	Ⅱb	一括	黒色土器	小皿		―	―	黒	黒	回転ナデ	ヘラミガキ	
	836	E	25	Ⅱb	一括	赤色土器	坏	―	7.2	―	橙	黒褐	回転ナデ	回転ナデ	
	837	F	27	Ⅱb	一括	樺万丈窯系須恵器	甕	―	―	―	灰	灰	平行タタキ	ロクロによるナデ	
	838	C	28	Ⅲ	一括	樺万丈窯系須恵器	甕	―	―	―	灰	灰	格子目タタキ	ロクロによるナデ	
	839	C	23	Ⅱb	一括	樺万丈窯系須恵器	甕	―	―	―	灰	灰	平行タタキ	ロクロによるナデ	
	840	H	25	Ⅱb	一括	東播磨系須恵器	捏鉢	―	―	―	灰	灰	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	841	B	27	Ⅱ	一括	東播磨系須恵器	捏鉢	25.0	―	―	浅黄	浅黄	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	842	D	27	Ⅲ	一括	東播磨系須恵器	捏鉢	―	11.0	―	灰オリーブ	灰オリーブ	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
94	843	H	30	ⅩⅡ	一括	瓦質土器	擂鉢	35.8	―	―	灰	灰	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	844	C	23	Ⅱb	一括	瓦質土器	擂鉢	38.0	―	―	浅黄橙	浅黄橙	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	845	G	27	Ⅱb	一括	瓦質土器	擂鉢	26.0	―	―	灰	灰	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	846	E	26	Ⅱb	一括	瓦質土器	擂鉢	―	―	―	にぶい黄橙	灰	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	847	F	27	Ⅲ	一括	瓦質土器	擂鉢	―	―	―	にぶい黄橙	にぶい黄	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	848	D	24	Ⅱb	一括	瓦質土器	擂鉢	―	―	―	にぶい橙	灰黄褐	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	849	C	28	Ⅲ	一括	類須恵器	不明	―	12.0	―	青灰	暗青灰	ロクロによるナデ	平行タタキ後ナデ	カムィヤキ

表31　中世出土遺物観察表（2）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種・分類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土	釉薬	備考
95	850	D	25	Ⅱb	一括	国産陶器	片口鉢	―	―	―	灰白	にぶい橙	
	851	D	26	Ⅲ	一括	輸入陶器	天目碗	―	―	―	灰白	灰黄褐	
	852	E	27	Ⅲ	一括	輸入陶器	壺	12.0	―	―	灰黄	灰オリーブ	
	853	A	26	Ⅲ	一括	輸入陶器	壺	―	4.2	―	黄灰色	灰オリーブ	
	854	D	27	Ⅲ	一括	輸入陶器	壺	―	9.0	―	灰オリーブ	灰白	高台内側に墨書
	855	E	28	Ⅲ	一括	輸入陶器	壺	―	20.0	―	灰白	灰	
	856	C	24	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―1類	17.2	―	―	灰白	オリーブ灰	
	857	F	30	Ⅶ	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―1類	―	6.2	―	灰白	灰オリーブ	
	858	D	29	Ⅲ	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―1類	―	6.4	―	灰白	灰オリーブ	
	859	B	25	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―4類	17.0	―	―	灰	灰オリーブ	
	860	F	26	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―4類	13.6	―	―	灰白	灰オリーブ	
	861	F	30	Ⅶ	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅰ―6類	16.8	―	―	灰	オリーブ灰	
	862	B	28	Ⅴ	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	17.2	―	―	灰白	灰オリーブ	
	863	B	26	Ⅲ	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	―	―	―	灰白	灰オリーブ	
	864	K	30	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	―	―	―	灰白	灰オリーブ	
	865	B	27	Ⅰb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	17.0	―	―	灰白	灰オリーブ	
	866	B	25	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	―	―	―	灰白	灰オリーブ	
	867	G	27	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅱ類	6.0	―	―	灰白	灰オリーブ	
96	868	E	25	Ⅱb	一括	同安窯系青磁	碗・Ⅱ類	16.8	―	―	灰白	灰オリーブ	
	869	B	27	Ⅴ	一括	同安窯系青磁	皿・Ⅰ類	―	4.8	―	灰白	オリーブ灰	外底部の釉掻取り
	870	B	27	Ⅴ	一括	竜泉窯系青磁	坏・Ⅲ類	12.7	―	―	灰白	緑灰	
	871	A	26	Ⅲ	一括	竜泉窯系青磁	皿・Ⅳ類	11.6	―	―	灰白	オリーブ灰	稜花皿
	872	E	28	Ⅲ	一括	竜泉窯系青磁	皿・Ⅳ類	11.8	―	―	灰白	オリーブ灰	稜花皿
	873	H	25	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅳ類	―	5.6	―	灰白	灰オリーブ	高台内側に墨書
	874	C	24	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅳ類	―	―	―	灰白	オリーブ灰	見込み釉掻取り
	875	I	30	Ⅱb	一括	竜泉窯系青磁	碗・Ⅳ類	―	5.4	―	灰白	浅黄	
	876	D	27	Ⅲ	一括	白磁	碗・Ⅳ類	―	―	―	灰白	灰白	玉縁口縁
	877	C	23	Ⅱb	一括	白磁	碗・XⅢ類	11.0	―	―	灰白	灰白	
	878	E	24	Ⅱb	一括	白磁	小碗	9.6	―	―	灰白	灰白	
	879	D	25	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅴ類	15.6	―	―	灰白	灰白	
	880	G	27	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅴ類	―	―	―	灰白	灰白	
	881	E	28	Ⅲ	一括	白磁	碗・Ⅴ類	―	―	―	灰白	灰白	
	882	B	24	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅴ類	―	―	―	灰白	灰白	
	883	J	30	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅴ類	―	5.6	―	灰白	灰白	
	884	C	22	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅴ類	―	6.0	―	灰白	灰白	胴部下位露胎
	885	D	24	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅸ類	―	―	―	灰白	灰白	口禿
	886	I	30	Ⅱb	一括	白磁	碗・Ⅸ類	―	―	―	灰白	灰白	口禿
	887	D	26	Ⅲ	一括	白磁	皿・Ⅶ類	―	7.0	―	灰白	灰白	胴部下位露胎
	888	H	24	Ⅱb	一括	白磁	皿・Ⅷ類	―	4.6	―	灰白	灰白	外底面釉剥ぎ取り
97	889	B	28	Ⅴ	一括	白磁	皿・Ⅸ類	12.2	7.4	3.0	灰白	灰白	口禿
	890	B	28	Ⅴ	一括	白磁	皿・Ⅸ類	11.0	6.0	3.0	灰白	灰白	口禿
	891	B	27	Ⅱ	一括	白磁	皿・Ⅸ類	11.8	6.4	3.2	灰白	灰白	口禿
	892	B	27	Ⅰb	一括	白磁	皿・Ⅸ類	11.6	7.0	3.0	灰白	灰白	口禿
	893	E	28	Ⅲ	一括	白磁	四耳壺	―	―	―	灰白	灰白	
	894	H	26	Ⅱb	一括	青白磁	合子身	6.0	1.9	4.0	灰白	灰白	
	895	D	24	Ⅱb	一括	青白磁	合子身	―	5.0	―	灰白	灰白	
	896	C	22	Ⅱb	一括	青花	碗	11.0	―	―	灰白	灰白	景徳鎮窯系
	897	B	25	Ⅱb	一括	青花	碗	12.2	―	―	灰白	透明	景徳鎮窯系
	898	B	28	Ⅲ	一括	青花	碗	11.4	―	―	灰白	透明	景徳鎮窯系
	899	G	24	Ⅱa	畝	青花	碗	―	―	―	灰白	青みがかった釉	景徳鎮窯系
	900	E	26	Ⅱb	一括	青花	碗	―	―	―	灰白	青みがかった釉	景徳鎮窯系
	901	F	24	Ⅱb	一括	青花	皿	13.0	―	―	灰白	青みがかった釉	景徳鎮窯系

表32　中世出土遺物観察表（3）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種	口径（cm）	備考
98	902	D	23	Ⅱb	一括	滑石製品	石鍋再加工品	―	―
	903	E	25	Ⅱb	一括	滑石製品	石鍋再加工品	―	―

表33　中世出土遺物観察表（4）

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	色　調	備考
98	904	C	23	―	トレンチ	土製品	羽口	10.8	8.2	3	280	にぶい黄橙	被熱
	905	C	28	Ⅳ	一括	土製品	羽口	15.5	9.8	3.5	559	浅黄橙	被熱
	906	C	28	Ⅲ	一括	土製品	羽口	11	10.2	4.7	691	灰黄	先端部にガラス質が熔着

第９章　近世の調査（Ａ地点）

第１節　遺　構

１　遺構の概要

近世の調査では，畝間状遺構（畠跡）がⅡｂ層から検出されたが，それ以外に遺構は確認されなかった。

２　遺　構

畝間状遺構（第100図～第106図）

畝間状遺構は，Ａ～Ｉ－22～30区で検出されＡ地点の調査区の大部分を占める。その様相から次のように細かく６枚に分層し検出した。畝間が検出されていない部分は，何らかの施設があった可能性も考えられる。以下，層ごとの検出状況を述べる。

⑴ Ⅱｂ層１（第101図）

Ａ～Ｉ－22～28区で検出された。この層で検出された畝跡が大部分を占める。調査区の北東側でほぼ南北方向に確認された畝跡である。１条の幅は約40～120㎝で，検出された畝で最も長いものは約20ｍある。一部には，以前耕作された東西方向の畝跡が下面に見られる。畝跡の検出状況から，調査区内の畠の一区画を推定することができる。

⑵ Ⅱｂ層２（第102図）

Ａ～Ｇ－24～30区で検出された。Ⅱｂ１層で検出された畝跡と同じく南北方向に確認された。１条の幅は，約20～90㎝で，検出された畝で最も長いものは約13ｍある。畝は合計で45条ほど検出された。

⑶ Ⅱｂ層2.5（第103図）

Ｃ・Ｄ－27・28区で検出された。調査区の北西側で東西方向に確認された畝跡である。１条の幅は約40～60㎝で25条ほど検出された。

⑷ Ⅱｂ層３（第104図）

Ｃ・Ｄ－27・28区でⅡｂ2.5層のほぼ下面から検出された。南北方向に確認され，上層の畝跡と直交する。１条の畝の幅は，約30～60㎝で７条ほど検出された。

⑸ Ⅱｂ4層（第105図）

Ａ－26・27区，Ｄ－28区，Ｆ～Ｈ－29・30区と３か所で検出された。南北方向に確認され，一部には以前耕作された東西方向の畝跡が下面に見られる。１条の幅は約50㎝である。

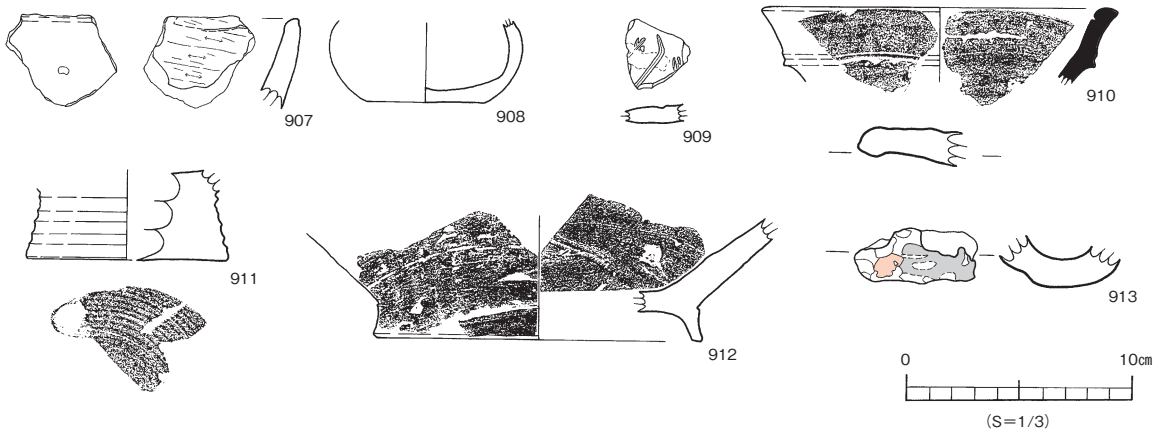
⑹ Ⅱｂ5層（第106図）

Ａ・Ｂ－26・27区で検出された。ほぼ南北方向に確認され，１条の幅は約40～80㎝である。検出された畝で最も長いものは約３ｍある。

３　遺構内出土遺物（第99図・第107図）

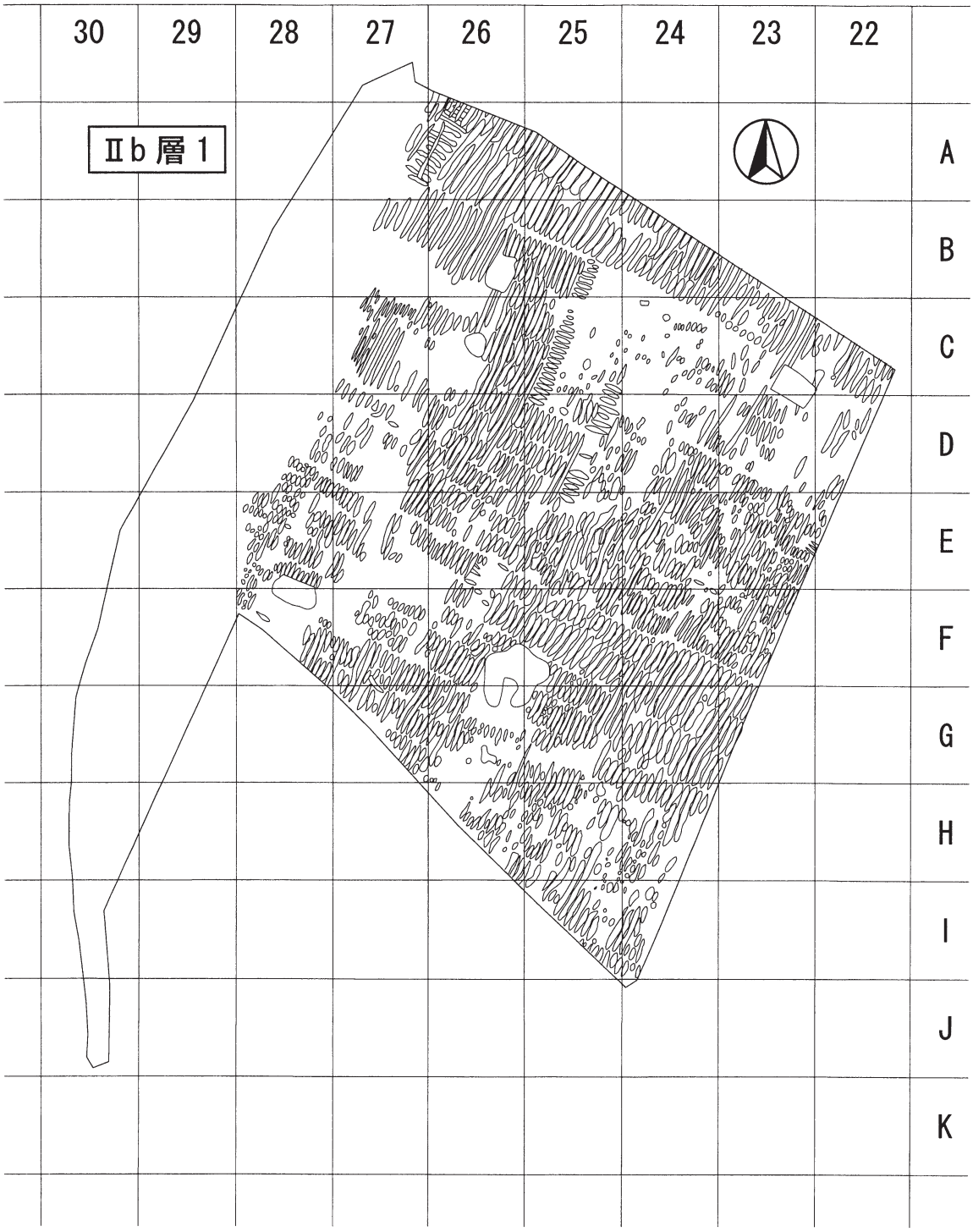
畝間状遺構の埋土中より古墳時代から近世の遺物が出土している。12点を図化した。907・908は，古墳時代の鉢形土器，坩形土器と考えられる。909は，古代の篦書き土器である。器種は不明で，見込みに書かれている。文字か記号かは判読できない。910は，古代の須恵器壺と思われる。911は，中世の柱状高台である。912は，中世の輸入陶器の鉢と考えられる。913は，近世のふいごの羽口である。外面にはガラス質の部分と黒色化した部分がみられる。

914～918は，古銭である。914は，北宋の「熙寧元寶」で，初鋳年は西暦1068年である。915は，北宋の「皇宋通寶」で，初鋳年は西暦1038年である。916～918は，明銭の「洪武通寶」である。いずれも背面は無文である。この洪武通宝に関しては，３枚積み重ねられた状態で出土している。これらは祭祀や埋納などに関わる可能性がある。

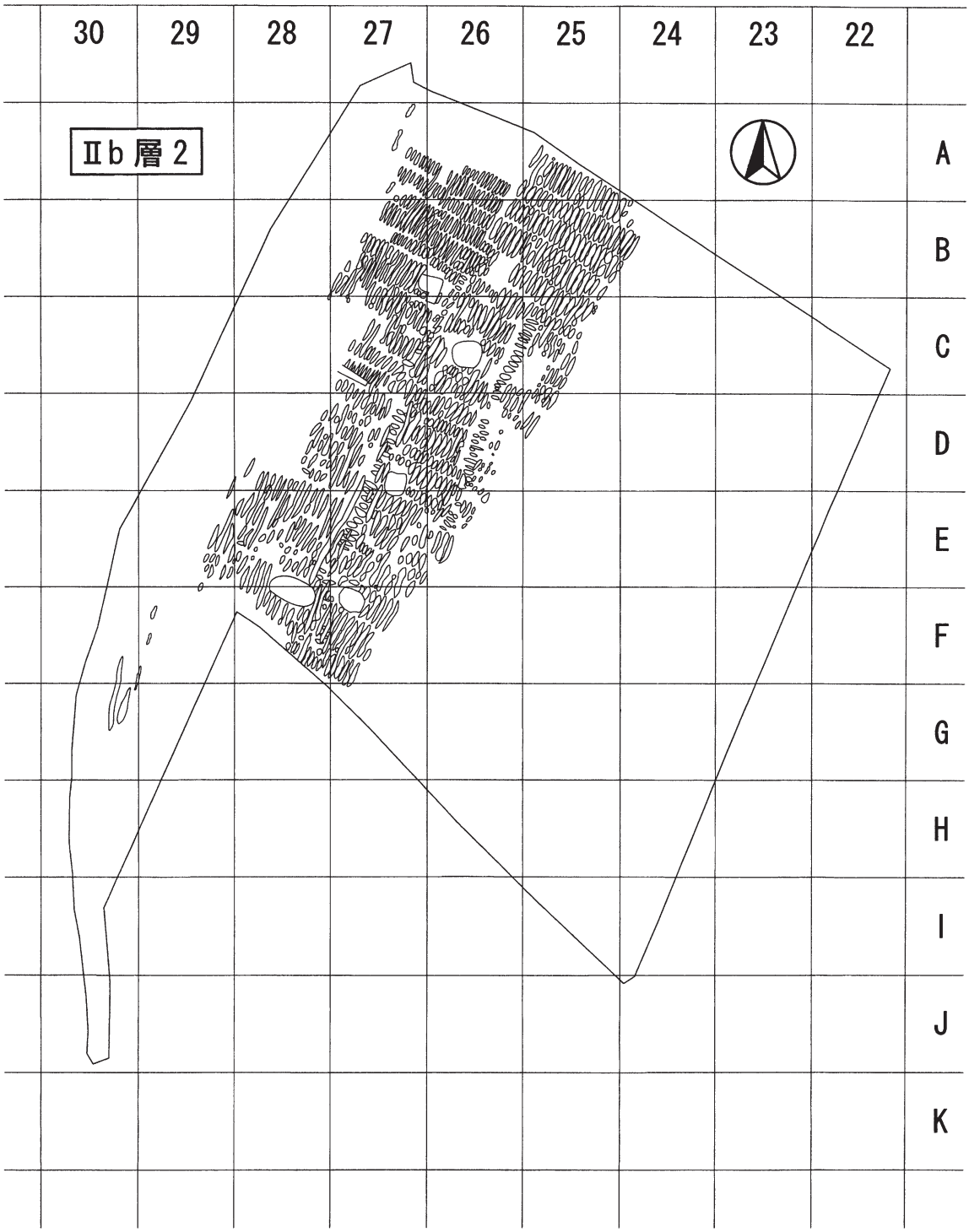


第99図　畝間状遺構内遺物実測図（１）

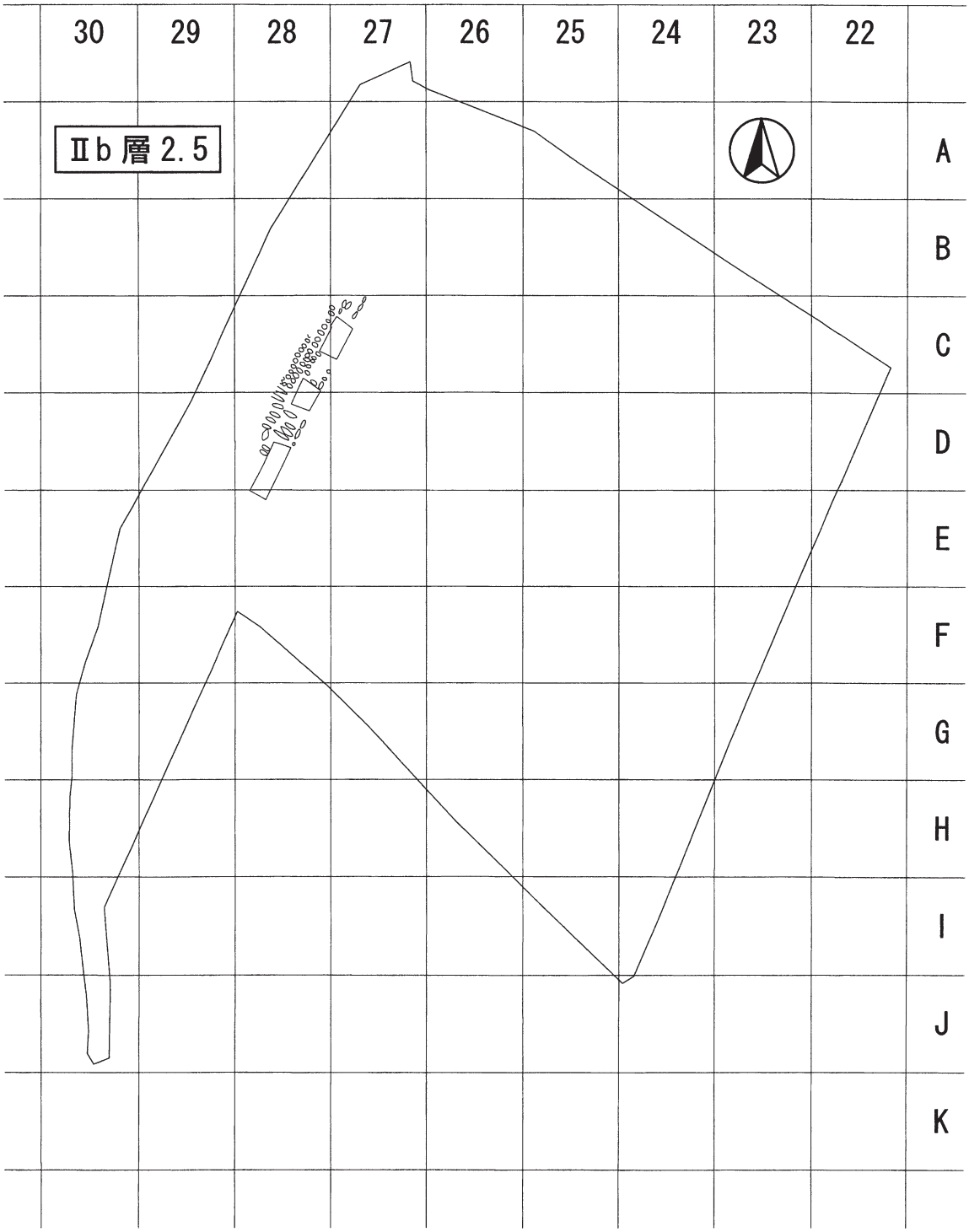
第100図　畝間状遺構検出状況（1）



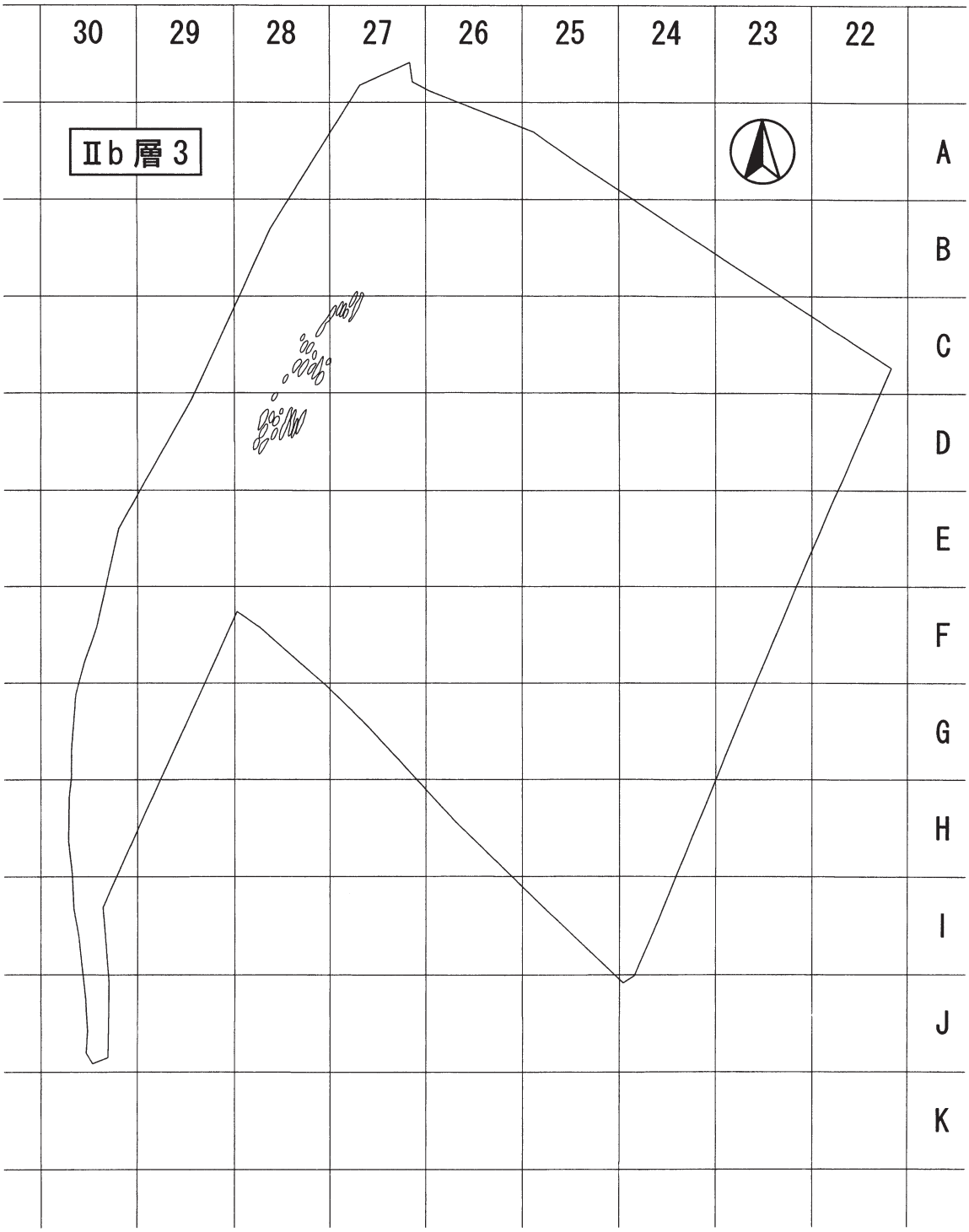
第101図　畝間状遺構検出状況（2）



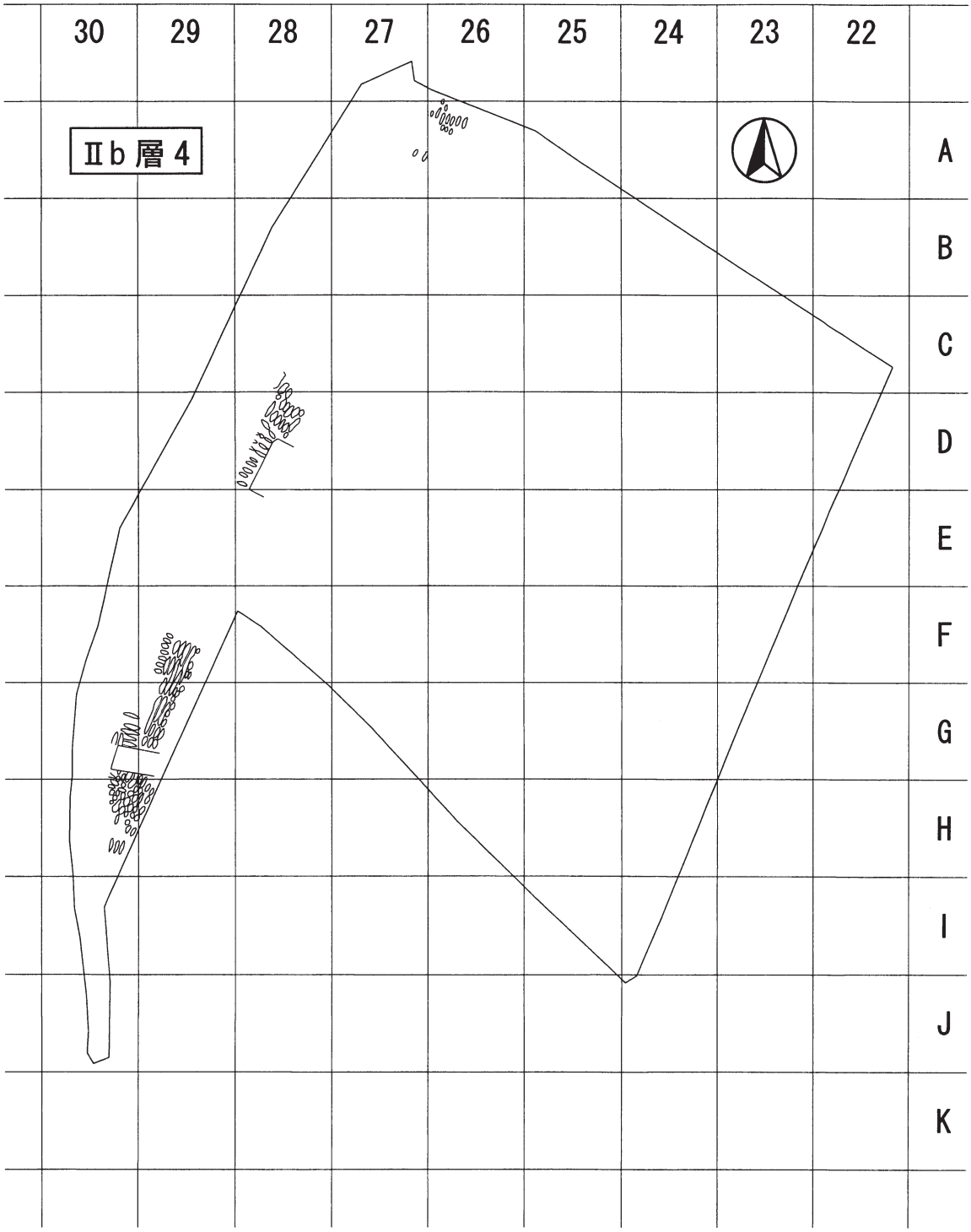
第102図　畝間状遺構検出状況（3）



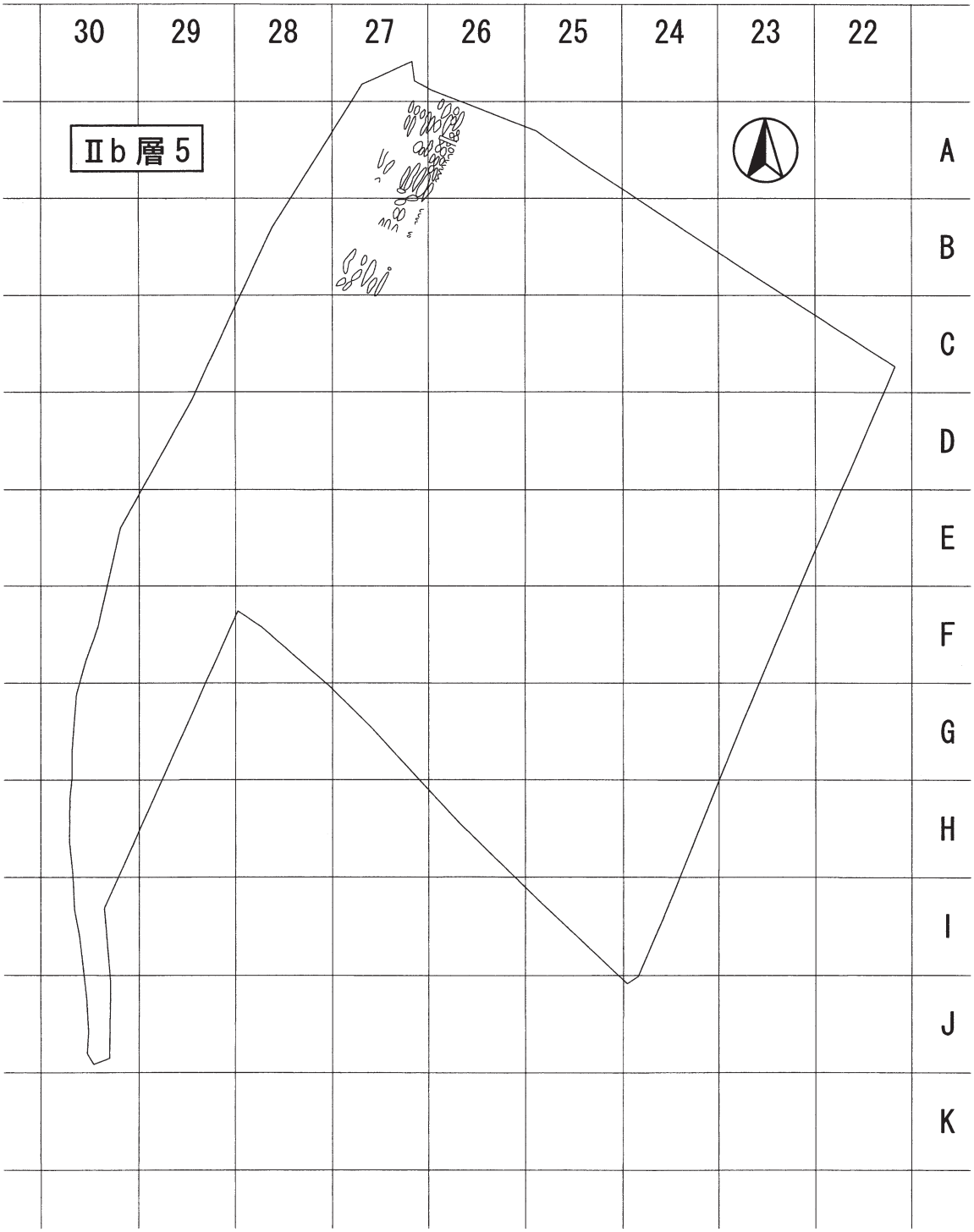
第103図　畝間状遺構検出状況（4）



第104図　畝間状遺構検出状況（5）



第105図　畝間状遺構検出状況（6）



第106図　畝間状遺構検出状況（7）

第２節　遺物

１　薩摩焼（第107図919）

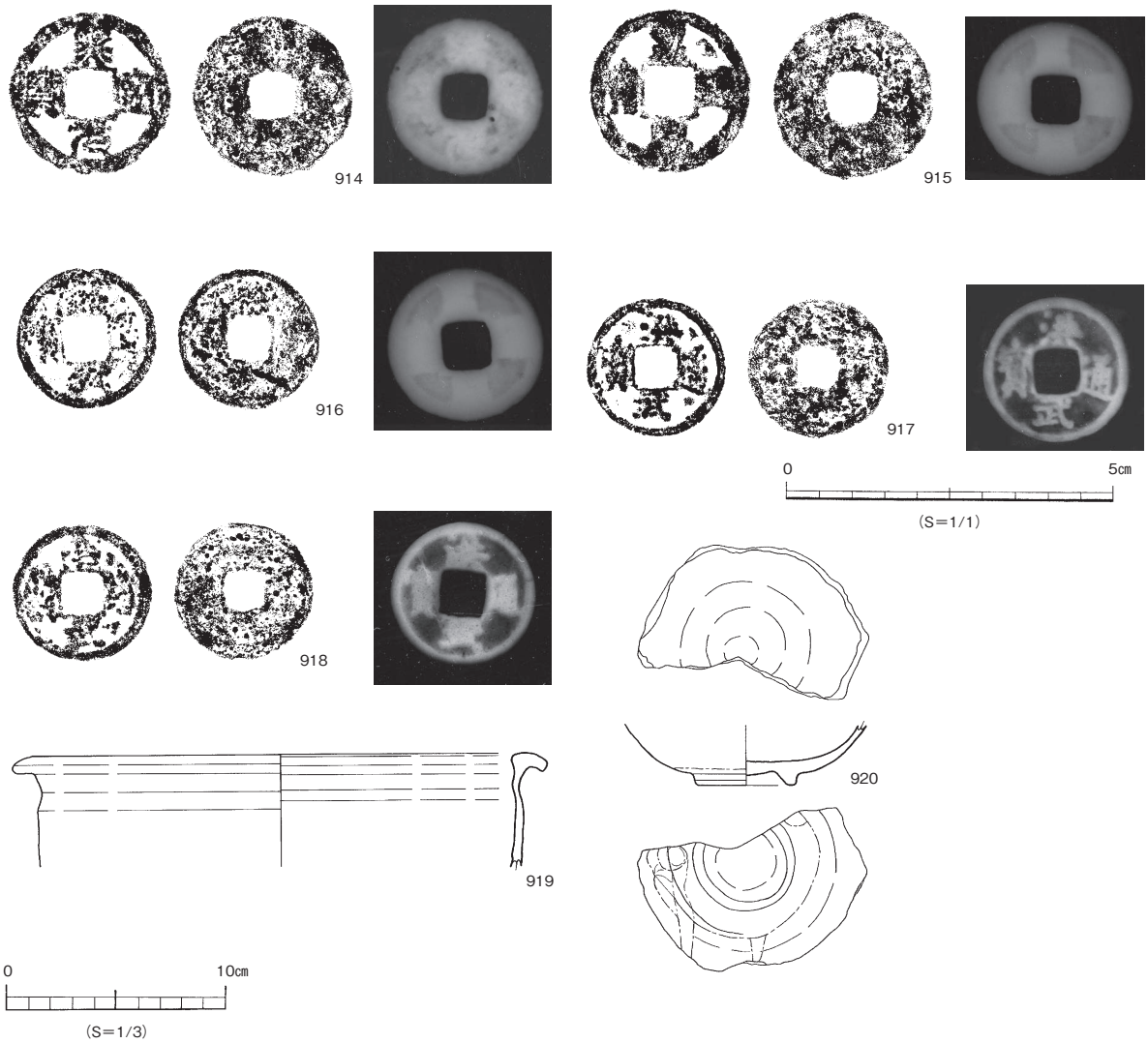
919は，片口鉢である。苗代川系で時期は17世紀代と考えられる。

２　肥前系陶磁器（第107図920）

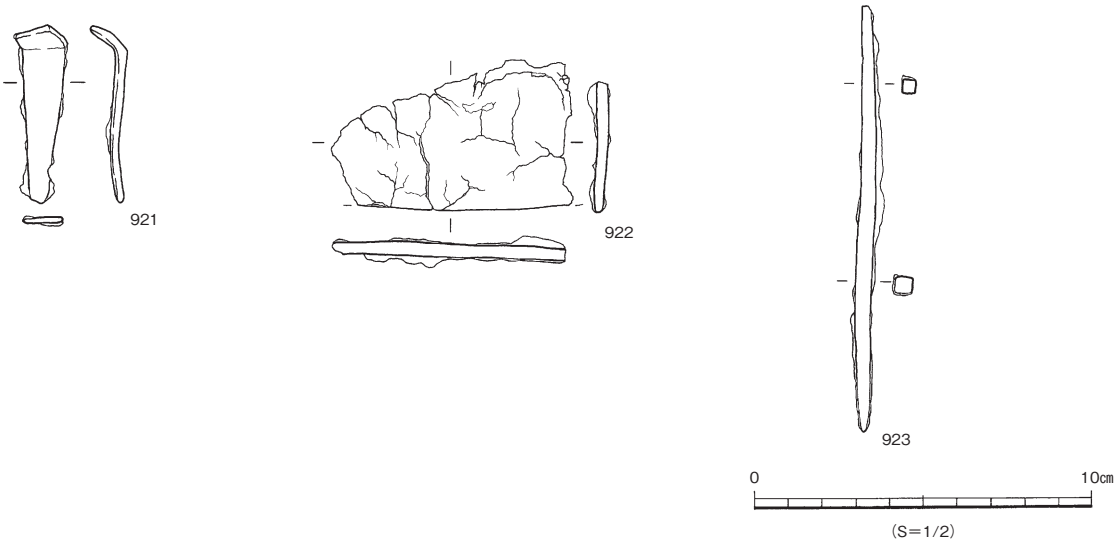
920は，皿で時期は17世紀代と考えられる。

３　時期不明鉄製品（第107図921～923）

921～923は，鉄製品である。近世の包含層からの出土だが，いずれも時期は不明である。921は，舟釘とよばれるものに類似する。922は，ひび割れの状況から鋳鉄であると考えられる。鉄鍋の一部の可能性もある。923は，断面が正方形で，棒状のものである。先端が尖るが，用途は不明である。



第107図　畝間状遺構内遺物実測図（２）　近世出土遺物実測図



第108図　時期不明遺物実測図

表34　畝間状遺構内遺物観察表（1）

挿図	番号	出土区		取上番号	器種	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
99	907	E	25	畝間	鉢形土器	暗灰黄	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	908	H	25	畝間	坩形土器	黄褐	橙	ナデ	ナデ		○	○					

表35　畝間状遺構内遺物観察表（2）

挿図	番号	出土区		種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
99	909	E	25	土師器	不明	―	―	―	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ書土器
	910	X	2	須恵器	壺	15.8	―	―	暗灰黄	灰黄	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	911	H	26	土師器	柱状高台	―	9	―	浅黄	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	
	912	H	26	国産陶器	甕	―	14.6	―	灰白	灰白	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内底面に淡緑色の灰釉
	913	H	26	土製品	ふいごの羽口	―	―	―	褐灰	にぶい橙	―	―	ガラス質付着

表36　畝間状遺構内遺物観察表（3）

挿図	番号	出土区		取上番号	種別	器種	直径（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
107	914	F	27	畝間	古銭	北宋銭	2.4	0.1	3.0	熙寧元寶
	915	F	27	畝間	古銭	北宋銭	2.5	0.1	3.0	皇宋通寶
	916	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶
	917	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶
	918	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶

表37　近世出土遺物観察表

挿図	番号	出土区		層	取上番号	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
107	919	B	24	Ⅱb	一括	薩摩焼	片口鉢	灰黄	内外面鉄・こげ茶	苗代川系
	920	E	25	Ⅱb	一括	肥前系陶器	皿	灰	内オリーブ	内外面とも施釉

表38　時期不明遺物観察表

挿図	番号	出土区		取上番号	種別	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
108	921	I	30	一括	鉄製品	舟釘？	5.3	1.4	0.4	8	
	922	E	17	一括	鉄製品	鋳鉄	7	4.6	0.5	40.6	鉄鍋片か
	923	I	30	242	鉄製品	不明	12.8	0.7	0.5	14.5	

第10章　化学分析

第１節　観察・分析方法

本遺跡出土の南福寺式土器口縁部内面に，わずかに残された赤色顔料を確認した。この顔料について，形状観察と成分分析を行った。

なお，復元後の調査であったことと残存量が微量であったことから，非破壊での観察・分析は困難とみて，電子顕微鏡用の試料を作成して調査を行った。また，比較のための胎土の分析についても，同様に試料を作成し，同じ条件で分析した。

１　形状観察

双眼実体顕微鏡（Nikon SMZ1000）による８～20倍観察及び走査型電子顕微鏡（日本電子製JSM-5300LV）による1000～3500倍観察を行った。

２　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）を使用した。分析条件は次のとおりである。

表39　成分分析表

Ｘ線照射径	：100μｍ
測定時間	：100s
Ｘ線管電圧	：50kV
電流	：自動設定
パルス処理時間	：P3
X線フィルタ	：なし
試料セル	：なし
定量補正法	：スタンダードレス

元　素	質量濃度 [%]	３σ [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	20.53	1.55	32.25
Si けい素	41.94	1.30	114.31
K カリウム	0.48	0.15	4.97
Ca カルシウム	4.38	0.25	66.62
Ti チタン	1.67	0.14	41.34
Mn マンガン	0.25	0.07	10.49
Fe 鉄	30.68	0.83	1536.14

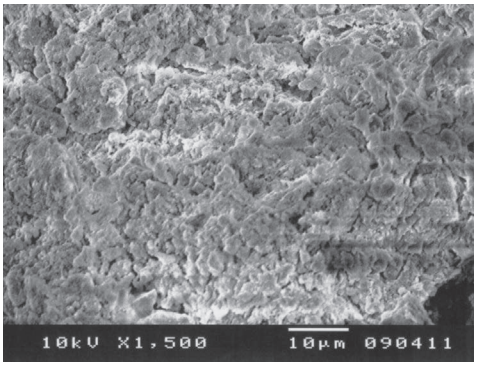


写真19　電子顕微鏡画像

第２節　結果

１　形状観察

残存している赤色粒子はわずかであったが，目視及び双眼実体顕微鏡観察により周囲の色調や胎土とは明らかに異なる赤褐色の粒子を確認した。電子顕微鏡観察により，胎土部分とは異なる不定形の粒子を確認した（写真19）。

２　蛍光Ｘ線分析

分析の結果，強い鉄（Fe）のピークが得られた（第109図スペクトル図）。胎土についても鉄のピークが見られる部分があったが，ケイ素（Si）やカルシウム（Ca）などのピークとの比較や分析結果（表参照）の検討，及び電子顕微鏡観察の結果から，この粒子は鉱物由来のベンガラであると考える。

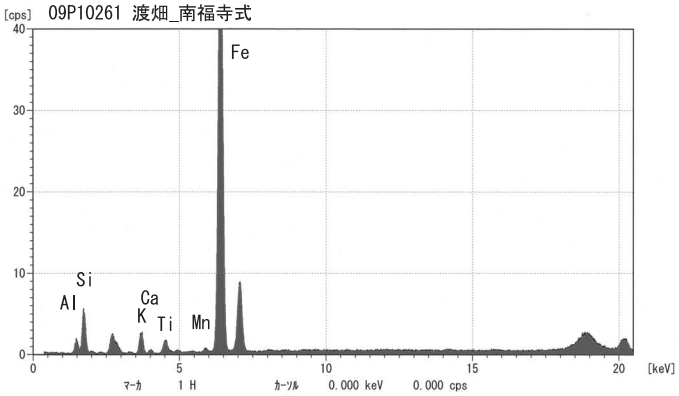
第３節　鹿児島県内における赤色顔料の観察例

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」,「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。

これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどが土器に付着したベンガラであり，朱の検出は数例しかない。これまでに蓄積した分析事例を次項観察表にまとめた。なお，当センターでは，遺跡から出土するベンガラについて，電子顕微鏡観察により次の２種類に分類している。

【パイプ】　*Leptothrix* などの鉄バクテリアに由来する，パイプ状の形状をもつ粒子

【非パイプ】　天然の鉱物に由来する不定形の粒子



第109図　スペクトル図

表 40　鹿児島県内出土赤色顔料観察表

（成分分析により同定した資料のみ掲載）

時期		地図	遺跡名	所在地	観察対象	ベンガラ パイプ	ベンガラ 非パイプ	水銀朱	その他
縄文時代	早期初頭	1	岩本	指宿市	岩本式土器		○		
		2	加栗山	鹿児島市	岩本式土器		○		
		3	稲荷原	伊集院町	岩本式土器３点		○		
		4	上山路山	伊集院町	岩本式土器４点		○		
		5	ホケノ頭	田代町	岩本式土器１点（完形品）		○		
		58	市ノ原３地点	日置市東市来町	岩本式土器	○			
	早期後葉	6	上野原	国分市	平栫式土器(深鉢壺)耳栓	○	○		○
		7	城ヶ尾	福山町	塞ノ神式土器共伴の耳栓状土製品	○	○		○
		8	桐木B	末吉町	土器付着	○	○		
		48	関山	曽於市末吉町	変形撚糸文土器（入れ子）	○	○		
	中期	9	星塚	横川町	深浦式土器	○	○		○
		10	山ノ脇	伊集院町	深浦式土器	○	○		
		11	干迫	加治木町	深浦式土器	○	○		
		49	上水流	南さつま市金峰町	深浦式土器ほか	○	○		
		12	前床	輝北町	石皿(春日式土器共伴)	○	○		
	中期末	13	市来貝塚	市来町	南福寺式土器	○	○		
		14	柿内	高尾野町	南福寺式土器	○	○		
		59	渡畑	南さつま市金峰町	南福寺式土器		○		
	後期	15	上ノ平	伊集院町	土器付着，土坑内		○		
		16	出水貝塚	出水市	出水式土器	○	○		○
		17	山ノ中	鹿児島市	土器，敲石(指宿式土器共伴)	○	○		
		13	市来貝塚	市来町	市来式土器(台付皿形土器)	○	○		○
					二枚貝に入ったベンガラ	○	○		
		18	草野貝塚	鹿児島市	市来式土器(台付皿形土器)	○	○		
					軽石加工品		○		
		11	干迫	加治木町	市来式土器(台付皿形土器)		○		白色顔料
					市来式深鉢形土器（１点）		○		
					鐘崎式土器		○		
					加曽利Ｂ式土器類似の注口土器(移入品)			○	
		19	佐土（宮崎県）	高原町	市来式土器（台付皿形土器）		○		白色顔料
		20	滝ノ下	枕崎市	市来式土器に伴う磨石	○	○		○
		21	楠元	川内市	台付皿形土器		○		
		22	中原	姶良町	鐘崎式土器		○		
		23	一湊松山	上屋久町	鐘崎式土器		○		
					市来式土器(台付皿形土器)	○	○		
	晩期	24	柊原貝塚	垂水市	軽石製品	○	○		
		6	上野原	国分市	土坑内出土	○	○		
		25	榎崎Ｂ	鹿屋市	黒川式土器(浅鉢)		○外面	○内面	
		26	干河原	加世田市	黒川式土器(浅鉢深鉢)	○	○		○
		27	枦掘	松元町	黒川式土器（深鉢）		○		
		28	出口	根占町	突帯文に伴う壺形土器	○	○		○
		49	上水流	南さつま市金峰町	黒川式土器(浅鉢)		○外面	○内面	
					黒川式土器	○			
		50	関山西	曽於市末吉町		○	○		
		51	チシャノ木	曽於市大隅町	黒川式土器	○	○		
弥生時代		24	柊原貝塚	垂水市	板付Ｉ式土器(壺形土器)	○	○		
		29	東田	高山町	口唇部に櫛描波状文のある壺形土器	○	○		
		30	西牟田	東串良町	北部九州から移入された壺形土器		○		
		52	市ノ原４地点	日置市東市来町	壺型土器		○		黒色顔料
		53	堂園Ａ	南九州市川辺町	土坑内埋土	○	○		
		54	上苑Ａ	志布志市有明町	竪穴住居内出土の浅鉢等	○	○		
古墳時代		31	鳥越古墳	阿久根市	小口積みの石室内面と割り竹型木棺跡(４ｃ中)		○		
		32	島内地下式横穴4号	えびの市	鹿角製刀装具1994年			○	
					石室内面1994年	○	○		
		33	飯隈地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○		
		34	神領地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○		
		35	中尾1号地下式横穴	吾平町	玄室床面		○		
		36	岡崎4号墳	串良町	土師器		○		
		36	岡崎1号地下式横穴	串良町	朱玉	○	○		
		37	北後田地下式横穴	高山町	頭蓋付着			○	
		38	天神原地下式横穴	高山町	石棺内側付着	○	○		
		39	原田地下式横穴	有明町	石棺内側付着	○	○		
		40	平田地下式板石横石室	大口市	丹粉	○	○		
		41	成川	山川町	磨石付着	○	○		
					成川式土器	○	○		
		42	保養院	姶良町	成川式土器(鉢高杯)	○	○		○
		29	東田	高山町	成川式土器(手づくね土器)	○	○		
		43	鹿大構内L-6区	鹿児島市	竪穴住居炉周辺の床面	○	○		
		55	塚崎古墳	肝付町高山	埴輪付着	○			
古代		44	西ノ平	川内市	内赤土師器		○		
		45	フミカキ	松元町	土師器		○		
		46	下永迫A	伊集院町	土師器		○		
		47	六反ヶ丸	出水市	土師器		○		
		52	市ノ原４地点	日置市東市来町	土師器		○		
		49	上水流	南さつま市金峰町	土師器椀・杯ほか		○		
		56	芝原	南さつま市金峰町	土師器		○		
		57	持躰松	南さつま市金峰町	土師器		○		

※　一部宮崎県を含む

第11章　発掘調査のまとめ

第１節　縄文時代の概要

１　遺構

縄文時代中期中葉～晩期の遺構は，Ｕ～Ｚ－１～10区を中心に分布しており，特にＷ～Ｙ－５・６区において，遺構と遺物が集中している。

該期の遺物包含層はＸ～Ⅻ層に相当するが，河川による氾濫堆積層などを含んでいることから層が混在しており，時期と層の関係を明確に示すことは困難である。したがって，該期の遺構はＸ～Ⅻ層から検出されたものを一括して取り上げることにした。

検出された遺構は，集石３基，土坑29基，焼土跡１基，ピット255基である。集石１・２号が検出された一帯からは，焼土跡や炭化物を含むピットや土坑が検出された。住居跡や竪穴状遺構は，層位の攪乱や，該期の住居跡の検出自体が困難であるなどから，はっきりと確認することはできなかった。

しかし，本遺跡を含めた一帯は河川沿岸ということから，生活に適した好環境に位置している。さらには，隣接する芝原遺跡から，該期の竪穴状遺構が検出された。これらのことを踏まえると，当時，本遺跡ではある程度の規模を持った集団生活を営んでいたと考えられる。

２　中期中葉～後期出土土器

該期の土器については，様々なバリエーションのものが出土した。

Ⅰ類に示した４点とⅡ類に示した１点は，既存の形式で言う春日式土器である。施文位置と施文方法から，Ⅰ類を前谷段階，Ⅱ類を轟木ヶ迫段階とした。

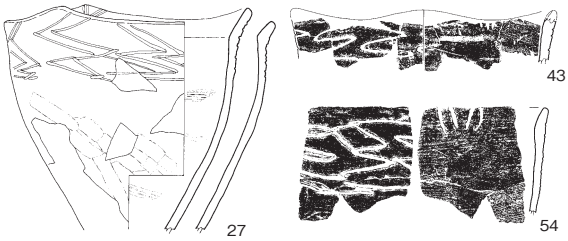
東和幸氏は，春日式土器の初期段階である北手牧段階を中期中葉に位置づけた。その後，春日式土器は前谷段階で盛行を迎え，轟木ヶ迫段階から南宮島段階で衰退していくとしている（東2009）。そこで，Ⅰ・Ⅱ類を中期中葉～後葉と位置づけることにした。尚，先述した芝原遺跡の竪穴状遺構からは，同系列の遺物が出土している。

Ⅲ類は，太い凹線文を施すものを一括している。既存の型式で言うと，阿高式土器から南福寺式土器の範疇に相当する。田中良之氏は，阿高式土器の編年指標を文様帯数と文様帯の伸縮により示すことができるとし，施文の伸長によりⅠ式は胴部上半部，Ⅱ式は胴部最下端まで，Ⅲ式を口縁部のみとしている（田中1979）。また，前川氏は，南福寺式土器を器形や文様要素の主体は阿高式から踏襲するが，口縁部の肥厚や簡素な曲線による施文法など細かな変化を唱えている（前川1979）。これを受けて，Ⅲ類はａ類（阿高式土器）とｂ類（南福寺式土器）に細分することにした。

しかし，両者の時期を中期・後期として明確に位置付けることについては，未だ解決をみない状況である。そのため，本書ではⅢ類を中期～後期の移行段階の土器として捉えることにした。

Ⅳ類は，Ⅲｂ類で示した南福寺式土器の器形文様を踏襲する出水式土器である。太い凹線文から細い沈線へと推移し，文様も簡単な直線を口縁部に集中して施すようになる。河口貞徳氏が提唱する縄文時代中・後期の土器編年によると，両者の変遷期が縄文時代中期から後期への移行期となる（河口1957）。これを踏まえ，Ⅳ類以降を後期出土土器とした。

Ⅴ類は指宿式土器に類し，Ⅵ類は同型式の底部を一括した。指宿式土器は，２本の平行沈線による曲線文，直線文が特徴的である。段階的には，曲線から直線へ，複雑なものから単純なものへと変遷している。このような施文様に加え，ここでは99に見られるような横Ｗ字文が施されているものも出土している。縦方向の施文が横に展開するような施文は，指宿式土器本来の文様モチーフではなく，後期阿高式系に多く認められるとしている（黒川2009）。しかし，黒川氏は類例は少ないが，これまでに同様の出土例があることも示している。その中には，本遺跡と近い同市に位置する上水流遺跡（第110図）や，隣市の堂園遺跡Ｂ地点も含まれ，本遺跡との関連性が窺える。



第110図　指宿式土器（上水流遺跡出土）

Ⅶ類は，貝殻腹縁部による刺突文で擬似縄文的な効果を上げている土器を一括して掲載した。ほとんどが２本の沈線間に貝殻刺突文を施す文様であることから，指宿式期に該当すると考えられる。Ⅷ類は，磨消縄文土器を一括して掲載した。Ⅶ類同様２本の沈線間に縄文を施しているものが多い。Ⅸ類は，口縁部の断面部が三角形ないし長三角形を呈すもので，既存の型式で言う市来式土器である。ただ，418については，丸尾式土器と判断した。Ⅹ・Ⅺ類は，器形による判別が困難な無文土器及び型式不明の把手，底部を一括して掲載した。

3　晩期出土土器

晩期の土器は，時期を位置付ける明確な鍵層がないことから，器面調整に重きを置いて，器形と文様などによる分類を優先させた。その結果，Ⅻ類をａ類（粗製土器），ｂ類（精製土器），ｃ類（半粗半精製土器）に分けた。

晩期土器の型式については，堂込秀人氏が作成した編年図をもとに分類を行った（堂込 1997）。

ａ類は，粗製深鉢形土器である。器形が判明しているものについては，549～553が入佐式土器の旧段階で，554～556が入佐式土器の新段階に属する。ｂ類は，精製浅鉢形土器である。588～603は入佐式土器に属する。607・608は黒川式土器に属する。ｃ類は，半粗半精製の浅鉢形土器で，黒川式土器に属する。

4　土製品

足形土製品とメンコ類を土製品として一括した。足形土製品については，隣接する芝原遺跡出土の足平部と接合する足首部が出土した（第111図，写真20）。

土製品として，身体を表現するものに土偶がある。土偶の初現は関東地方で縄文時代の早期前半であり，九州の中・北部では，後期初頭で出土している。本製品は，膝から下部にかけてのみである。土偶の多くは壊されて出土していることから，上部が存在していた可能性も否定できない。ただ，本製品は膝から足の指に至る細部まで表現しており，このような土偶は他に類を見ない。

土偶に関しては，その用途や目的について，これまで祭祀的な意味合いを持つという指摘もあったが，明確には示されていない。本製品については，当時の生活文化を知る上で貴重な資料となり得るため，今後検討していく必要がある。

写真20　足形土製品出土状況

メンコについては，土器の底部を二次的加工により利用したものであるが，用途並びに時期は不明である。

5　石器

河川沿岸という立地条件のため石材が容易に獲得できることから，量は少ないが，食材加工具である磨石・敲石の割合が大きい。また，磨製石斧も鑿形のものや大型のものが出土しており，当時の生活様式が窺える。さらに特筆すべきは，鋸歯尖頭器と鋸歯縁石器が少量ではあるが出土したことである。隣接する芝原遺跡でもその出土が確認された。山崎純男氏は，石銛・組み合わせ銛は漁撈文化が，西九州に広く展開していたことを示すものであると指摘している（山崎 1988）。本遺跡及び芝原遺跡で出土したことは，それが南九州まで及んでいたことを窺える資料となる。

引用・参考文献

東　　和幸　2009　「鹿児島の縄文時代中期土器」
『南九州縄文通信』第20号刊行記念研究会
南九州縄文研究会

田中　良之　1979　「中期・阿高式系土器の研究」
『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会

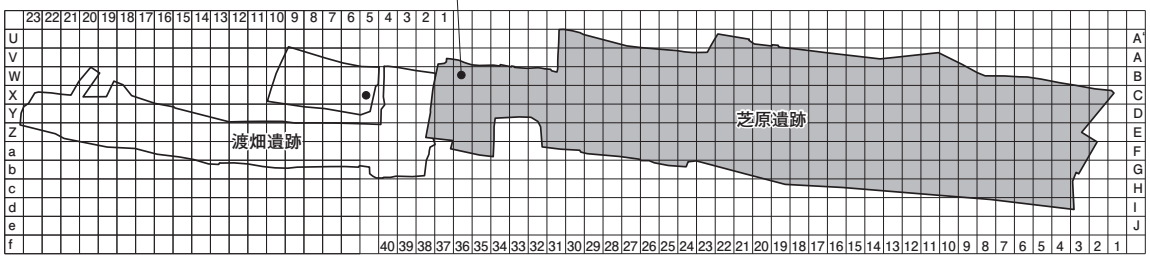
前川　威洋　1979　「縄文後期文化－九州－」
『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会

河口　貞徳　1957　「南九州後期の縄文式土器」
『考古学雑誌』第42巻第２号

黒川　忠広　2009　「上水流遺跡出土の指宿土器－後期阿高式系土器との接点－」
『南九州縄文通信№20　南の縄文・地域文化論考　上巻　新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文研究会
「上水流遺跡１」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（113）「掲載遺物№27，41，54」

堂込　秀人　1997　「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」
『鹿児島考古№31』鹿児島県考古学会

山崎　純男　1988　「西九州漁撈文化の特性－石製銛頭（石銛）を中心に－」
『季刊 考古学 第25号』



第111図　足形土製品出土状況図

第２節　弥生・古墳時代の概要

Ａ地点からは，遺構は検出されなかった。遺物は，少数ではあるが弥生時代前期から古墳時代後期と考えられる土器が出土している。

甕形土器の分類に土器形式をあてはめると以下のとおりである。Ⅰ類からⅦ類が弥生時代，Ⅷ・Ⅸ類が古墳時代とした。

Ⅰ類：刻目突帯文　Ⅱ類：入来Ⅱ式　Ⅲ類：黒髪式
Ⅳ類：須玖式　Ⅴ類：弥生後期前半　Ⅵ類：松木薗式
Ⅶ類：中津野式　Ⅷ類：東原式　Ⅸ類：笹貫式

弥生時代中期後半のⅢ類とⅣ類は搬入品とみられ，他地域との交流が考えられる。Ⅳ類の703は，口縁部上面に暗文があり，赤色顔料が塗布され丁寧なつくりである。Ⅶ類の中津野式土器は，弥生時代終末に位置づけられるが，一部は古墳時代に入る可能性もある。

古墳時代後半期は，Ⅸ類の笹貫式土器が出土した。甕の口縁部は直立あるいは内湾しており，１条の突帯が貼付されるものである。突帯には貼り付けの際の指頭圧痕がみられるもの（717・719・720）がある。高坏は，坏部が埦形で外面に赤色顔料が塗布されたもの（758・759）がみられる。古墳時代の甑形土器（761）が出土したことは特筆される。包含層からの出土で詳しい時期は分からないが，「つつぬけタイプ」（杉井1999）で，南九州で出土している甑の多くがこのタイプである。

第３節　古代の概要

１　土師器

坏・埦ともに全体形状の把握できるものは少ない。埦については，高台の低いもの（781・782）が出土しており，９世紀頃と思われる。見込みに刻書された埦（783）が出土している。黒色土器は，内面のミガキが顕著で体部が丸みをもつもの（787・788）があり，９世紀末～10世紀前半と考えられる。

２　須恵器

出土数はそれほど多くはないが，埦・蓋・甕・壺などがある。主体は，甕・壺のような大型貯蔵具である。渡畑遺跡の近くには，「中岳山麓窯跡群」が所在し，出土している須恵器の多くはこの窯で焼かれたもので，時期は９世紀中頃と思われる。

第４節　中世の概要

Ａ地点は調査面積が小さく，遺構は検出されず，出土遺物も少ない。以下述べる内容は，Ａ地点の出土遺物を整理し報告書を作成する段階で分かったこと，考えたことをまとめたものである。今後，Ｂ地点の調査成果が明らかとなり，中世における渡畑遺跡の位置付けや評価は変更される可能性もあることをあらかじめ断っておく。

１　輸入陶磁器の時期

今回，器種ごとの組成を集計していないが，出土遺物は太宰府の貿易陶磁編年によればＣ～Ｇ期，つまり11世紀後半から15世紀頃のもので構成される。Ａ地点の傾向としては，Ｅ・Ｆ期（13世紀前後～14世紀初頭）のものがやや多いようである。

２　海の道と物流ー墨書のある陶磁器，滑石製品，カムィヤキの出土からみえてくるものー

Ａ地点から，２点の墨書のある陶磁器が出土した。輸入陶器（853）と竜泉窯系青磁（873）で，２点とも底部外面にみられる。残念ながら破片であり，墨書が文字なのか記号なのかは判読できなかった。青磁は，Ｇ期（14世紀以降）のものと思われる。

博多遺跡群からは，墨書陶磁器が３千点以上出土している。墨書された文字や記号は，種類が様々で，それらがどこで書かれたのかについても諸説ある。

県内での出土例は少ないが，万之瀬川下流地域の遺跡から数点ではあるが出土している。上水流遺跡では，見込みに「立」に類似した墨書がある青磁の香炉が出土している。時期は，Ｇ期のものである。正式な報告書は刊行されていないが，芝原遺跡から「十」「大」の墨書白磁が２点，「大」の朱書青磁が１点出土している（中村・栗林 2003，鹿児島県教育委員会2005）。

滑石製品がＡ地点から２点（902・903）出土した。Ｂ地点では，滑石製石鍋も出土していることから，それらは石鍋を再加工したものと考えられる。

滑石製石鍋は，長崎県西彼杵半島を原産地として，中世を通じて使用され，県本土はもとより奄美諸島・琉球諸島まで広く分布することがわかっている（栗林1994，堂込1999）。また，県内で出土する石鍋の中心年代は，12世紀から13世紀の中世前期と指摘されている（栗林1994）。

万之瀬川下流地域では，持躰松遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡で滑石製石鍋が出土している。また，最近の発掘成果から新たに出水市大坪遺跡，いちき串木野市安茶ヶ原遺跡，日置市市ノ原遺跡・向栫城跡などで出土していることが知られている。これら出土地点は，先に栗林氏が指摘しているように，薩摩半島西岸地域が多く，河川流域に分布している。

Ａ地点では，カムィヤキ（849）も出土した。県本土において小片で出土する例が多いが，本遺跡では底径が12㎝の比較的大きな壺の胴部下半が見付かっている。

カムィヤキは，11～13世紀に徳之島で生産され南

西諸島に広く分布していることがわかっている（堂込1999）。

最近の発掘成果によれば，万之瀬川下流地域の上水流遺跡，芝原遺跡，持躰松遺跡で出土している。また，いちき串木野市栫城跡，日置市向栫城跡などでも出土している。カムィヤキの県本土における出土分布も，滑石製石鍋のものと重なる部分もある。

墨書陶磁器をはじめこれらの遺物は，在地のものではなく外部から持ち込まれた広域流通品である。

以前，考古学と文献史学の側から万之瀬川下流地域と南方（奄美諸島－琉球－中国）や九州西北部（肥前）との密接な関係が指摘され，中世の流通経路の復元が行われたことがある（栗林1994，堂込1999，柳原1999・2003）。

今回の出土事例からも，博多－肥前－薩摩半島－南島をめぐる交易ルート（海の道）を想定することができ，海を介した中世のヒトやモノの動きがあったことを考古学的に裏付けることになるだろう。

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会　2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

鹿児島県教育委員会　2006『先史・古代の鹿児島（通史編）』

栗林文夫　1994「滑石製石鍋出土遺跡地名表－鹿児島県」『大河』第５号　大河同人

堂込秀人　1999「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』１　南九州城郭談話会

中村和美・栗林文夫　2003「持躰松遺跡（２次調査以降）・芝原遺跡・渡畑遺跡について」『古代文化』第529号　古代学協会

中村和美　1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会

柳原敏昭　1999「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』」山川出版社

柳原敏昭　2003「平安末～鎌倉期の万之瀬川下流地域－研究の成果と課題」『古代文化』第529号　古代学協会

第５節　南九州における古墳時代の甑形土器

１　はじめに

古墳時代の甑形土器については，南九州では宮崎県地域に集中して出土しており（杉井2002），鹿児島県内での出土例は極めて少ない。薩摩半島や鹿児島湾岸地域は，点的にしか存在せず，基本的に製作・使用していなかったとされる（中村2004・2009）。

薩摩半島西岸地域に所在する渡畑遺跡（Ｂ地点）から古墳時代の甑形土器が１点出土した。以前，県内の類例が紹介されたことがあったが（三垣2005），その後の発掘調査で出土事例も増えている。本稿では，南九州地域で出土した甑形土器を集成し，その地域性を探っていきたい。

２　甑形土器の分類

甑のさまざまな要素の中で，大きさ，蒸気孔，把手に着目し分類が行われてきた（杉井1999・2002）。本稿でも甑の分類は基本的に杉井氏の蒸気孔による形態分類（表41，図112）を用いる。

大きさ：容量１㍑前後は小型，５～15㍑程度は大型に区分できる。弥生時代後期の鉢形有孔土器は小型，古墳時代中期以降の把手付甑は大型に分類できる。

蒸気孔：スノコ状のものを入れて使用されたと想定されスノコを支える工夫が行われているかどうかで分類する。大きくはスノコ支え有りタイプとスノコ支え無しタイプである。さらに，蒸気孔の形態により多孔タイプ，粘土による桟を渡すタイプ（桟作り付けタイプ），桟渡し用の小円孔を有するタイプ（桟後付けタイプ），つつぬけタイプの４つに細分できる。

把　手：把手の有無による

３　南九州の甑形土器の様相

⑴薩摩半島および鹿児島湾岸地域（図114）

これらの地域からの出土例は極めて少なく，いずれも「つつぬけタイプ把手無大型甑」である。薩摩半島では，日置市吹上町入来遺跡と南さつま市金峰町渡畑遺跡で出土している。入来遺跡の６号住居跡から出土した甑（図114-２）は完形品で，器面調整はハケ目で仕上げられている。他に須恵器も共伴しており６世紀中頃のものと思われる。渡畑遺跡から出土した甑（図108-３）は，包含層から出土したもので，調整は工具ナデで指頭圧痕が確認できる。鹿児島大学構内遺跡では，河川跡から出土しており，出土地点の近くには古墳時代後半期の集落跡が見付かっている（中村2004）。

⑵川内平野（図115）

薩摩川内市東大小路町の大島遺跡では，古墳時代から古代の甑がある程度まとまって出土している。「多孔タイプ」「桟作り付けタイプ」「つつぬけタイプ」など複数のタイプが出土しているのが特徴である。

「多孔タイプ」（図115-１）の蒸気孔は，円孔の周囲に４～５つの円孔がある。「桟作り付けタイプ」（図115-３）は，胴部に貼付突帯がめぐり，外面にはナデ調整が施され成川式土器の特徴がよく表れている。口径も20㎝を超えると思われ，大型甑に分類できる。

「つつぬけタイプ」（図115-４～６）は，外面の調整がタタキ目であるのが特徴である。４は,「つつぬけタイプ把手付大型甑」で口径・器高とも20㎝を超えるものと思われる。器形は，ゆるやかに外反するもので把手は牛角状のものを押しつぶした平たいものである。外面にはタタキ目が残り，須恵器に類似する。古代の大型竪穴状遺構からの出土であるが，時期は６世紀頃と推定されている（宮田2005)。

大島遺跡では,「在地色の強い成川式土器の特徴がみられる甑」と九州北部地域で分布が多い「つつぬけタイプ把手付甑」の両方がみられる。また，古代の竪穴住居跡が23軒発見され，その中の２軒は竈付住居跡である。以前竈付住居跡の発見から，肥後国からの入植者の存在が想起されたが（川口2007),「つつぬけタイプ把手付甑」の出土からも九州中・北部地域との何らかのつながりを考えることができる。

２つのタイプの甑が出土した事実は，古代の竈付住居跡の出現の仕方，つまり「全ての住居跡に竈が設置されているわけではないこと」と関連があろう。大島遺跡の８世紀の集落跡について「遺跡を形成した集団の主体は在地の人々であった可能性も考慮すべき」との指摘もあるが（川口2007)，古墳時代の甑からも他地域からの影響を受けながらも在地の人々は自分たちの方法で甑を製作した可能性を想起させる。

⑶えびの盆地（図116）

宮崎県えびの市佐牛野遺跡，上田代遺跡から「多孔タイプ",「つつぬけタイプ」の甑が出土している。

「多孔タイプ」(図116-１）は，溝状遺構から出土した甑の底部で，８～９つの小円孔がある。

「つつぬけタイプ把手無甑」(図116-４）は，竪穴住居跡から出土したものである。口縁部がやや内弯気味で口径16.5㎝，器高18.2㎝で外面はハケ目調整で仕上げられている。蒸気孔の端部は肥厚し，やや尖り気味になっている。須恵器や須恵器模倣坏（以下模倣坏とよぶ）も共伴しており，甑の時期は５世紀後半から６世紀初頭と考えられる。

⑷都城盆地（図117）

都城市鶴喰遺跡では，竈付住居跡とともに多くの甑が出土している。これらの甑は「つつぬけタイプ」や「桟後付けタイプ」に分類できる。出土している大部分は「つつぬけタイプ」で，把手付のものと無いものとがある。

「つつぬけタイプ把手付大型甑」(図117-１）は，牛角状の把手が付き，内外面ともに工具ナデ調整が施されている。住居内の土坑に正位で埋設されたもので，祭祀など儀礼とのかかわりが考えられる。

「つつぬけタイプ把手無大型甑」(図117-２）は，口縁部を欠くが口径は20㎝を超えるものと思われる。

このタイプは，宮崎県地域に集中して分布し６世紀代以降のものとされる（杉井2002)。鶴喰遺跡からは，須恵器の坏蓋が共伴しており，時期は７世紀中頃と推定される。

「つつぬけタイプ」の特徴として，外面はナデ調整が施されているものが多い。内面に接合痕が明瞭に残るもの（図117-３・４）も見られる。

「桟後付けタイプ」(図117-５・６）は，口縁部がバケツ形で，口径・器高ともに20㎝を超える大型甑である。蒸気孔付近には穿孔が２つあり，その孔は対置されている。胴部に１条の絡縄突帯がめぐるものがある（図117-６)。

このタイプの特徴は，外面に接合痕が明瞭に残っていることである。須恵器坏蓋が共伴しており，時期は７世紀中頃と思われる。

鶴喰遺跡22号住居跡では，竈のかけ口にかけられたままの状態で甕が出土し，甑の使用方法を考える上でも注目される。同じ住居跡からは甑が出土していることから，甑は甕の上にかけられたものと想定されている（米澤2004)。

牛角状の把手がある「つつぬけタイプ把手付甑」は，九州北部地域の影響が考えられる。また，器形がバケツ形で絡縄突帯がある甑は，成川式土器，その中でも最新段階の笹貫式土器の特徴がよく表れている（中村2009)。

鶴喰遺跡では，バケツ形の口縁部で平底の甕と丸底甕の２種類が出土し，竈・甑・坏（模倣坏）・丸底甕がセットで確認されていることが指摘されている（中村2008)。

都城盆地は，甑の製作方法において，川内平野と同じように在地的な特色がありながらも他地域からの影響を強く受けている地域と言えるだろう。

⑸肝属平野（図118）

志布志市上苑Ａ遺跡，鹿屋市吾平町中尾遺跡から「多孔タイプ」「桟後付タイプ」「つつぬけタイプ」の甑が出土している。

「多孔タイプ」(図118-１）は，上苑Ａ遺跡で出土した甑の底部で孔の直径は３㎜である。須恵器の坏身が共伴しており時期は６世紀後半から７世紀初め頃と思われる。中尾遺跡で出土した甑は（図118-２)，小円孔を蜂の巣状に穿孔するもので，円孔は焼成前に穿孔されたとみられる（三垣2005)。

「桟後付けタイプ」(図118-３）は，口縁部がやや外反しバケツ形に近い。口径約25㎝，器高約20㎝の大型甑である。蒸気孔端部付近に16か所の円形の刺突痕がある。従来知られているタイプは，底部付近に一対な

いし二対以上の小円孔を穿つもので，中尾遺跡の出土例は特異である（三垣2005）。胴部には指頭による刻目突帯が１条めぐる。

「つつぬけタイプ」(図118-４～７）は，もっとも多く出土しているタイプである。「つつぬけタイプ把手無大型甑」(図118-４・５）は，竪穴住居跡から出土したもので，口径・器高は20㎝を超える。このタイプは，胴部に突帯が貼り付けられ，外面はナデ調整が施され，成川式土器の特徴がよく表れている。

以上まとめると，肝属平野は「つつぬけタイプ把手無大型甑」の出土にみられるような宮崎県地域の影響を受けている地域ではあるが，甑の製作技法においては在地性が色濃く残る地域と言えるだろう。

４　おわりに

最近の発掘調査成果から南九州の甑形土器についてみてきた。出土している甑は，様々でそれぞれ地域性があることがわかった。甑の製作技法においては，九州北部地域など他地域の影響を受けながらも，南九州の在地性がみられることが明らかとなった。中村氏は，「竈の導入や土器相の複雑さは，外来の情報や技術，慣習を南九州の人々が一様に受け入れたのではなく，地域や集落ごとに選択していた」と述べているが（中村2009），甑についてもそのことが言えそうである。

南九州でも古墳時代の竈付住居跡の検出事例が増え，それに伴う甑の出土数も以前にくらべると増えている。しかし，古墳時代の竈付住居跡は都城盆地など南九州の限られた地域でしか発見されていない。つまり，大部分は竈を伴わない住居跡である。

甑の使用法について，「住居跡中央部の地床炉（焼土域あるいは掘り込みをもつ焼土域）で使用された可能性」が指摘されたが（三垣2005），筆者も首肯すべきと考える。南九州の古墳時代の竈がほとんど検出されていない中，甑の使い方も南九州独自であったと考える。竈を用いず，甕を炉に直接あるいは石などで支えて置き，その上に甑を据えたと思われる。今後，甑にみられる使用痕など（スス付着の位置）を検討する必要があろう。

今回，甑と関連のある竈についての検討をすることができなかった。今後南九州でみられる竈と九州北部など他地域との比較を行うことで，甑の地域性はより明らかになると思われる。

【付記】本稿作成にあたり，池畑耕一氏，中村耕治氏，宮田栄二氏，上床真氏から多くのご教示をいただいた。ここに記して，感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

えびの市教育委員会　1997『田代遺跡群　上田代遺跡・松山遺跡・竹之内遺跡，妙見原遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書　第20集

えびの市教育委員会　2000『佐牛野遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書　第27集

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（87）

河口貞徳　1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号　鹿児島県考古学会

川口雅之　2007「薩摩国府推定域とその周辺の様相－近年の調査成果から－」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会

志布志市教育委員会　2008『上苑Ａ遺跡・穴倉Ｂ遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

杉井健　1999「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

杉井健　2002「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会実行委員会

中村直子　2002「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会実行委員会

中村直子　2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めて「コミュニケーションのかたち－ことば・もの・メディアー」』鹿児島大学

中村直子　2008「第Ⅵ章　上苑Ａ遺跡出土の成川式土器と須恵器について」『上苑Ａ遺跡・穴倉Ｂ遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

中村直子　2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考　中巻』南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会

三垣恵一　2005「第Ⅳ章　発掘調査のまとめ」『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（87）

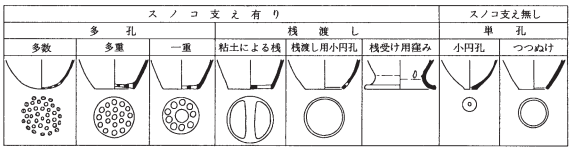
都城市教育委員会　2004『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第61集

宮田栄二　2005「第Ⅺ章まとめ　第２節古墳時代について」『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）

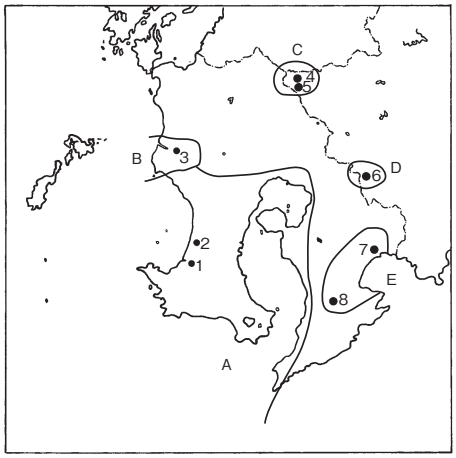
米澤英昭　2004「Ⅳまとめ」『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第61集

表41　蒸気孔の形態分類（杉井1999より）

分類		細分とその内容		蒸気孔の形態	工作方法
スノコ支え有り	多孔	多数	峰の巣状	小円孔	刺突
		多重	中央孔のまわりの周囲孔が二重以上	小円孔	刺突
				円孔	切り抜き
		一重	中央孔のまわりの周囲孔が一重のみ	(中央孔)＋(周囲孔) 針状孔 ＋ 針状孔 円　孔 ＋ 針状孔 円　孔 ＋ 台形孔 円　孔 ＋ 三角形孔 円　孔 ＋ 円　孔 円　孔 ＋ 楕円孔４孔以上 円　孔 ＋ 楕円孔３孔	切り抜き
	桟渡し	桟作り付け	粘土による桟	半月孔２孔	切り抜き
					粘土棒渡し
		桟後付け	桟渡し用小円孔		
			桟受け用窪み		
スノコ支え無し	単孔	小円孔	底部中央に１孔	小円孔	刺突
		つつぬけ	底部を作らない	つつぬけ	



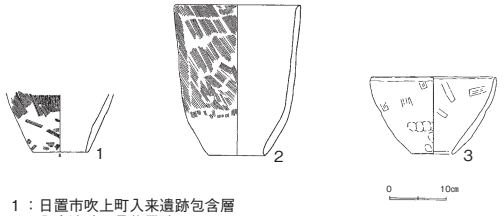
第112図　蒸気孔の形態分類模式図（杉井1999より）



A　薩摩半島および鹿児島湾岸地域
B　川内平野
C　えびの盆地
D　都城盆地
E　肝属平野

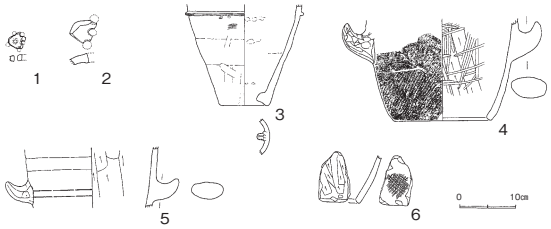
1　渡畑遺跡
2　入来遺跡
3　大島遺跡
4　佐牛野遺跡
5　上田代遺跡
6　鶴喰遺跡
7　上苑A遺跡
8　中尾遺跡

第113図　南九州の地域区分と甑形土器出土遺跡位置図



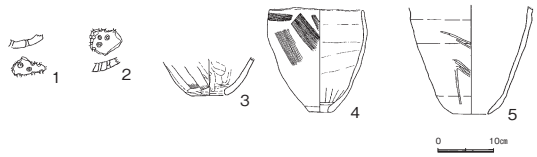
1：日置市吹上町入来遺跡包含層
2：入来遺跡６号住居跡
3：南さつま市金峰町渡畑遺跡包含層

第114図　薩摩半島及び鹿児島湾岸地域の甑形土器



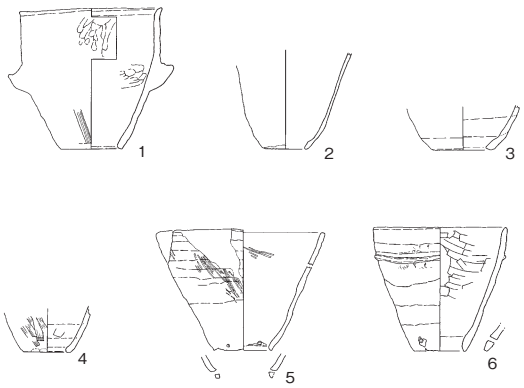
1～3，５・６：薩摩川内市大島遺跡包含層
4：大島遺跡古代竪穴状遺構

第115図　川内平野の甑形土器



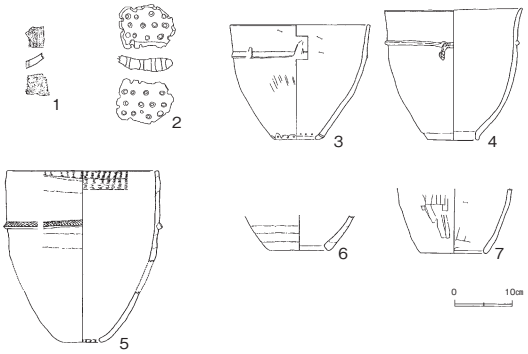
1：えびの市佐牛野遺跡SK-44
2：佐牛野遺跡包含層
3：佐牛野遺跡SA-11
4：えびの市田代遺跡８号住居
5：上田代遺跡21号住居

第116図　えびの盆地の甑形土器



1　：都城市鶴喰遺跡SA36
2　：鶴喰遺跡SA20
3　：鶴喰遺跡SA２
4・6：鶴喰遺跡SA24
5　：鶴喰遺跡SA47

第117図　都城盆地の甑形土器



1・3・7：鹿屋市吾平町中尾遺跡溝状遺構４号
2：志布志市上苑Ａ遺跡竪穴住居３
4：中尾遺跡竪穴住居跡10号
5：上苑Ａ遺跡竪穴住居５
6：上苑Ａ遺跡竪穴住居１号

第118図　肝属平野の甑形土器

第６節　畝間状遺構について

万之瀬川下流域の遺跡では，縄文時代から近世・近代のそれぞれの時代でも注目すべき内容が少なくないが，その中でも特に中世以降について注目されることが多い。ところで，万之瀬川下流域の遺跡において中世以降の調査では，どの遺跡でも検出される遺構がある。大量のピット（柱穴跡）や，溝状遺構・竪穴建物・土坑などがそうであるが，ここではもうひとつ「畝間状遺構」をあげたい。中でも，渡畑遺跡Ａ地点はほぼ全域が畝状遺構に占められているといっても過言ではない状況である。ここでは渡畑遺跡Ａ地点で検出された畝間状遺構について取り上げたい。

まず，この「畝間状遺構」は，検出された状態では数十㎝から数ｍの長さの溝状遺構が近接して検出され，かつそれぞれの溝状遺構が平行しているものである。基本的には，形状の類似性からはたけ（畠もしくは畑）の畝と畝との間につくられた「畝間」だけが残ったものであると考えられている。ただし，ほとんどの場合において畝間状遺構内からは出土遺物は発見されないし，発見されても混入品や同時代のものでない場合が多い。また，「はたけ」であるとされる場合でも，栽培種が明らかになっている場合はごく少なく，栽培種そのものの痕跡（種子・根・茎など）も残存している例は稀である。

本遺跡で検出された「畝間状遺構」でも以上のことは例外ではない。ここでは，本遺跡の畝間状遺構が「はたけ」であるという想定し以下の考察を行う。

今回の調査では，諸般の事情により全面にわたって調査を終了することができなかったため，完全に調査終了している部分は一部でしかない。ただし，完全に調査終了したエリアでは「畝間状遺構」が５層にわたって検出されたことから，最低でも５回程度は作り直されていると考えられる。軸としては，多くが北東方向に30°程度角度を持って南西方向に向かって走るという状況である。また，方位が異なる畝間状遺構もこの角度に直角に走るものが多い。基本的には一面が畝間状遺構に占められるが，ところどころには空白地帯が存在する。その多くは近代のガラスやセメント塊が混入する後世の攪乱であるが，中には肥料置き場や何らかの施設として同時期に利用されたものも含まれるかもしれない。

「畝間状遺構」の検出された層は，Ⅰｂ層からⅥｂ層にわたっている。Ⅰｂ層が小さな軽石が混入した砂層であるほかは，Ⅱ～Ⅵｂ層までいずれも砂質土層である。本遺跡の基本的な土質は砂質であるといえるので，この事実から，砂質の土壌でも栽培が可能な作物を植えていたことが想定される。

砂質土壌でも栽培できる作物には，ラッキョウ（明治以降に全国に栽培が普及）・ソバ・大麦・大根・アワ・ヒエ・サツマイモなどがある。これらの作物は，現在でも鹿児島の名産として著名なサツマイモをはじめとして，「救荒作物」として飢饉にも強いものが含まれる。特に，サツマイモは宝永２（1705）年に，前田利右衛門が民間人としてはじめて琉球から持ち帰って薩摩藩全域に伝えたものとされている。また，そのおかげで享保・天明・天保と何度も起きた飢饉でも，薩摩藩では一人の餓死者も出さなかったといわれている。

ところで，渡畑遺跡に隣接して，阿多御新田と呼ばれる新田が存在する。阿多用水路（阿多新田川）が享保10（1725）年に完成するが，伝承によれば，この御新田の開田のために渡畑付近に居住していた住民が他の場所に強制移住（立ち退き）させられたという話もある（金峰町1987・1989）。発掘成果からみても，持躰松・渡畑の各遺跡において17世紀後半以降の遺物がほぼ見られなくなることから，調査が行われた地点においてもこの頃に「生活の場」から「生産の場」に移行した可能性は高いと考える。

また，阿多用水路の完成によって，灌漑が可能となった後背湿地には乾田が形成されるわけであるが，その周囲を巡る自然堤防上は，地力が低く乾燥しているので，救荒作物の栽培を兼ねたはたけがつくられたものと推察する。そして，それが本遺跡で検出された畝間状遺構ではなかろうか。さらに，本遺跡においては川側に存在する畝間状遺構の中に，円形を呈したピット状のものもみられるので，さらに別の作物（例えば風避けのための生け垣になるもの等か）が植えられていた可能性も考えられる。ただし，遺構内から作物の痕跡が発見されていないので，以上に述べたことについてはあくまでも想定に過ぎない。

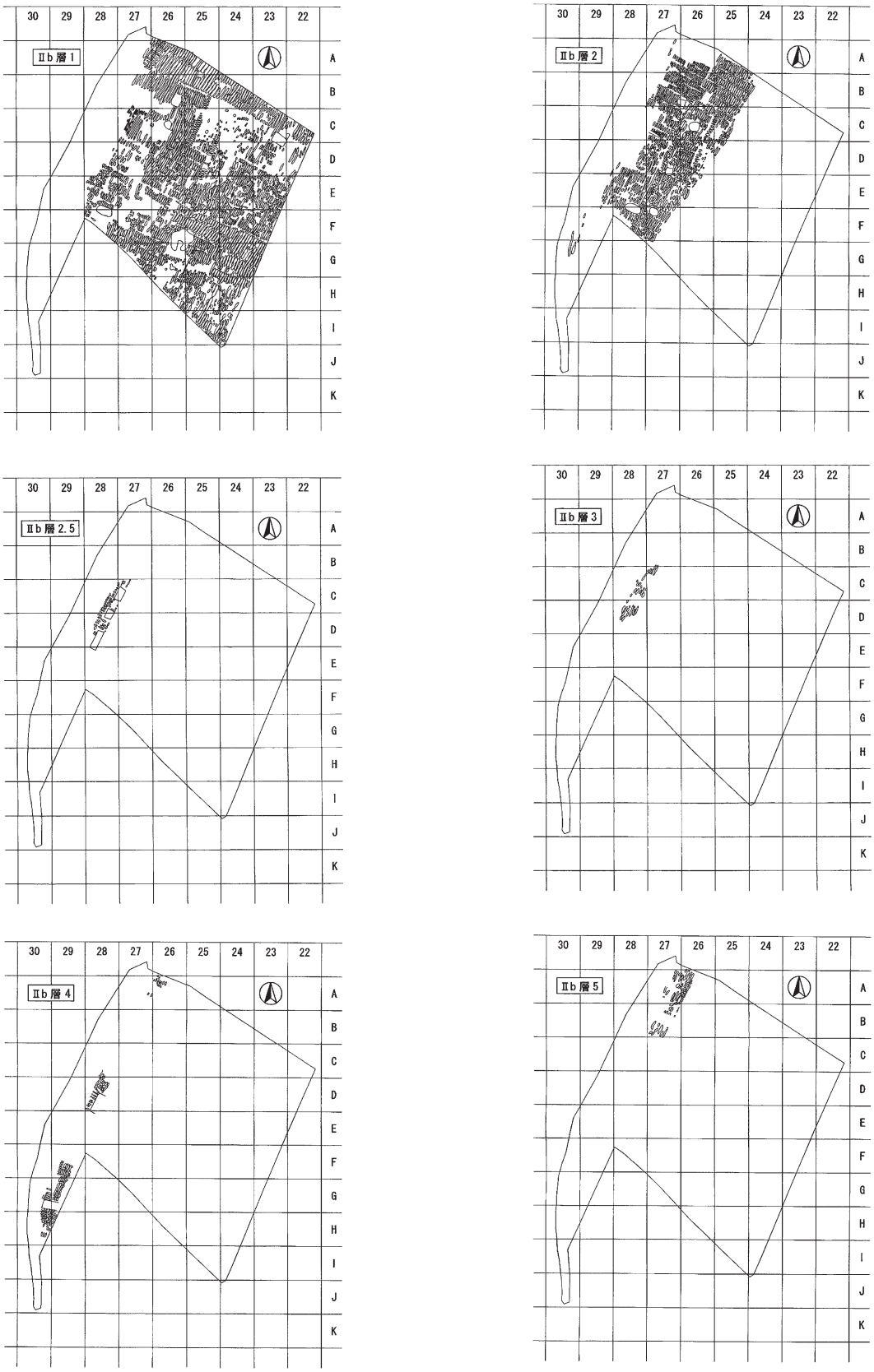
万之瀬川に暮らす人々にとっては，「飢饉」以上に「洪水」の方が脅威であったかもしれない。しかし，供水が起きるのも数十年から数百年に一回であり，実際に水害にあう地点は毎回同じではないという。つまり，洪水は頻繁なものでなく，起きるにしても前兆を察知して事前に避難するなどして対処すれば大きな脅威ではない。いわば，河川に生活する人々は自然の脅威との付き合い方を心得ていたということになる。このあたりは現代に生きる我々にとっても大いに参考となるのではなかろうか。

【参考文献】

日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会　2000『はたけの考古学』

上床真　2008「上水流遺跡とその周辺について」『上水流遺跡』２　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）

金峰町郷土史編纂委員会　1987『金峰町郷土史』(上)
1989『金峰町郷土史』(下)



第119図　畝間状遺構検出状況

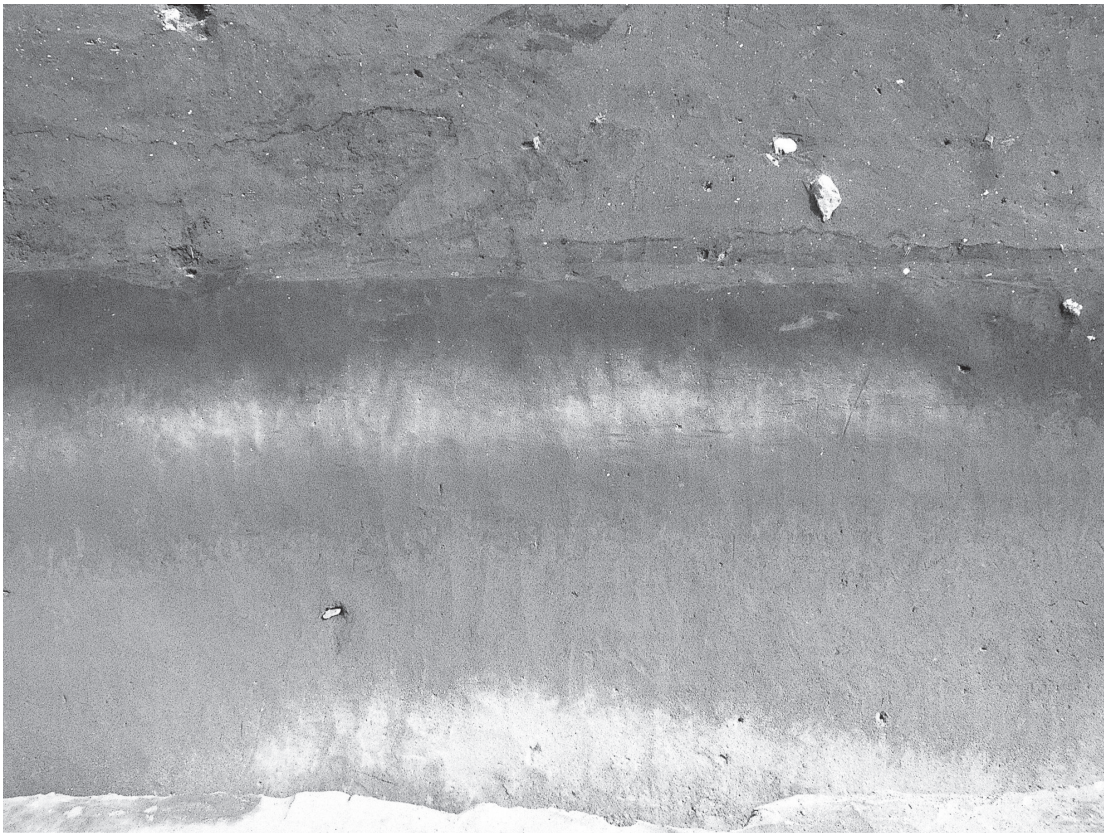
写　真　図　版

上空から見たＢ地点調査区

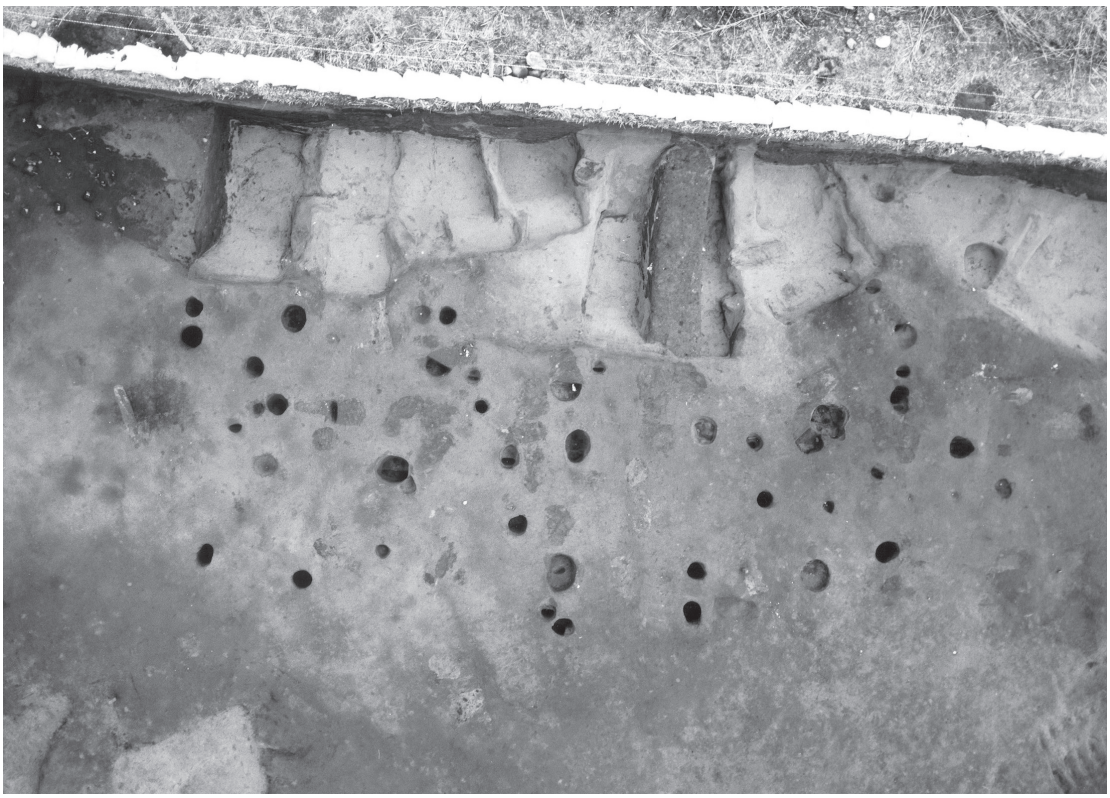
Ｂ地点調査区

図版2

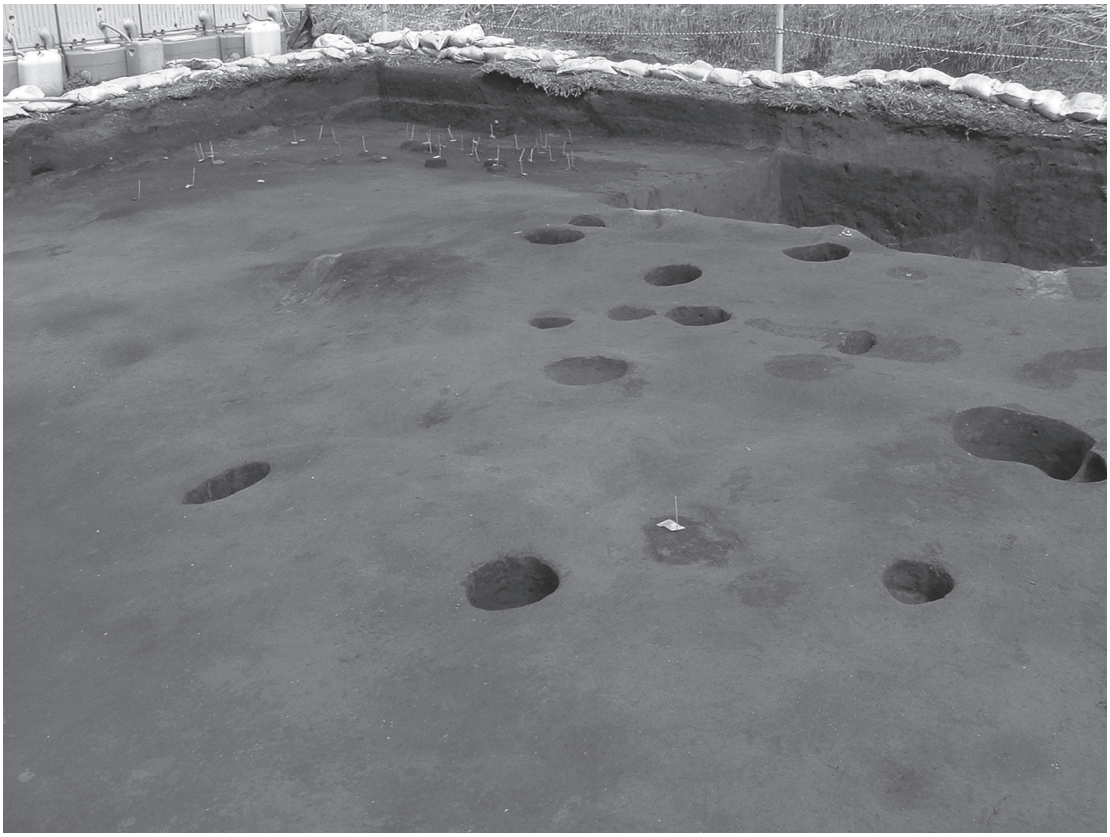
B地点北側土層断面状況



B地点東側土層断面状況

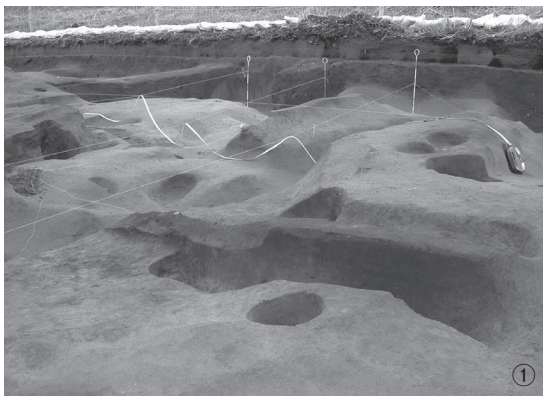


B地点遺構検出状況（1）

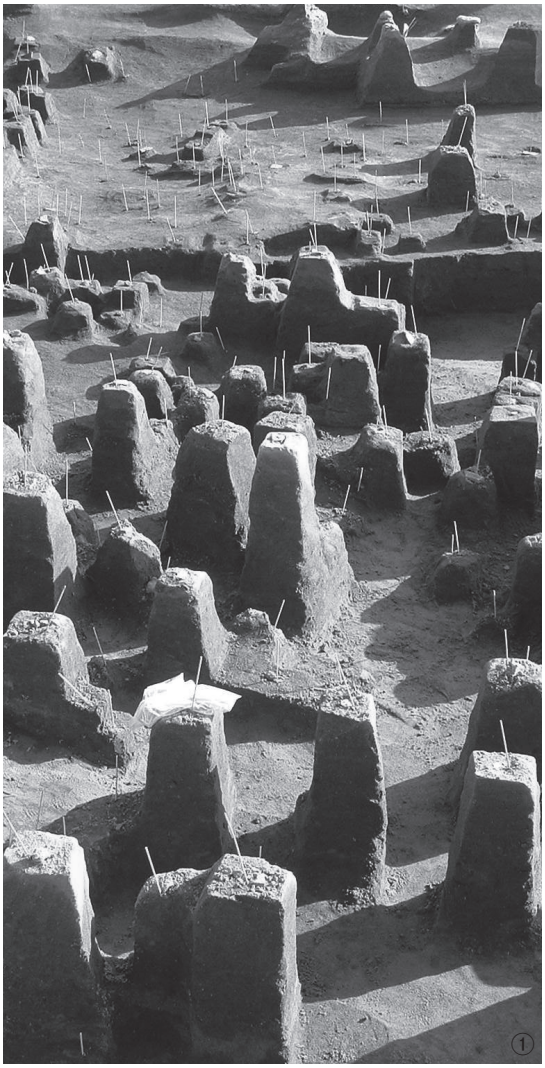


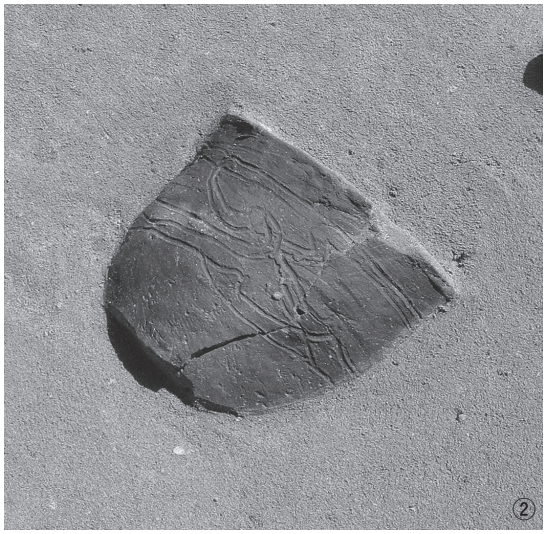
B地点遺構検出状況（2）

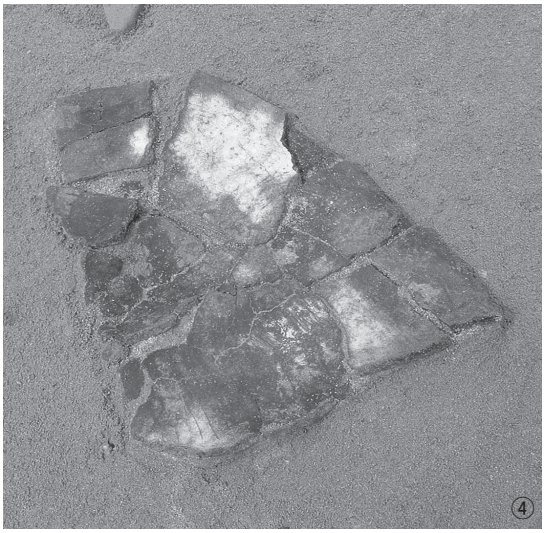
図版４



①Ｂ地点ピット検出状況（１）
②Ｂ地点ピット検出状況（２）
③Ｂ地点土坑検出状況（１）
④Ｂ地点土坑検出状況（２）
⑤Ｂ地点集石１号検出状況
⑥Ｂ地点集石２号検出状況
⑦Ｂ地点集石３号検出状況
⑧Ｂ地点焼土跡検出状況



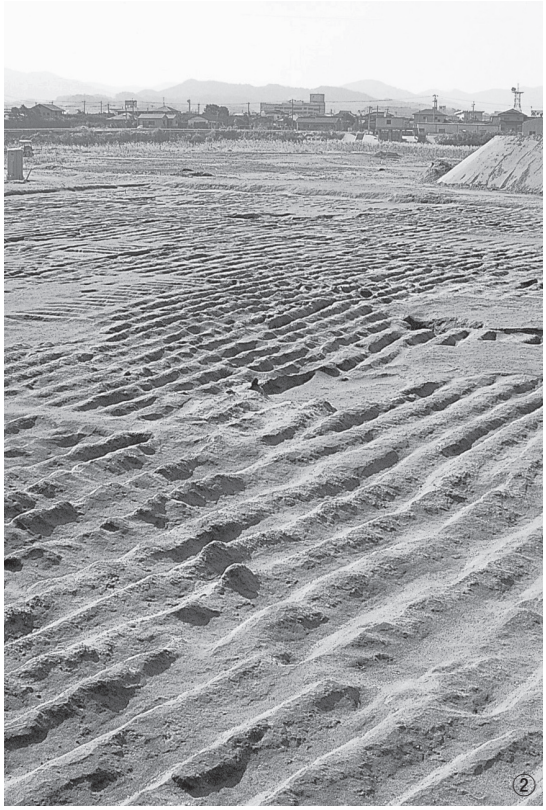


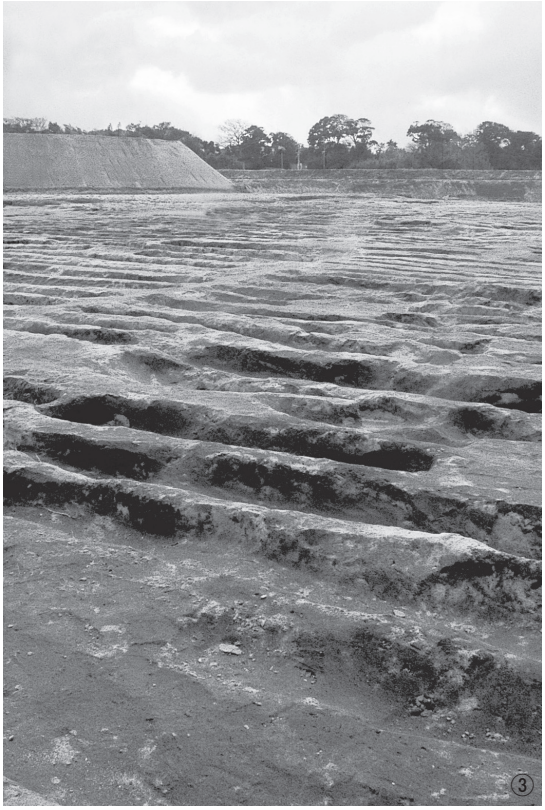


①Ｂ地点遺物出土状況（１）
④Ｂ地点遺物出土状況（４）

②Ｂ地点遺物出土状況（２）
③Ｂ地点遺物出土状況（３）
⑤Ｂ地点遺物出土状況（５）

図版6





①Ａ地点畝間状遺構検出状況（１）
②Ａ地点畝間状遺構検出状況（２）
③Ａ地点畝間状遺構検出状況（３）

428

554

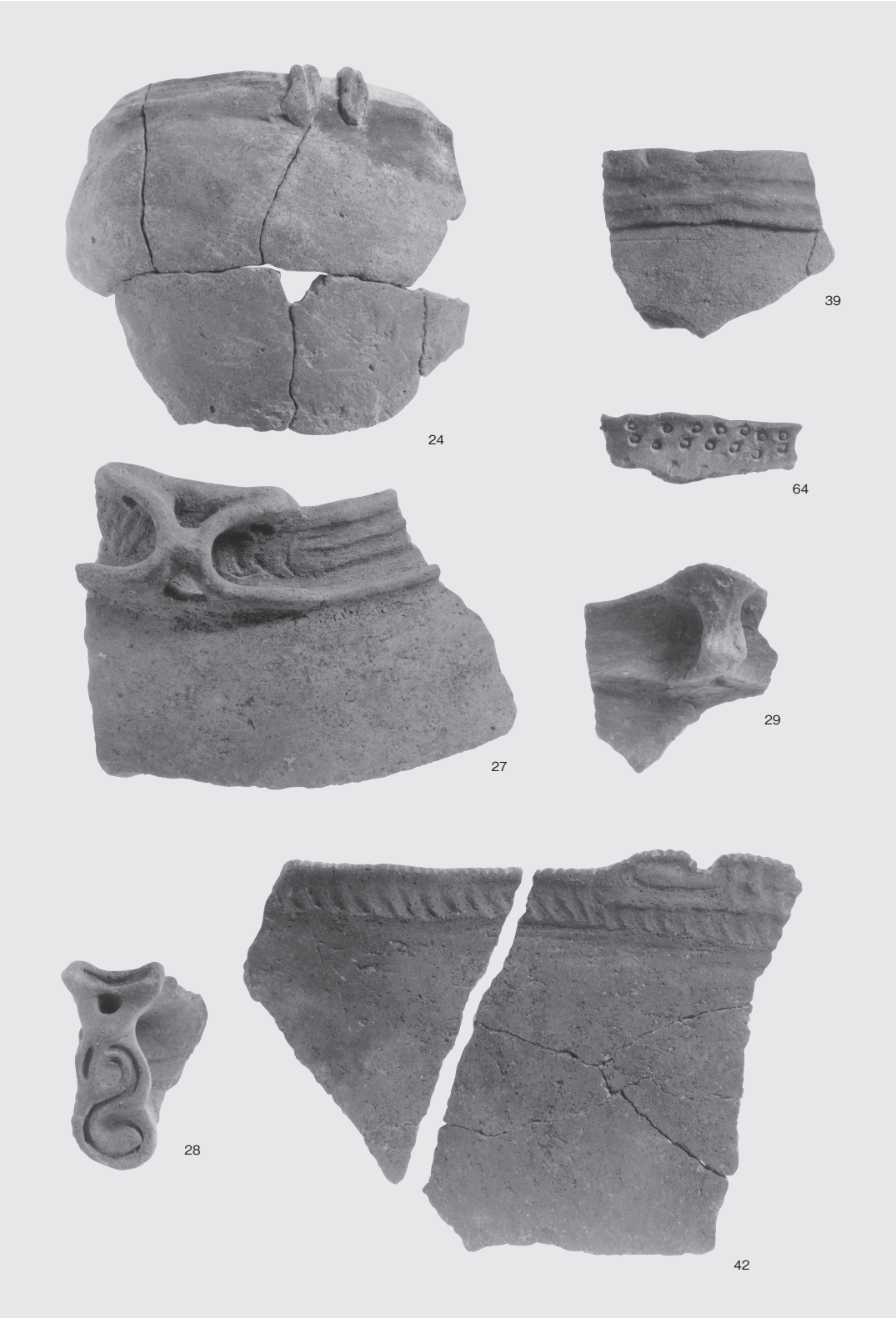
545

S3

縄文時代後期ほかの土器

図版8

縄文時代中期の土器



縄文時代中・後期の土器

図版10

縄文時代後期の土器（1）

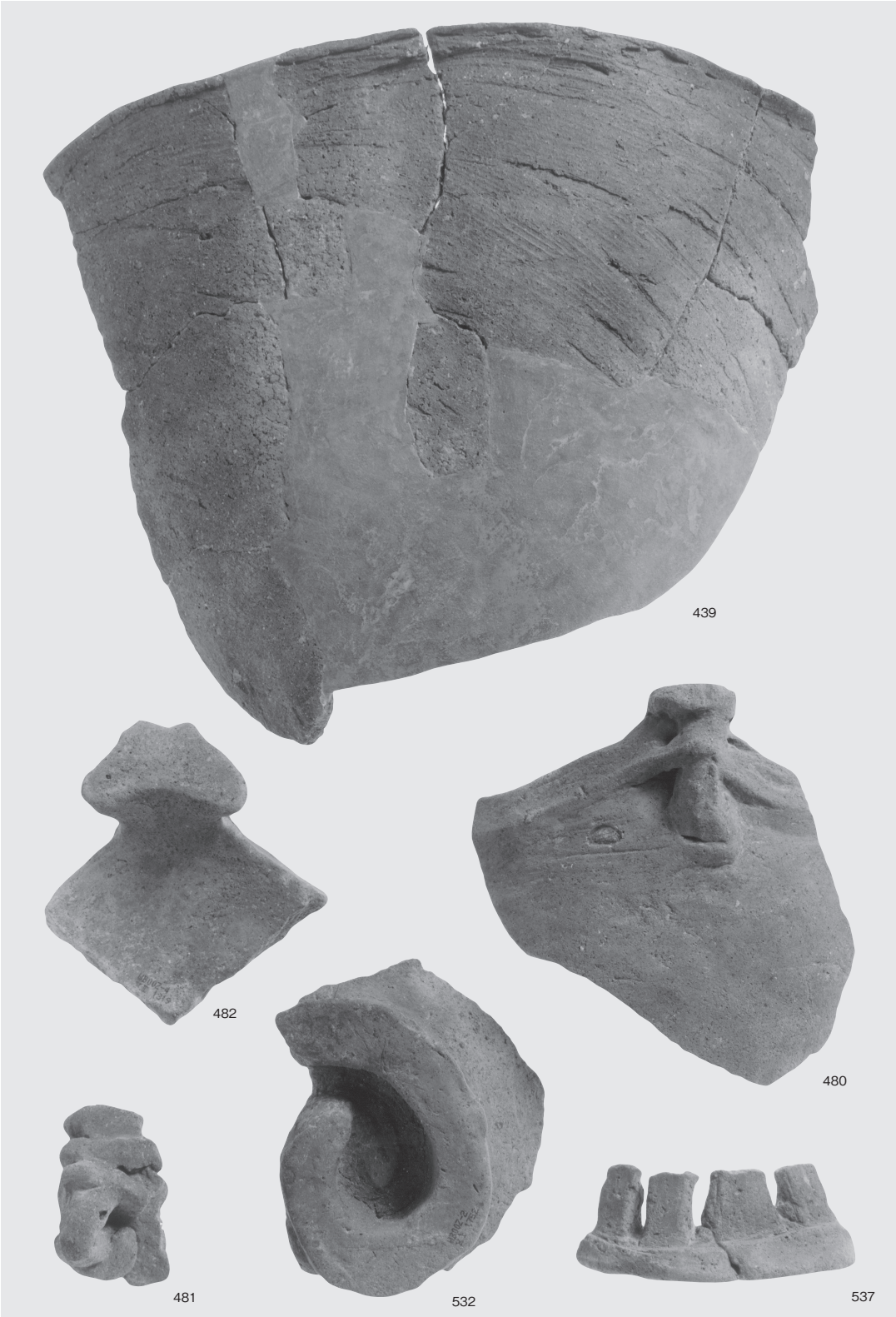
縄文時代後期の土器（2）

図版12

縄文時代後期の土器（3）

縄文時代後期の土器（4）

図版14



縄文時代後期の土器（5）

縄文時代晩期の土器